も立たれぬ程なさけない御狀態であらせられたがの意。○まぎれ　混雜、騷ぎ、どさくさ紛れの意。○う、るはしく立たせ給ひたりければ　立派に御腰がお立ちになつたので。この句は下の「この御腰の」云々に掛る副詞句。○内の燒けたるあさましさは何ならず　内裏の燒けたあさましさ――驚き入る程のなさけない事態も何でもない、問題ではないの意。これは挿入句で、「何ならず」は完全終止ではない。

その頃ほひ、熊野の御幸侍りしにも、よき上達部あまた仕うまつらせ給ふ。都出でさせ給ふ日、例の棧敷など、心ことにいどみかはすべし。車は立てぬ事なりしかど、大宮院ばかり、それも出車はなくて、只一輛にて見奉り給ひしこそ、やむごとなさも、面白く侍りけれ。辨の内侍、

をりかざすなぎの葉風のかしこさに、ひとりみちある小車のあと。

【通解】その頃に、後嵯峨院が熊野權現へ御幸が御座いましたが、その際にも、上位の上達部がどつさり御供を遊ばされた。都を御出發遊ばす日は、例の拜觀の棧敷など、格別に競ひ合ふ事でせう。物見車を立てるのは禁止でありましたが、大宮院の御車だけ、それも女房の出車はなくて、只一輛で拜觀遊ばされたのこそ、その貴さも、誠に面白う御座いました。辨の内侍の歌、

をりかざす……折りかざすなぎの葉の風の貴さ――これから御參拜になる熊野の神威の畏れ多さに、物見車は御禁止になつて、只一つついてゐる小車の跡――只一輛の女院の御車の、誠に貴くも拜せられる事であります。

【語義】○その頃ほひ　建年二年十一月十一日の事であつた。○よき　上位の、身分の高い。○棧敷　御幸拜觀のための棧敷。棧敷は凡て物見のために臨時に構へ設けるものである。○心ことにいどみかはすべし　格別入念に美々しく競走して造る事だらうの意。○車は立てぬ事　物見車は路傍に立てない事、即ち車での拜觀は禁止されたのである。○出車　女房の出衣(いだぎぬ)の車、即ち女房達の着物の裾を美々しく簾外に押出した車。○やむごとなさも　貴さも又格別でといふ思惟。○をりかざすなぎの葉風のかしこさに「なぎ」は竹柏で梛の字も書く、一位科、羅漢松屬の常綠喬木、熊野山に多く生えてゐるので、折つてかざしにさすなぎの葉の風の畏多さにというて、これから參拜する熊野の神威の畏さにの意を現はしたのである。

御幸、熊野の本宮につかせ給ひて、それより新宮の川船に奉りて、さし渡すほど、川のおもて所せきまで續きたるも、御覽じなれぬさまなれば、院のうへ、

熊野川、せぎりにわたす杉船の、へなみにそでの濡れにけるかな。

その後も、又、程なく御幸ありしかば、女院も參り給ひけり。皆人しろしめしたらむ事、なか〳〵にこそ。

【通解】御鹵簿が熊野の本宮に御着き遊ばされて、それから新宮の川船に御召し遊ばして、川を渡す頃、川の面も狹い程一杯に船の續いたのも、御見なれ遊ばされぬ趣なので、院樣は、

熊野川……＝熊野川の川瀬を堰き止めるやうにして一杯に渡す杉船の、舳に打ちかゝる波で、袖がすつかり濡れて了つたなア。

とお詠みになつた。その後にも、又、間もなく熊野へ御幸があつたので、その時は女院も御一緒に御いで遊ばしたのでした。皆さんお存知の事でいらつしやいませう。くど〳〵申上げますのも却つてネ。

【通解】○御幸　御幸の行列、鹵簿。○本宮　紀伊國東牟婁郡。新宮、那智を合せて熊野三社といふ。○新宮　熊野川の河口にある。○せぎりに　せぎる程に、即ち川瀬を遮り止める程にの意。瀬を押し切つて流れて行く義にもいふ語だが、それは自動的の趣でこゝには合はぬ。○杉船　杉材で造つた船の義ともいふ。「わたすすぎ」と語路で用ひられた趣で、强ひてその何れとも決定すべき資料は、この歌自體からは得られぬと思ふ。○へなみ　船の舳に打掛ける波。○程なく御幸　建長七年三月八日の事。○なか〳〵にこそ　一々申上げては却て煩はしからうの意。

第七　おりゐる雲

正嘉元年の春の頃より、承明門院御惱おもらせ給へば、院もいみじう驚かせ給ひて、御修法なにかと聞えつれど、遂に七月五日、御年八十七にてかくれさせ給ひぬ。ことわりの御年の程なれど、昔の御名殘と、哀にいとほしう、いたづき奉らせ給ひつるに、あへなくて、御法事など、ねむごろにおきてのたまはする、いとめでたき御身なりかし。明くる年八月七日、二の御子亀山の院坊に居たまひぬ。御年十なり。よろづ定まりぬる世の中、めでたく、心のどかに思さるべし。

【通解】正嘉元年の春の頃から、承明門院は、御病氣が重くおなり遊ばされたので、後嵯峨院も大層御驚き遊ばされて、御修法や何や彼と色々御座いましたが、とう〳〵七月五日、御年八十七でおかくれ遊ばされました。御不足のない御年配ではあるが、昔の俤を忍びまゐらせる御方として、哀においとしく、厚く御介抱申上げ遊ばされたのに、その甲斐もなく御かくれになつて、御法事など、誠に鄭重に御指圖遊ばされ

る、それは誠にどうも結構な御身の上で御座いますヨ。翌年八月七日に、第二の皇子が皇太子にお立ち遊ばされた。御年十です。何も彼もすつかり定まりきつた世の中、誠に喜ばしく、のび〳〵と御心安らかに後嵯峨院はお思ひ遊ばす事でせう。

【語義】○承明門院　後鳥羽帝の皇后、土御門の御母、後嵯峨帝の御祖母。○なにかと聞えつれど　何や彼やとなされたがの意。○ことわりの御年の程　御尤もな御年配、八十七といふ御高齢で御年に不足はないの意。○昔の御名殘　一般に、昔の俤を殘す古い御方であるからと解かれてゐるが、三神山の卷にある通り、後嵯峨院はもとこの承明門院の御許で逼促して居られたのであるから、この御祖母上を拜してはその昔を御偲び遊ばすといふ意だらうと思ふ。○いたづき奉らせ　御介抱申上げの意。○あへなくて　その甲斐なく崩御あつての意。○おきてのたまはする　後嵯峨院が指圖して嘗まれる。○御身　承明門院の御身の上。○坊　春宮坊。○めでたく　「世の中めでたく」と續けても通ずるが、「めでたく十心のどかに」思さるべし」といふ筋で、「めでたく」は下を主として、上にも渉る趣と考へられる。

かくのみ所々に御幸しげう、御心ゆく事ひまなくて、いさゝかも思し結ぼるゝ事もなく、めでたき御有樣なれば、仕うまつる人々までも、思ふ事なき世なり。吉田の院にても、常は御歌合などし給ふ。鳥羽殿には、いと久しくおはします折のみあり。春の頃、御幸ありしには、御門も、御鞠に立たせ給へり。二條關白良實あげ鞠したまひき。内の女房など召して、池の御船に乘せて、物の音ども吹き合せ、樣々の風流のわりご、引出物など、こちたき事どももしげかりき。

【通解】後嵯峨院は、只もうこんな風に所々の御幸も度々で、御愉快な事が絶え間なくて、少しも御心の晴れやらぬといふやうな事もなく、誠に結構な御有樣なので、お仕へ申上げる人々までも、何一つの物思ひもない世の中です。吉田の院でも、常日頃御歌合などを遊ばされる。鳥羽殿には、ずつと久しく御滯在遊ばす折ばかりあります。春の頃、鳥羽殿へ御幸のあつた時には、後深草帝も、蹴鞠の御遊びにお加はり遊ばされた。二條關白良實が上鞠の役をなされた。禁中の女官などを呼んで、池の御船に乘せて、色々な樂器を吹き合せ、色々の意匠を凝した破子、御祝儀の賜物など、仰山な事も繁々ありました。

【語義】○かくのみ　たゞもうこのやうに。「のみ」は強勢の助詞。○思し結ぼるゝ　御心の結ぼれる、御心配のために心が晴れぬの意。○思ふ事なき世　何等心に掛る事のない世。○吉田の院　山城國愛宕郡。○あげ鞠　上鞠。蹴鞠の中で重い役、家筋の人、堪能の人、貴い人が勤めるのである。○風流のわりご

色々と意匠を凝して面白く作つた破子の御馳走。破子は内部にしきりがあつて、料理を盛る食器。○こちたき事　事々しい事、大層な事。

嵯峨の龜山の麓、大井河の北の岸にあたりて、ゆゝしき院をぞ造らせ給へる。小倉の山のこずゑ、戸無瀬の瀧も、さながら御垣の中に見えて、わざとつくろはぬ前栽も、おのづからなさけを加へたる所がら、いみじき繪師といふとも、筆及びがたし。

【通解】嵯峨の龜山の麓で、大井河の北の岸に當つて、大層な御殿を御造營遊ばされた。小倉山の木々の枝や、戸無瀬の瀧も、そつくりそのまゝ御庭の垣の中に見えて、わざと手入した風でない自然のまゝの庭の植込みも、自然と風情を加へた場所柄の趣は、すてきに上手な繪師だつても、到底寫し出し難い。

【語義】○嵯峨の龜山　山城葛野郡。○ゆゝしき　立派な、宏大な。○戸無瀬の瀧　大井川の上流。○わざとつくろはぬ　「わざとつくろは＋ぬ」といふ筋、即ち手入れを全然しないといふ意でなく、わざと手を入れて自然の趣を害した風でないといふ意。○前栽　庭、植ゑごみ。○なさけ　情趣。

正元元年三月五日、西園寺の花ざかりに、大宮院一切經供養せさせ給ふ。年比思しおきてけるをも、いたく知しめさぬに、女の御願にて、いとかしこくありがたき御事なれば、院も同じ御心に、ゐたちのたまふ。樂屋のものども、地上も殿上も、なべてならぬをえりとゝのへらる。その日になりて行幸ゐり。春宮も同じく行啓なる。大臣上達部、皆うへのきぬにて、左右に分れて、御階の間の高欄につき給ふ。法會の儀式、いみじくめでたき事ども、まねびがたし。

【通解】正元元年三月五日、西園寺殿の花ざかりに、大宮院は一切經の供養を遊ばされた。年來斯うして一切經書寫を御計畫なされた事をも、後嵯峨院はあまり御承知なかつたのに、御婦人の御立願で、これだけの事をなされるのは、誠に畏多く得難い御事であるので、後嵯峨院も御心をあはせて、供養の事を御世話を遊ばされる。音樂をやる者達は、地下人も殿上人も、特に並々ならず優れた者を選び揃へられる。いよいよ御供養の當日になつて陛下の行幸がある。春宮恒仁親王も同樣に行啓になる。大臣や上達部は、皆袍で、左右に分れて、階隱の間の高欄の處に御着席になる。法會の儀式の、實に大層で御見事な事、筆舌の及ぶ所ではありません。

【語義】○西園寺　藤原公經の草創した北山の寺院。○一切經　大藏經、佛教に關する一切の典籍を集

めたもの。一切經の書寫を終了して行ふ法會を一切經供養といふ。○年比思しおきてけるをも　大宮院が年來一切經の書寫を御心中に御企劃なされた事をも。○いたく　あまり、そんなによくはの意。○女の御願にて　男でも容易ならぬ事だのにまして女の御立願としての意。○ゐたちのたまふ　色々と御世話をなされた、面倒を見られたの意。○樂屋のものども　音樂を奏するための建物に居る人々、卽ち音樂を奏する人々をいふ。○地下　昇殿を許されない者の稱。○御階の間　階隱の間、寢殿の正面に當る所。○まねびがたし　名狀し難い、筆舌に寫し出す事は出來ぬ。

文檢程度の良問題

又の日、御前の御あそび始まる。御門（後深草院）御琵琶、春宮御笛、まだいとちひさき御程に、びむづら結ひて、御かたちまほに美しげにて、吹きたて給へる音の、雲ゐをひゞかして、あまり恐しき程なれば、天つ少女もかくやと覺えて、太政大臣ことといみもえし給はず、目おし拭ひつゝ、ためらひかね給へるを、ことわりに、老いしらへる大臣、上達部など、皆御袖どもうるほひ渡りぬ。女院の御心の中、ましておき所なく思さるらむかし。前の世に、いかばかり功德の御身にて、かく思すさまにめでたき御榮を見給ふらむと、思ひやり聞ゆるもゆゝしきまでぞ侍りし。

【通解】　翌日、主上の御前の管絃の御遊が始まる。後深草帝は御琵琶、春宮は御笛の役、春宮はまだごく小さい御年配で、髪をみづらに結つて、御容姿もほんとにもう御美しげで、御吹き上げ遊ばされる笛の音が、空までも響かして、あまりの御上手に恐ろしくぞーッとする程なので、天女の奏する樂も斯うかと思はれて、太政大臣實氏公は、涙は不吉と思ひながら、つひ押へきれないで、目をおし拭ひおし拭ひ、ためらひ兼ねてボロ〳〵と涙を流しておいで遊ばすのを見て、如何にも御尤もの事と、年寄つてゐる大臣や上達部などは、皆一體に涙で御袖がぬれました。まして女院の御心の中は、どうしてよいやらわからぬ程に嬉しくお思ひ遊ばす事でせうヨ。前世に、どれ程の功德をお積みになつた御身で、斯うまア思ひのまゝの見事な御榮華を御覽になる事やらと、御想像申上げるのももつたいない程の事で御座いました。

【語義】　○御程に　御年齡にての意。○びむづら　「みづら」ともいふ、髮を左右に分けて結んだ童髮の稱。○まほに　一點の缺點もなくほんとに。○雲ゐをひゞかして　空まで響き渡る程での意。○ことい　みもえし給はず　お目出度い場合涙は不吉で忌むべきだが、それもようこらへられずの意。○ためらひかねて給へるを　躊躇しかねて盛に御落涙になるのを。○ことわりに　「ことわりに覺えて」の略、御尤もの事と思つて。○老いしらへる　すつかり老込んだ、おいぼれたの意、但こゝは只「老年の」の意。○おき所なく　嬉しくて心のやりばに困るやうにの意。○いかばかり功德の御身　どれ程功德を積まれた御身で。○思ひやり云々　御想像申すも勿體ない位御見事だつたの意。こゝの「ゆゝし」は忌々しの思想で、そん

な事御想像申すさへ憚ある程の御立派さと考へてよからう。「目覺しい、甚しい」といふ解は當らぬ。

御遊はてて後、文臺めさる。院の御製、

いろ〳〵に枝を連ねて咲きにけり、花もわが世も今さかりかも。

あたりを拂ひて、きはなくめでたく聞えけるに、主のおとゞ、歌さへぞかけあひて侍りしや。

いろ〳〵に榮えて匂へ、櫻花、わがきみ〴〵の千世のかざしに。

末まで多かりしかど、例のさのみはにて止めつ。いかめしうひゞきて歸らせ給ひぬるまたのあした、無量光院の花のもとにて、おとゞ、昨日の名殘思し出づるもいみじうて、

この春ぞこゝろの色はひらけぬる、六十あまりの花は見しかど。

【通解】　管絃の御遊が濟んで後に、文臺を取寄せられて歌の披講がある。院の御製、

いろ〳〵に……＝色々と枝を連ねて花が美しく咲いた、そしてわが二人の子も相並んで世に榮えてゐる、あゝ花もわが世も今全盛であるのかなア。

この御製は、四邊を壓して限りなく御見事でありましたが、主の大臣實氏公、榮華は固より歌までもこの御製と相對應して秀逸な事でしたヨ。

いろ〳〵に……＝我が君樣方の千世のかざしの御料として、北山の櫻花よ、色々に美しく榮えて咲き匂うてくれ。

ずつと末席まで人々の歌が澤山ありましたが、例のさう〳〵は煩はしいので省く事にします。大層なさわぎで賑やかに遊んで御歸り遊ばされたその翌朝、無量光院の花の下で、實氏公は、昨日の名殘を思ひ出し遊ばすにつけても、實にどうも嬉しくて、

この春ぞ……＝今日まで六十年餘の花は見たが、この春こそほんとに心が開けた、こんなに晴れ〴〵しい心で花を眺めた事はなかつた。

【語義】　○文臺　歌を披講する時、それを載せる机。○枝を連ねて　連枝の義で、當代後深草帝、東宮龜山の御兄弟をいふ。○あたりを拂ひて　他の人々の歌を壓して。讀み上げる聲がりゝしくといふ解もあるが立入り過ぎる。○きはなく　限りなく、無上に。○聞えける　あつた、或は思つたの意の敬語。聲が聞えたの意ではない。○歌さへぞかけあひて侍りしや　歌までが相對應して立派だつた。「や」は感動の助詞、「にや」とある本もあるがしつくりしない。「歌さへ」の「さへ」に「御榮えは固より歌まで」の意が含まれてゐる。○きみ〴〵　天皇、上皇、東宮を指す。○末まで多かりしかど　席末の人々まで詠んだ歌は多

かつたがの意。○例のさのみはにて止めつ　例の通り一々いふのは煩はしいからやめるの意。「尼が話したが書くのは止めた」の意でなく、從つて「つ」は强勢の趣。○いかめしうひゞきて　大層なさわぎをして。歸る時の事ではない、「いかめしう響きてきて歸らせ給ひ」の趣。○無量壽院　北山西園寺境内にある。○名殘　心に殘つた印象の意。○いみじうて　實にすてきで、非常に嬉しくて。○こゝろの色　心といふだけの意、「いろ」は花の縁語。

第八　山のもみぢ葉

正元元年十一月二十六日、讓位の儀式常の如し。十二月二十八日御卽位、よろづめでたく、あるべきかぎりにて、年もかへりぬ。おりゐの御門は、十二月の二日、太上天皇の尊號ありて、新院と聞ゆ。本院と、常はひとつに渡らせ給ひて、御遊しげう、心やりて、なか〳〵いとのどやかに、めやすき御有樣に、思しなぐさむやうなり。

【通解】　正元元年十一月廿六日、後深草帝の讓位の儀式はいつもの通り。それから十二月二十八日龜山帝御卽位、萬事誠に結構で、あるべき限りを盡されて、さて年も改まりました。御退位の後深草帝は、十二月の二日に、太上天皇の尊號があつて、新院と申上げる。本院後嵯峨院と、いつも御一緒になつて御いで遊ばされて、管絃の御遊もしげ〳〵と、御心のまゝになされて、御在位の時よりも却て誠にのび〳〵として、程のよい御有樣であるにつけ、御心の御不滿も慰められる風です。

【語義】　○あるべきかぎりにて　當然あるべき行事萬端殘らず最高限度に行はれての意。○おりゐの御

門、上皇。○常はひとつに渡らせ給ひて　常々御一緒に御住ひになつて。「常は」の「は」は例の強勢助詞。○心やりて　心ゆくまゝに催されての意と見てよからう。○めやすき　見よい、程がよいの意で、御見上げ申す方の主觀からいふ語。「御氣樂な」といふ解は語の主觀が違ふ。○思しなぐさむやうなり　御讓位の當時抱かれた御不滿の念も御晴れになる趣だの意。

かくて弘長三年二月の頃、大方の世のけしきも、うらゝかに、霞み渡るに、春風ぬるく吹きて、龜山殿の御前の櫻ほころびそむるけしき、常よりもことなれば、行幸あるべく思しおきつ。關白二條殿良實、この三年ばかり、又かへりなり給へば、御隨身ども花を折りて、行幸よりも先に參りまうけ給ふ。その外の上達部も、例のきら〳〵しきかぎり、殘るは少し。新院も、兩女院も渡らせたまふ。

【通解】　斯樣にして弘長三年二月の頃、大體の世の樣子も、誠にうらゝかに、ずうーッと霞み渡つてゐる、それに又、春風が暖く吹いて、龜山御殿の御前の櫻の咲きそめる樣子が、例年よりも格別よいので、行幸なさらうと思ひ立ち遊ばされた。關白二條良實は、この三年が程、又再び關白となつておいでになるので、御隨身どもも花折りかざすやうに美々しい出でたちで、行幸よりも先に參つて色々準備をとゝのへ遊ばされる。その外の上達部も、例の通り華美の限りを盡して、殘つてゐる人は少い。後深草院も、大宮、東二條の兩女院もおいで遊ばされる。

【語義】　○大方の世のけしきも　あたり一體の趣もの意。○うらゝかに　晴々として靜かに。○霞み渡るに　この「に」は更に又の意の「に」で、すぐ下の「春風ぬるく吹きて」に掛り、更に「龜山殿の……常よりもことなれば」の句にも響いてゐる。○ぬるく　暖に。○思しおきつ　御考をきめた、思ひ立たれた、計畫を立て給うたの意。○花を折りて　花を折りかざしたやうに美々しく裝つての意。○まうけ給ふ　用意萬端を整へ給ふ。○例のきら〳〵しきかぎり　例の如く華美の限りを盡して。○殘るは少し　お供に立たぬ人は少い。必ずしも宮中に殘つて留守番をする者は少いといふ意に限つた趣ではない。

「古き人々申すめりしまで、やゝむづかしいが良問題

御前の汀に船ども浮べて、をかしきさまなる童、四位の若きほど乘せて、花の木蔭より漕ぎ出でたるほど、になく面白し。舞樂さま〳〵、曲など手をつくされけり。御遊の後、人々歌奉る。花契遐年といふ題なりしにや。內の上の御製、

たづね來てあかぬ心にまかせなば、千とせや花のかげにすごさむ。

かやうの方までも、いとめでたくおはしますとぞ、古き人々申すめりし。かへらせ給ふ

日、御贈物ども、いとさま〴〵なる中に、延喜の御手本を、鶯のゐたる梅の造枝につけて、奉らせ給ふとて、院のうへ後嵯峨、

梅が枝に、代々のむかしの春かけて、變らず來居るうぐひすの聲。

御返を忘れたるこそ、老のつもり、うたて口惜しけれ。

【通解】　龜山殿の御前の池の汀に幾つも船を浮べて、趣深く裝つた童や、四位の若い人々を乘せて、花の木蔭から漕ぎ出て來た所は、實に類なく面白い。樣々の舞樂があつて、樂の曲などある限りの手をつくされた。その管絃の御遊の後に、人々が歌を奉る。「花契三遐年一」――花に千代萬代を契るといふ題でありましたらうか。天子樣の御製、

たづね來て……‖斯うして尋ねて來て、いつまで見ても飽く事のない心にまかせてゐたら、花の蔭で千年も過してしまふ事だらう。

斯うした歌道の方面までも、誠にすぐれて御見事にいらせられると、老人たちは申す風でした。還御の日に、後嵯峨院から帝へ御贈物が、大層色々おありなされた中に、醍醐帝の御宸筆を、鶯の止つてゐる梅の造枝につけて、差上げ遊ばすというて、後嵯峨院樣が、

梅が枝に……‖梅の枝に、代々の昔の春からずうーッと今に掛けて、相も變らず來て鳴いてゐる鶯の聲の愛らしさよ。

と御詠み遊ばした。それに對する帝の御返歌を忘れましたのは、ほんとにまア年のせいで、誠になさけなく殘念な事で御座います。

【語義】　○をかしきさまなる童　趣のある、可愛い裝ひをした殿上童。○若きほど　若い年配の者をの意。○漕ぎ出でたるほど　漕いで出た其の間の趣はの意。○になく　二になく、類なく。○舞樂　唐土傳來のもので、舞を伴つた樂。○曲　樂の曲節。○手をつくされたり　舞ぶり歌ひぶり、凡てある限りの手を盡して舞ひ奏したといふ意。○花契三遐年一　遐年は遠年の義で、花に對して千花萬代を約束するの意。○あかぬ心にまかせなば　見ても見ても飽きない、その心持のまゝに見てゐたらといふ意。○すごさむ「過したい」と解した書があるがそれは誤。○古き人々　古老の人々、老人達。○鶯のゐたる梅の造枝　鶯も梅の枝も共に造り物。斯うして贈物を木の枝に附ける習はしが一般にあつたのである。○梅が枝に云々　古今集讀人不知の「梅が枝に來居る鶯春かけて、鳴けども未だ雪は降りつゝ」を本歌とする。「春かけて」は、春に掛つて、春の間ずうーッとの意であるが、こゝは「代々のむかしの春を今に掛けて」の義に轉用してゐる。○老のつもり　年を取つたせいの意。○うたて　實になさけなくといふ嫌惡主觀の強い語。「あまりに」といふ程度の副詞と見るはルース過ぎる。

その年九月十三夜、龜山殿の棧敷殿にて、御歌合せさせ給ふ。かやうの事は、白河殿にても、鳥羽殿にても、いとしげかりしかど、いかでかさのみはにて、皆漏しぬ。この度は、心ことにみがかせ給ふ。右は關白殿にて、歌どもえりとゝのへらる。左は院の御前にて御覽ぜられける。このほど殿と申すは、圓明寺殿（又一條殿と申す）の御事なり。新院の御位の初つ方、攝政にていませしが、又この一とせばかり歸りならせ給へり。前の關白殿は、院の御方にさぶらはせ給ふ。

【通解】　その年の九月十三夜に、龜山殿の棧敷御殿で、御歌合せを遊ばされた。このやうな事は、白河殿でも、鳥羽殿でも、大層繁々ありましたが、どうしてさう〳〵一々申上げるのもなんですから、皆漏しました。この度は格別に御精選遊ばされる。右は關白殿の御手で、歌を選びとゝのへられる。左は後嵯峨院の御前で御覽あらせられる。この頃關白殿と申すのは、圓明寺殿實經公の御事です。後深草院が御位におの卽きになつた初め頃、攝政としていらせられましたが、その方が又この一年程再び關白になつていらせられるのです。前の關白良實殿は、後嵯峨院の方に侍していらせられる。

【語義】　○棧敷殿　眺望の爲め川に臨んで造つた棧敷風の御殿。○いかでかさのみはにて　さう一々話すのも煩はしいからこれまでの歌合の事は略して來たの意。○みがかせ給ふ　精選されたの意。「特別によい歌を作り」といふ解は當らぬ。○院の御前にて　後嵯峨院御自身での意。○院の御方に　院方卽ち左の方の組でいらせられるといふ意。

その外すぐれたるかぎり、右は關白殿、今出川のおほきおとゞ、皇后宮の御父の左大臣殿より下、皆この道の上手どもなり。左は大殿より、かずだてつくりて、風流の洲濱、沈にて造れる上に、銀の船二つに、いろ〳〵の色紙を書き重ねて積まれたり。數も沈にて造りて船に入れらる。左右の讀師、一度に御前に參りて讀み上ぐ。左、具氏中將、右、行家なり。山紅葉、本院の御製、

外よりは時雨もいかゞ染めざらむ、我が植ゑて見る山のもみぢ葉。

終に左御勝の數まさりぬ。

【通解】　その外歌の道に勝れたといふ勝れた方々ばかりで、又右は關白殿、今出川の太政大臣公相、皇后宮の御父の左大臣實雄以下、皆歌道の達人の方々です。左は大殿良實公から、數取りを立てる物を造つて奉つて、意匠を凝した洲濱を、沈の木で造つたのの上に、銀の船を二艘置いて、それに色々の色紙を書

き重ねて積まれてある。數取りも沈の木で造つて、やはり船に入れられる。左右の讀師が、一度に院の御前に參つて讀み上げる。左の讀師は具氏中將、右の讀師は行家です。山の紅葉といふ題で、後嵯峨院の御製、

外よりは……＝我が植ゑて眺める山の紅葉は、どうして時雨もその心して、よそより一きは美しく染めないといふ事があらう。

終に左の院方の御勝の數がまさりました。

【語義】○その外すぐれたるかぎり　院方の歌人は、前の關白殿の外何れも和歌の上手な人々ばかりでの意。○かずだて　貝刺具（しかぐさ）とて、かずを數へる時、心覺えに使ふかずとりを插して置くための具。下文に續けて書いてある沈の洲濱が卽ちそれであらう。洲濱に船二艘を据ゑ、數もその船に入れてあるといふのだから、勝負の際、船からそれを取出して洲濱に插すやうな趣向と考へられる。○つくりて　造りて奉りの意。○洲濱　島臺の類、磯山洲崎等の形を造つて臺の上に飾つたもの。○沈　香木の名。○色紙　赤や青などの色紙。今いふ色紙形の紙の事ではない。○數　數取り、數へる時の心覺えに使ふ木片などの稱。○船　前に述べた銀の船。○讀師　歌を讀み上げる役。○一度に　一時（いちじ）に、二人揃つての意。

川浪も、更け行くまゝに凄う、月は氷をしける心地するに、嵐の山の紅葉、夜の錦とは誰か言ひけむ、吹きおろす松風にたぐひて、御前の簀子にて御酒まゐるかはらけの中などに散りかゝる、わざと艶なる事のつまにもしつべし。若き人々は、身にしむばかり思へり。うち亂れたるさまに、各御かはらけども數多たび下る。明けゆく空も名殘おほかるべし。

絶好問題、有名問題

【通解】大井川の浪も、夜が更けて行くにつれてシン〳〵と胸に泌み入るやうで、月は澄みきつて地上に氷を敷いたやうな心持がする、さうした中に、嵐山の紅葉が――斯うした山の紅葉を、夜の錦などと誰がいうた事やら、どうしてどうして畫の錦ともいふべき美しさで――吹きおろす松風につれて、御前の緣で御酒を戴いて居る盃の中などに散り掛つて來る、そのさまは、殊更に色めかしく花やかな事の取合はせにもして然るべき風趣です。若い人々は、この趣深い風情を見て、ぞーッと身にしみる程に感じた。やゝ醉態を演ずるといふ風で、皆々幾度も〳〵御盃が巡る。夜の明けてゆくのも名殘多い事でありませう。

【語義】○更け行くまゝに　夜が更けて行くにつれて。○凄う　しん〳〵と澄み渡つて身に泌みるやうでの意。○月は氷をしける　和漢朗詠集秋、公乘億の「秦甸の一千餘里、凜々として氷舖けり」の句を引く。○嵐山の紅葉　嵐山、大井川の對岸。此の句は「吹き下す……散りかゝる」に掛る。○夜の錦　見る

人もなくてその甲斐がないといふ意の語、古今集秋貫之の「見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」を引く。「夜の錦」の語は、史記項羽本紀「富貴にして故郷に歸らざるは、繡を衣て夜行くが如し」に出づ。但、この文の場合は譯の如き趣の插入句、諸註甚だ不徹底だ。○たゞひて　伴ひて。○わざと　今は自然に散つて來るのだが、わざ〳〵とでもの意。○麗なる事のつまにもしつべし　男女の戀語りといふやうな色めかしく美しい事の添景にしたいやうな情趣だの意。○うち亂れたるさまに　酒に醉つてやゝ亂れた風で。○下る　ずうーッと上から下へ巡るといふ意だらう。○明けゆく空も「明けゆく空に對しても人々は」といふ文の筋。

第九　北野の雪

文永も三年になりぬ。卯月に、蓮華王院の供養に御幸あり。御願文の清書は經朝の三位、料紙は紫の色紙、額は、かの建て始められし長寛に、教長かきたりけるが、燒けざりければ、この度も、それをぞ用ひられける。

【通解】　文永も三年になつた。四月に、蓮華王院の供養に御幸がある。供養の御願文の清書は經朝の三位で、料紙は紫の色紙、お寺の額は、この蓮華王院が始めて建てられた長寛年間に、教長の書いたのが、火災の時に燒けなかつたので、今度も、それをそのまゝ用ひられたのでした。

【語義】　○蓮華王院の供養　烟の末々の卷にある通り、寶治三年に燒亡して、その後再建が出來てその供養である。○願文　供養の趣意の文言。○經朝　藤原行成の裔、世尊寺行能の子で、能書家。○料紙　用紙。○長寛　二條天皇の長寛二年十二月十五日。○教長　民部卿忠教の子で、これも能書家。

かくて、少し人々の心のどかに、うち靜まりて思さるゝに、東に、何事にか、煩し

きこと出で來にたりとて、將軍宗尊、七月八日、俄なるやうにて、御のぼりありけり。かねては、始めて御のぼりあらむ時の儀式など、になくめでたかるべきよしをのみ聞きしに、思ひかけぬ程に、いとあやしき御ありさまにて、御のぼりあり。御くだりの折、六波羅の北方に建てられたりし檜皮屋に、おちつかせおはしましぬ。この頃、東に世の中おきてはからふ主は、相模守時宗と、左京權大夫政村朝臣なり。時宗といふは、時頼朝臣の嫡子、政村とは、ありし義時の四郎なり。京の兩六波羅は、陸奥守時茂、式部大輔時輔とぞ聞ゆる。

【通解】　斯うして、少し人々の心ものんびりして、靜まり落着いて來たと思つてゐられる所へ、關東の方に、何事であるか、面倒な事が起つて來たといふ事で、將軍の宗尊親王は、七月八日に、突然甚だ急な風で、御上洛がありました。癸々は、將軍が始めて御上洛あるやうな場合の儀式など、この上もなく見事であるべき由ばかり耳にしてゐたのに、思ひも掛けぬ内に、誠にどうも妙な御有樣で、御上洛がありました。鎌倉御下向の折に、六波羅の北方に建てられた檜皮葺の家に落ちつき遊ばされた。この頃、關東で執權職として世を指圖し治めてゐるのは、相模守時宗と、左京權大夫政村朝臣です。時宗といふのは、時頼朝臣の嫡子、政村といふのは、あの義時の四男です。京都の南北兩六波羅は、陸奥守時茂、式部大輔時輔と申します。

【語義】　○少し人々の心のどかに　別段これといふ程の事もなく、一寸皆々氣が落着いた所への意。○東に云々　宗尊親王に昵近してゐた僧正良基、法印厳禁等が北條氏を滅さうとして謀の泄れた事件。○俄なるやうにて　甚だ突然といふ風で。「簡略の儀式で」と解した本もあるがそれ迄の意味は含まれてゐない。○あやしき御有樣　武士に護送された御有樣をいふ、賤しい粗末なといふよりも妙に樣子が違つてといふ感じの方が主になつてゐる。○御くだりの折　後深草帝の建長四年三月鎌倉御下向。○檜皮屋　檜の薄い皮で家根を葺いた家。○ありし　前に記したの意。○兩六波羅　原文にて「南六波羅」とあるが明かに誤と認められるから訂正して置いた。南北六波羅探題の事で、永久の亂後、北條氏は役所をこの兩所に置き探題職を以て、京都の庶政を掌らせたのである。

中務の御子の御のぼりの代に、かの御子の三になり給ふ若君達、近衛殿の姫君の御腹ぞかし、七月二十七日に、將軍の宣旨かうぶらせ給ひて、やがて四品し給ふ。經任の中

納言を御使にて、東へ下されなどして、苦しからぬ御事になりぬとて、十月ばかりに、故承明門院の御跡、土御門萬里小路殿へ御うつろひありて後ぞ、院の上、御母准后なども參り、はじめて御對面あり。さるべき人々も、參り仕うまつりなどして、世のつねの御有様にはなりにけれど、建長四年、御年十一にて御下ありし後、今迄十五年が程、にぎはゝしく、いみじうもてあがめられさせ給ひて、ゆゝしかりつる御住ひにひきかへて、もの淋しく心細うなど思さるゝ折々もありけるにや、

虎とのみもてなされしは昔にて、いまはねずみのあなう世の中。

又、雪のいみじう降りたる朝、右近の馬場の方御覽じにおはしまして、よませ給ひける、

なほたのむ、北野の雪の朝ぼらけ、あとなき事に埋もるゝ身は。

など聞えき。

【通解】　中務卿宗尊親王の御上洛の代りに、その御子様の三つにおなり遊ばす若君惟康親王、この若君は近衛兼經殿の姫君の御腹でいらつしやいますョ。この方が七月二十七日に、將軍の宣旨を御受け遊ばして、そのまゝすぐ四品の位におなり遊ばしました。經任の中納言を御使者として、關東へ下されなどして、いよいよ苦しくないといふ事になつたといふわけで、十月頃に、故承明門院の御住居の跡の、土御門萬里小路の御殿へ御移りがあつて、その後に始めて、後嵯峨院様、御母の准后なども參つて、始めて御對面がありました。然るべき人々も、何候したりなどして、親王様としての普通の御有様にはなつたのですが、然し、建長四年、御年十一で關東へ御下向あつて以來、今迄十五年の間、如何にも賑かに、非常に崇め立てられ遊ばして、實にどうも宏莊だつた御住居とはうつて變つて、何だか物寂しく心細くなど御思ひ遊ばす折々もあつたのでせうか、

虎とのみ……＝征夷大將軍として、只もう虎のやうに、畏れ敬はれたのは昔の事で、今は穴に潜んでゐる鼠のやうに、小さくなつて世に潜んでゐる、あゝ實になさけない世の中だなア。

とお詠みになつた。又、雪の大層降つた朝、右近の馬場の方を御見物においで遊ばして、御よみ遊ばした歌、

なほたのむ……＝跡方もない寃罪を負うて、そのために世に埋もれてゐる身は、同じく無實の罪に沈まれた菅公の御社、この北野の曉の雪の中に立つて、而もなほ一縷の望をもつて、再び世に出る事を祈つてゐる。

など申す事でした。

【語義】　○四品し給ふ　四品親王となり給ふ、四品は親王の位の初階に當る品位。○苦しからぬ御事に

なりぬ　鎌倉幕府との了解がついて萬事差支ない事になつたといふ意。それまでは御所らしい御所にも住まれず、院や母后との御親子の對面も差控へて謹慎して居られたといふわけである。○うつろひ　「うつり」の延音、移轉。○ゆゝしかりつる御住ひ　大さうなものであつた御住居。烟の末々の卷に「善見天の殊妙の莊嚴」云々（一七四頁）と見えてゐる。○虎とのみ云々　東方朔の語に「之を用ふれば則ち虎となり、用ひざれば則ち鼠となる」とあり、又李白の詩に「君失レ臣兮、龍爲レ魚、權歸レ臣今、虎爲レ鼠」とある、これ等をもとにした歌で、ことに「權臣に歸すれば虎鼠となる」といふ詩の句の趣はこゝによく叶ふから、それらを背景にして詠まれたのだらう。○あなう　あな憂、あゝ憂くつらい、「あな」といふ感動詞に鼠の「穴」を掛けた言葉の綾。○右近の馬場　右近衛府の馬場、一條京極の末にある。○北野　北野は菅公を祀る北野天滿宮であるから、そこで菅公の寃罪と我が身の寃罪とを思ひよそへて詠まれたのである。○あとなき事に埋もるゝ　「跡なき」「埋もるゝ」は共に雪の緣語。

大方、この御子の、歌のひじりにておはします事、皆人の口に侍るべし。「枯野の眞葛霜とけて」なども、人毎にめでのゝしる御歌なるべし。されば、世を亂らむなど思ひよりける武士の、この御子の御歌すぐれて詠ませ給ふを、夜晝いとむつまじく仕うまつりける程に、おのづから同じ心なるものなど多くなりて、宮の御氣色あるやうに言ひなしけるとかや。

【通解】　大體、この宗尊親王が、歌道の達人でいらせられる事は、皆さんが普く御存知の事でせう。「枯野の眞葛霜とけて」などいふ歌も、誰も彼もわい〳〵言つてお褒めする御歌でありませう。從つて、世を亂さうなどと思ひ寄つた武士が、この宗尊親王の御歌を見事にお詠み遊ばすので、それを奇貨として、日夜大層親しくおそばにお仕へ申上げて居た内に、自然同心の者などが多くなつて、宮の御内意があるといふ風に言ひこしらへたとかいふ事です。

【語義】　○皆人の口に侍るべし　みんなの口に有るでせう。人口に膾炙して誰もよく知つてゐる事だらうの意。○枯野の眞葛　「日影さす枯野の眞葛霜とけて、過ぎにし秋にかへる露かな」といふ歌、續古今集冬の部に出てゐる。○めでのゝしる　ほめさわぐ、やんやと賞讃する。○世を亂らむ　世を亂さう、謀反を企てようと志した武士達。○この御子の云々　宗尊親王が御歌が上手でいらせられるのをいゝ事にして、それへ附け込んで、親しく伺候して、御前で歌會を催すとか、歌を添削して戴くとかいふ口實の下に、同士が屢々會合し、同心の者も段々多くなつて事をたくらんだといふ意、但、「給ふを」の「を」は文法的には「によりて」の趣と考へてよからう。○宮の御氣色あるやうに　謀叛の事などは宮の關知し給はぬ事だ

のに、宮にさうした思召があつて、暗にその企を慫慂し給うたといふやうに、その武士どもが言ひ拵へたといふ意。「御氣色ある」は、そんなそぶりがある、そんな御内意があつてそれに基いて企てたといふ思想の語。

今年、五月雨常よりも晴間なくて、伊勢の宮河も岸をひたして、齋宮の御參も御船なり。祭主も別の船にて御供仕うまつる。道すがら、歌うたひ、絲竹のしらべなどして、面白くあそび暮す。御下の後、四とせになりぬ。古き例にまかせて、准后の宣旨まゐる。御使に中院の少將爲定朝臣下りて、事のよし申す。殿上に召して、裳、唐衣、祿たまふ。舞踏して後、都の物語など、さるべき大人だつ人々に、少し聞えかはす。

【通解】今年は、五月雨が、いつもの年よりひどく降り續いて晴間がなく、從つて伊勢の度會川も岸に水がつかつて、齋宮の神宮への御參詣も御船です。祭主も別の船で御供を申上げる。道中は、歌をうたつたり、管絃の合奏をしたりなどして、面白く遊び暮す。齋宮が伊勢へ御下向になつてから、四年になりました。古例に從つて、准后の宣旨が御座います。その御使者として中院の少將爲定朝臣が伊勢へ下つて、事の次第を申上げる。齋宮御所の殿上に召して、裳だの唐衣だのの引出物を下される。少將は御禮の舞踏をして後、京の御話など、齋宮付きの然るべきおも立つた女官達と、少し話し合ふ。

【語義】○宮河　度會川をいふ。○齋宮　「いつきのみや」ともいふ。天皇御一代毎に、太神宮に奉仕する未婚の内親王。この時は後嵯峨院の皇女愷子内親王。○御參　伊勢の齋宮御所から太神宮への御參詣。○祭主　伊勢神宮祭官の長で、中臣氏の世職。この時は隆蔭といふ人。○絲竹のしらべ　管絃即ち音樂を奏すること。○御下　齋宮伊勢へ下向。○准后　准三后又は准三宮の略、三宮（太皇太后・皇太后・皇后）に准じて年官年爵を賜はること。○裳、唐衣　何れも女房の裝束で、裳は袴の上に着るもの、唐衣は表衣の上に着るもの。○舞踏　謝禮の意を表す儀。

その同じ頃、安嘉門院、丹後の天の橋立御覽じにとておはします。それより、但馬の城崎のいでゆめしに下らせたまふ。爲家の大納言、光成の三位など、御供つかうまつらる。この女院の御ありさまぞ、又、いといみじう、來しかた行く末の例にもなりぬべく、萬の事、御心のまゝに、好ましくものし給ひける。童舞、白拍子、田樂などいふ事ことのませ給ひて、古の祐芳門院にも、やゝ勝りてぞおはします。侍ふ人々も、常に打ちと

けず、衣の色あざやかに、はな〳〵と、今めかしき院の内なり。又、安養壽院といひて、山の峰なる御堂には、常に立てこもらせ給ひて、御觀法などあるには、人の參る事もたやすくなし。鳴子をかけて引かせ給ひてぞ、おのづから人をも召しける。

【通解】　それと同じ頃、安嘉門院は、丹後の天の橋立を御見物にというて御出ましになつた。それから、但馬の城崎の溫泉へ御入浴にお下り遊ばされる。爲家の大納言や、光成の三位などが、御供を申上げられた。この安嘉門院の御有樣が、又、どうも實に大したもので、過去未來へ掛けての例ともなりさうな程に、萬事、御心のまゝで、如何にも好ましい趣でおありなされました。童舞だの、白拍子だの、田樂などいふ事をお好み遊ばされて、昔の郁芳門院にも、やゝ立ちまさつていらせられる。お仕へ申す人々も、いつも打ちくつろぐ事なく、着物の色も派手やかに、花々しくて、當世風に賑々しい院の内です。又、安養壽院というて、山の峯にある御堂には、常に御籠りになつて、悟道の御修行などあるが、その場合には、人の參る事もめつたにない。鳴子を掛けて置いて、御用の際は、その鳴子を引いて自然稀々に人をもお呼び遊ばしたのでした。

【語義】　○いでゆ　出で湯の義、溫泉。○好ましくものし給ひける　如何にも感じがよく好ましくいらせられる。「御理想通りにせられた」といふ解もあるが、こゝの「好ましく」は見る方の側の感じである。○童舞　小兒の舞ふ舞樂。○白拍子　遊女の舞、男舞ともいふ。立烏帽子に水干で腰刀をさして舞ふもの。○田樂　振鼓、銅拍子、さゝら等に合せて舞ふ樂で、もと田植後の慰勞にやつたものといふ。○郁芳門院　白河帝の第一皇女媞子、田樂を好まれた事が洛陽田樂記、中右記等に見えてゐる。○打ちとけず　色々の御儘しでくつろぐ間もないといふのか、いつも氣を使つてくつろがずにゐるといふのか、二者その一だらう。○あざやかに　はでやかに。○御觀法　悟道の行を修めること。○人の參る事もたやすくなし　御修行であるから殊更人を遠ざけ給うたといふ思想。人の來るのが容易でないから無駄をさせぬやうに云々したといふのではない。○鳴子　鳥などを追ふため田畠に掛けて引鳴すもの、こゝは呼鈴の類と考へられる。

又、その頃、大風吹きて、人々の家々、そこなはれ失する事數知らぬ中に、明堂殿もまろびぬ。この内には、木にて人形を造りて、宮殿を金にて作りて入れたる寶あり。眼をあててはは見ぬものなり。おのづからも誤りて見つる人は、目のつぶれけるぞ恐しき。陰陽寮の守護神の社もまろびぬ。山の文殊樓、稻荷の中の宮なども吹き損ひて、すべて、來し方行く末も、例ありがたき風なり。西國の方には、人の家をさながら吹きあぐ

れば、内なる人は、塵のやうに落ちて、死に失せなどしけるぞ珍らかなる。あまりにかく夥しき風なれば、御占行はれけるにも、「重き人の御つゝしみ、輕からぬ」など奏しけり。

【通解】又、その頃大風が吹いて、人々の家の、破損して了ふ事數限りない中に、明堂殿も倒壞した。この明堂殿のなかには、木で人の形を造つて、金で宮殿を作つて入れてある寶物がある。これは直接眼を向けては見ないものです。自然どうかして間違つて見た人は、目がつぶれたとは實に恐ろしい事です。陰陽寮の守護神の社も倒れた。比叡山の文殊樓、伏見稻荷の中の宮なども吹き倒されて、凡て、これからも又これからさきも、例の得難い程の風です。西國の方では、人の家をそつくりそのまゝ吹き上げると、内に居た人は、塵が落ちるやうにおつこちて、死んでしまつたなぞは、實にどうも珍しい事です。あんまり斯うひどい風なので、御占を行はれたが、その占にも、「重いお方の御謹慎、輕からぬ事であります」など奏したのでありました。

【語義】○明堂殿　典藥寮の寶物たる明堂圖を納めておく所。○木にて人形を造り　これ卽ち明堂圖で、人形に鍼灸の穴を點誌したもの。○眼にあてては見ぬものなり　直接目を向けて見てはならぬ物だの意。○おのづからも　どうかした機會でひよつとの意。○陰陽寮の守護神　陰陽寮で祀つた神で、神名は明かでない。○山の文殊樓　比叡山延曆寺東塔にあつて、一行三昧院、常住三昧院などともいふ。○稻荷の中の宮　山城國紀伊郡伏見稻荷、三社殿あつた中の中の宮。○重き人　帝王や大臣などを指す。○輕からぬ「輕からぬ御事なり」の略。

果してその頃、西園寺の太政大臣公相なやましくし給ふとて、山々寺々、修法、讀經、祭、祓へなど、かしがましくひゞきのゝしりつれど、それもかひなくて、十月十二日失せ給ひぬ。入道殿をはじめ、思しなげく人々かず知らず。中宮も御服にて出でたまひぬ。

【通解】果してその頃、西園寺太政大臣公相が御病氣に罹られたといふ事で、諸山諸寺で、修法だの、讀經だの、祭だの、祓だのと、喧しく騷ぎ立てたが、それも甲斐がなくて、十月十二日に薨去遊ばされた。父入道殿をはじめとして、御歎き遊ばす方々數限りがない。中宮も父の御服喪で宮中を御退出遊ばされた。

【語義】○果して　前を承けて、「重き人の容易ならぬ御慎みと占に出たが果してその通り」の意。○なやましくし給ふ　からだを惱むやうにし給ふの意で、病氣した事をいふ。○山々寺々　比叡山その他の諸寺で、「山々」も「寺々」もその内容は結局同じ事になる。山法師と寺法師との別のやうに、寺院の或物

は山、或物は寺と呼んだのであらう。○祭、陰陽師の御祈禱をいふ。○かしがましくひぢきのゝしりつれど、やかましく、騒がしく、わい〳〵と御本復の御祈が行はれたがの意。○御服にて出でたまひぬ　御忌服のため宮中を退出して御里方に籠つて居られるのをいふ。

第十　あすか川

ひまゆく駒の足にまかせて、文永も五年になりぬ。正月二十日、本院のおはします富小路殿にて、今上の若宮御五十日きこしめす。いみじうきよらを盡さるべし。今年正月に閏あり。後の二十日餘の程に、冷泉院にて舞御覽あり。明けむ年、一院、五十に滿たせ給ふべければ、御賀あるべしとて、今より世のいそぎにきこゆ。

【通解】　月日はどん〳〵とたつて行つて、文永も五年になつた。正月二十日に、後嵯峨院の來ていらせられる富小路殿で、今上天皇の若宮の御五十日を召上る御儀式がある。非常に善美を盡される事でせう。今年は正月に閏があつた。その後の方の月の二十日過ぎ頃に、冷泉殿で舞樂の叡覽がある。明年は、後嵯峨院が、御年五十におなり遊ばすべきにより、その御賀があるべきだといふ事で、今から世間ではその準備で忙しい事です。

【語義】　○ひまゆく駒　年月の早く過ぎる喩。漢書魏豹傳に「豹曰く、人生一世の間、白駒の隙を過ぐ

るが如し」とあつて、白駒は日影をいひ、隙は壁の隙間をいふ。卽ちこゝの原文を直解すれば「光陰の速く過ぎて行くに任せて」である。○今上の若宮　龜山天皇の皇子で、後宇多天皇とならせ給うた若宮。○五十日　五十日の御養產（うぶやしなひ）の儀式のあつたのをいふ。○後の二十日餘　閏正月の二十日過ぎ。舊曆では閏年には同じ月が二つ重なる。この年は正月が二つ重なつたその後の方の正月である。○冷泉院　冷泉萬里小路殿。後嵯峨院の御所。○御賀　年壽の祝賀。○世のいそぎにきこゆ　世の中の準備として聞えるの意。その準備が世の中の忙しい種になつてゐる——つまり世間はその準備に忙殺されてゐるといふ思想。

かやうに聞ゆる程に、むくりの軍（いくさ）といふ事おこりて、御賀（おんが）とゞまりぬ。人々口をしく、本意（ほい）なしと思（おぼ）す事かぎりなし。何事もうちさましたるやうにて、御修法（みしほ）や何やと、公家（くげ）武家（ぶけ）、たゞこのさわぎなり。されども、程なくしづまりて、いとめでたし。

【通解】　斯ういつてゐるうちに、蒙古の襲來といふ事が起つて、後嵯峨院の五十の御賀は取止めになつた。人々限りなく殘念に、不本意にお思ひ遊ばされる。何も彼もすつかり興ざめたやうな風で、敵國調伏の御祈や何やかやと、朝廷も幕府も、たゞこの事で騷ぎ立ててゐる。しかし、その事も間もなく靜まつて、誠におめでたい。

【語義】　○むくり　當時蒙古の事を稱した言葉。○うちさましたるやうにて　興ざめたやうでの意。○御修法　敵國調伏の祈禱。○公家武家　朝廷と幕府。公家はオホヤケと同じく、もと天子を申す語で、轉じては武家に對して朝廷の事をいふ。

かくて、今上の若宮（わかみや）、六月（みなづき）二十六日親王の宣旨（せんじ）ありて、おなじき八月（はつき）二十五日坊（ばう）に居給ひぬ。かく花やかなるにつけても、入道殿は、あさましく思（おぼ）さる。故大臣（おとど）の先立（さきだ）ち給ひしなげきに沈（しづ）みてのみ物（もの）し給へど、「かゝる世のけしきを、かしこく見給はぬよ」と思（おぼ）しなぐさむ。中宮は、御服（おんぶく）の後も參り給はず、萬（よろづ）ひきかへ、物うらめしげなる世の中なり。

【通解】　斯うして、今上龜山帝の若宮は、六月二十六日に親王の宣旨が下つて、同じ文永五年八月二十五日に皇太子にお立ち遊ばされた。このやうに世が花やかであるにつけても、實氏入道殿は、誠になさけなくお思ひ遊ばされる。故公相大臣が先き立つて亡くなられたその歎きに沈んでばかりいらせられるが、

而も一面には、「斯うした世の中の有様を、公相はよくぞ見られなかつたなア」と思ひ慰めていらせられる。中宮は、父公相の御服喪が果てて後も宮中へ參られず、萬事以前とは打つて變つて、物恨めしいやうな世の有様です。

【語義】　○坊に居給ふ　春宮坊に居給ふ、皇太子に立ち給ふをいふ。○かく花やかなるにつけても　かく世の中が花やかであるにつけても。下に「それが凡て皇后方なる實雄系統の御榮えであるために」といふ心持を補つて見よ。○あさましく　興ざめて、面白くなく不快に。○故大臣　入道殿の子公相の大臣。この方の亡くなつた事は北野の雪の終り(二一一頁)に見えてゐる。○かゝる世のけしきを云々　皇后方の御榮えて我が方が失意の狀態にある、さうした世の中の樣を公相が見ずに死んだのが却てよかつたの意。○萬ひきかへ　萬事中宮入内當時の花やかさとは打つて變つて。○物うらめしげなる世の中　實氏系に取つて物恨めしい世の有樣だの意。

文檢程度としてやゝ良問題

一院は、御本意遂げ給はむ事を、やう〳〵思す。その年の九月十三夜、白河殿にて月御覽ずるに、上達部、殿上人、例の多く參りつどふ。御歌合ありしかば、内の女房ども召されて、色々の引物、源氏五十四帖の心、樣々の風流にして、上達部、殿上人までも、分ちたまはす。院の御製、

我のみや影もかはらむ、あすか川おなじ淵瀬に月はすむとも。

かねてより袖もしぐれて、墨染のゆうべ色ます峯のもみぢ葉。

この御歌にてぞ、御本意の事おぼし定めけりと、皆人袖をしぼりて、聲もかはりけり。あはれにこそ。民部卿入道爲家判せさせられけるにも、「身をせめ心を碎きて、かきやる方も侍らず」とかや奏しけり。

【通解】　後鳥羽院は、御出家の御素志を御遂げ遊ばさう事を、やう〳〵にお考へ遊ばされた。その年の九月十三夜、白河殿で月見を遊ばしたが、それへ、上達部や、殿上人が、例の通り澤山參集した。御歌合があつたので、禁中の女官たちを召され、色々の引出物を、源氏物語五十四帖の卷々にちなんで、色々の意匠を凝して、上達部や、殿上人にまでも、分けて賜はられた。後鳥羽院の御製、

我のみや……＝あすか川の淵と瀬は常に變つても、その同じ淵瀬に月はいつま變らず澄み映つてゐようが、私ばかりは、やがて出家して、姿も形も變つて了ふ事であらう。

かねてより……＝やがて出家する事を思ふと、さすが浮世の名殘りをしさに、峯の紅葉が時雨で色ますやうに、かねてより我が袖は涙にぬれまさる事だ。

この御歌に依つて、御出家の御素志をいよ／＼御決心遊ばされたと知つて、人々は皆涙で袖を絞つて、聲も變つて咽び泣いたのでした。誠に哀な事です。民部卿入道爲家が歌合の勝負を批判せられたが、それにも、「身につまされ斷腸の思ひがして、何と申さうすべも御座りませぬ」とか奏したのでした。

【語義】○御本意　御出家の御素志。○白河殿　洛東、白河帝の造られた御所。○引物　引出物といふに同じ。○源氏五十四帖の心　源氏五十四帖の卷々の意味を取つて、色々の意匠を凝し、それを引出物として賜はるといふのである。○我のみや　影もかはらむ　自分ばかりは法體となつて姿も變らうの意。この「や」は輕い疑問推量の趣。○あすか川云々　飛鳥川は淵と瀬が常に變るので有名な川、淵が瀬になり瀬が淵になつても、その同じ川の淵瀬に、月は變りなく澄み映じてゐよう、それにしても云々といふ思想。○かねてより　まだ出家して墨染の衣にならぬ前からの意。○袖もしぐれて　涙で袖もぬれて。「しぐれ」は「もみぢ葉」の緣語。○墨染の　「ゆふべ」の枕詞で、同時に墨染の衣の意を掛く。○おぼし定めけりと御決心になつたとの義。○聲もかはり　涙に咽ぶをいふ。○判　歌合の歌の優劣を判じて勝負を決する事。○身をせめ云々　これは判の詞だらう。その悲しさが我が身を攻め、我が心を碎いて、悲しさの慰めやうがないといふ意で、「かきやる」は「掻き遣る」――悲しさを押しのけるの義だらうが、一方には「書き遣る」――何と批判の詞を書きやうもないの意も含まれてゐる趣と考へられる。

文檢程度の良問題

かくて神無月の五日、龜山殿へ御幸なる。今日をかぎりの御たびなれば、心ことにとゝのへさせ給ふ。新院も例のおはします。大宮、東二條、ひとつ御車にて、おなじく渡らせ給ふ。大宮女院は白菊の御衣、東二條院は青紅葉の八、菊の御小袿奉る。まづ北野、平野の社へ御まゐりあれば、御隨身ども、花ををりつくし、今日をかぎりと、樣あしきまでさうぞきあへり。兩社にて馬あげさせられけり。神もいかに名殘多く見給ひけむ。空さへうちしぐれて、木の葉さそふ嵐も、をり知り顏に、物悲しう、涙あらそふ心地し給ふ人々多かるべし。中務の御子、「今日の袂さぞしぐるらむ」と宣ひし御返、中將、

袖ぬらす今日をいつかと思ふにも、しぐれてつらき神無月かな。

【通解】斯くして十月の五日に、後嵯峨院は龜山殿へ御幸になる。今日が御在俗最後の御幸であるから、行列なども格別に御整へ遊ばされる。後深草院も例の通りにおいで遊ばす。大宮院と、東二條院と、御同車で、同じく御いで遊ばされる。大宮女院は白菊の御衣、東二條院は青紅葉の八つ襲ねに、菊の小

挂を召される。まづ北野神社、平野神社へ御參詣あると、御隨身たちは、華美を盡して、今日が最後と、却つて見つともない程に互に裝ひ飾つてゐる。兩社で馬を奉納あらせられた。神樣もどんなにお名殘多く御覽遊ばした事でせう。空までも時雨を催して、木の葉を吹き散す嵐も、折を心得顏に、如何にも物悲しくて、共々に涙を競ひ流すやうな心持のなされる人々が多い事でせう。中務宗尊親王が、「今日の袂はさぞ涙の時雨で濡れる事だらう」と仰せられた御返歌に、實冬の中將が、

袖ぬらす……＝涙の時雨で袖をぬらす今日はいつかと思ふにつけても、それは、五日も五日、空もしぐれて、誠につらいなさけない十月の五日なのです。

【語義】○今日をかぎりの御たび　今日が在俗中最後の御幸。「おんたび」の「たび」は「度」(場合)の意。○例の　例の如く。○白菊　表白、裏蘇芳といふ。○青紅葉　表青、裏黃といふ。○八　五衣を八領重ねるをいふ。○小袿　貴婦人が、裳唐衣の裝束でない時、うちかけて着る衣。○花ををりつくし　裝束に華美を極めの意。○樣あしきまでに　ざまが惡い程に、あまり飾り立て過ぎて却つて見にくい程にの意。○さうぞきあへり　裝束をし合つてゐる、互に競つて着飾つてゐる。○神も云々　後嵯峨院は今日から御出家になるその最後の參拜だから、神も名殘惜しく思はれたらうの意。○をり知り顏に　斯うした名殘多く悲しい場合を知つてゐるやうに。○涙あらそふ　時雨や木の葉と我が涙と相競つて盛に涙が出るといふ意。○今日の袂云々　後嵯峨院の御出家を悲しまれた宗尊親王の御歌の句と考へられるが、その全歌は何れにも出てゐなくて未詳。○いつか、「何時か」に「五日」を掛く

やがて、その夜、御ぐしおろし給ひぬ。御戒の師には、青蓮院の法親王まゐり給ふ。その頃、やがて御逆修はじめさせ給へば、その程、女院、いろ〳〵の御捧物ども奉り給ふ。今はいよ〳〵法の道をのみもてなさせ給ひつゝ、或時は止觀の談義、或時は眞言の深き沙汰、淨土の宗旨などをも尋ねさせ給ひつゝ、よろづに御心通ひ、暗からずものしし給へば、何事も前の世よりかしこくおはしましける程あらはれて、今行末も、げにたのもしく、めでたき御有樣なり。

【通解】そのまゝすぐ、その夜、後嵯峨院は御剃髮遊ばされた。御戒師には、青蓮院の尊助法親王が參上あらせられた。その頃、そのまゝすぐ御逆修をお始めになると、その間、大宮女院は、色々の御捧物を御獻じあらせられる。今はもういよ〳〵佛道にばかり御精進あらせられて、或時は天台の教理の談義、或時は眞言の深い教理、又淨土宗の教義などをもお尋ね遊ばされて、凡てに御心が通じて、あかるくいらせられるので、何事も如何に前世からすぐれていらせられたかといふ事が顯はれて、これからの行先きも、ほ

んとにお頼もしく、誠に結構な御有様であります。

【語義】○御ぐしおろし給ひぬ　御髪を剃り給うた。○御戒の師　授戒の導師。○青蓮院の法親王　土御門院第一皇子、天台座主。○逆修　生前にあらかじめ死後の冥福を祈るために佛事を修すること。○御捧物　僧侶の布施の料として色々の物を奉ること。○法の道をのみもてなさせ給ひ　専ら佛道を業とし給ふ、佛道に專念精進し給ふ。○止觀　摩訶止觀というて天台宗の經典の名であるが、こゝは下の眞言に對して、天台宗の意に用ひられてゐる。○談義　說法、教義を談ずること。○眞言の深き沙汰　眞言宗の深い教理。こゝの「沙汰」は「いろ〳〵の事」の義。○宗旨　宗の教義の意。○よろづに御心通ひ　凡ての宗旨に通じて暗からずいらせられたからの意。○今行末　今より行末の義で、未來の義にいふ語。「今及び行末」といふ思想ではない。

そのころほひより、法皇、時々御惱あり。世の大事なれば、御修法どもいかめしく始る。何くれと騒ぎあひたれど、おこたらせ給はで、年もかへりぬ。正月のはじめも、院の内かいしめりて、いみじく物思ひ歎きあへり。十七日、龜山殿へ御幸なる。これや限と、上下心細し。法皇は御輿なり。兩女院は、例のひとつ御車にたてまつる。尻に御匣殿さぶらひ給ふ。道にて參るべき御せむじものを、胤成、師成といふ藥師ども、御前にてしたゝめて、銀の水瓶に入れて、隆良の中納言承りて、北面の信友といふに持たせたりけるを、内野の程にて、參らせむとて召したるに、この瓶に、露ほどもなし。いとめづらかなるわざなり。さるほどの大事のものを、あしく持ちてうちこぼすやうは、如何でかあらむ。法皇も、いとゞ御臆病そひて、心細く思されけり。

【通解】その頃から、後嵯峨法皇は、時々御煩ひになつた。天下の一大事であるから、御平癒祈禱の御修法などが嚴かに始まる。何や彼やと騒ぎ合つたが、御平癒遊ばされないで、年も改つて文永九年になつた。正月の初も、院の内はひつそりと打ちしめつて、皆々非常に案じて歎き合つてゐた。十七日に、龜山殿へ御幸あらせられる。これが最後の御幸だらうかと、上下皆心細い。法皇は御輿です。大宮院と東二條院とは、例のやうに一つ御車に御召し遊ばされる。車の後方に御匣殿が侍乘しておいでになる。途中で召上るべき御煎藥を、胤成、師成といふ醫師達が、御前で調合して、銀の水瓶に入れて、中納言隆良が仰せを蒙つて、北面の武士の信友といふ者に持たせてあつたが、それを内野の邊で、法皇に差上げようとして召し寄せた所が、その瓶に、お藥は一滴もない。實に不思議な事です。それ程の大切なものを、持ち方が

悪くてこぼすなどいふ事は、どうしてあらう。法皇も、一入御氣弱の御心持が加つて、心細く御思ひ遊ばしたのでした。

【語義】○御惱　御病氣。○いかめしく　莊嚴に。○おこたらせ給はで　御なほりにならないで。○いしめりて　ひつそりと打沈んで。法皇の御病氣のために春らしい賑やかさは少しもないのをいふ。○これや限と　此度の御幸が最後であらうかと。○御輿　御腰輿。○ひとつ御車にたてまつる　御同車遊ばされる。但し「たてまつる」といふ語自體の意味は「お乘せ申上げる」といふのだらう。○尻　車の後方をいふ。○道にて參るべき　途中で召上るべき。○せむじもの　煎じ物、即ち煎じた藥をいふ。○承りて　そのお藥を途中で差上げる役を承つて、そのお藥を醫師から預りの意。○内野　大内裏の舊跡で、治承元年大内裏炎上の後、野原となつた所。○召したるに　隆良が信友を召してその藥の瓶を取上げて見たところがの意。○あしく持ちて　惡く持つて、持ち方が惡くて。○いとど御膽病そひて　兼々今度はむつかしいと思召したのに、こんな事で、いよ〳〵以て御平癒なき前兆かと、御弱い心が一入加つての意。

新院は、大井川の方におはしまして、隙なく、男女房上下となく、今のほど如何に如何にと聞えさせ給ふ、御使の、行きかへる程を、猶いぶせがらせ給ふに、正月も立ちぬ。如何様におはしますべきにかと、誰も誰も思しまどふ事かぎりなし。かねてより、かやうのためと思しおきてける壽量院へ、二月七日わたり給ふ。こゝへは、おぼろげの人は參らず。南松院の僧正、淨金剛院の長老覺道上人などのみ、御前にて、法の道ならでは宣ふ事もなし。六波羅北南御とぶらひに參れり。西園寺大納言實兼、例の奏し給ふ。

【通解】後深草院は、大井川の方においで遊ばされて、絶え間なく、侍臣や女官を上下となく遣はして、今の所の御容態はどうか〳〵と御たづね遊ばされる、その御使の、往つたり來たりする間をも、なほ氣遣ひに思つていらせられる内に、正月も過ぎました。どうおなり遊ばす事かと、誰も彼も限りなく思ひ惑うて居られる。兼々から、こんな折のためにと思ひ定めておいで遊ばした壽量院へ、二月七日に渡御遊ばされる。こゝへは、並々の人は參らない。南松院の實伊僧正、淨金剛院の長老覺道上人などばかりが、御前で、只々佛道の事のみ仰せ遊ばされる。六波羅の南北兩探題も、御見舞に參向した。それは西園寺大納言實兼が、例に依つて奏上遊ばされる。

【語義】○大井川　嵐山の下を流れる川。○男女房上下となく　侍臣にまれ、女官にまれ。上下の別な

く、誰彼といはず。○今のほど、如何に如何にと聞えさせ給ふ　今の御容態はどうかどうかと絶えずお尋ねになる。「聞えさせ給ふ」は終止のやうにも取れるが、例の聊かゆとりを持つた連體と見てよからう。○いぶせがらせ給ふ　御氣遣ひ遊ばされる。○かねてより云々　斯ういふ御病氣などの時の御用意としてきめて置かれたの意。○壽量院　龜山殿の内にある。○おぼろげの人　普通一般の人。○南松院　三井寺の内に在る。○淨金剛院　龜山殿の内に在る。○法の道ならでは宣ふ事もなし　佛道の事、即ち後世安樂の事の外には仰せ遊ばす事はないの意。○六波羅北南　この時の六波羅探題は、北は義宗、南は時輔。

十一日行幸あり。中一日わたらせ給へば、泣く〳〵萬の事を聞えおかせ給ふ。新院も御對面あり。御門は、御本性いと花やかにかしこく、御才なども昔に恥ぢず、何事もとのほりてめでたくおはします。世を治めさせ給はむ事も、うしろめたからず思せば、聞え給ふすぢことなるべし。

【通解】十一日に龜山帝の行幸があつた。中一日御滯在になると、法皇は、泣く〳〵萬端の事を申し遺してお置き遊ばされる。後深草院も法皇と御對面がある。龜山帝は、御性質がいとも花やかに御賢明で、御學才なども昔の聖天子に恥ぢず、何事も行屆いて御見事にいらせられる。これからさきざき世の中を治め遊ばす事も、何の不安もなくお思ひ遊ばすので、法皇が天皇に御遺命遊ばす筋合も、また格別の事でありませう。

【語義】○聞えおかせ給ふ　御遺命遊ばされる。○花やかに　派手々々しく、濶達でいらせられるのをいふ。○御才　御學才。○昔に恥ぢず　昔の聖天子に比しても恥しくない。○とゝのほりて　整つて、行屆いて。○うしろめたからず　不安に思ふべき點がなく。○聞え給ふすぢことなるべし　御遺命の筋合も格別だらうの意。「政治とは別の事」といふ解が普通だが、それは立入り過ぎると思ふ。梅松論に依るとこの御遺言は皇位繼承や長講堂御領等の問題で、後深草系は長講堂百八ヶ所を御領として在位の望を絶ち、龜山系累代御即位あるべしとの御遺言であつた。

十七日の朝より、御氣色かはるとて、善智識召さる。經海僧正、往生院の聖などまゐりて、ゆゝしき事ども聞え知らすべし。遂にその日の酉の時に、御年五十三にてかくれさせ給ひぬ。後嵯峨院とぞ申すめる。今年は文永九年なり。院の中くれふたがりて、闇にまよふ心地すべし。

【通解】十七日の朝から、御容態が變つたといふので、高僧たちをお召しになる。經海僧正、往生院の聖人など參つて、尊い佛の御教を色々とお話し申す事でせう。遂にその酉の時（午後六時）に、御年五十三で崩御遊ばされた。後嵯峨院と申すやうです。今年は文永九年です。院の中は眞暗になつたやうで、人々皆闇に迷つてゐるやうな心持がする事でせう。

【語義】○御氣色かはる　御樣子が變る、御容態が變る。○善智識　高僧をいふ。○往生院　嵯峨の二尊院の北。○ゆゝしき事　尊く有難い事、極樂往生の佛の御教へをいふ。○くれふたがりて　悲しさのために、一杯に眞暗になつたやうで。

「三十年が程」以下やや良問題

十八日に、藥草院に送り奉り給ふ。仁和寺の御室、圓滿院、聖護院、菩提院、青蓮院、皆御供つかまつらせ給ふ。内より頭中將御使にまゐる。三十年が程、世をしたゝめさせ給ひつるに、少しの誤なく、思すまゝにて、新院、御門、春宮、動きなく、又外樣に分るべき事もなければ、思しおくべき一ふしもなし。なき御跡まで、人の靡きつかうまつれる樣、來し方もためしなき程なり。

【通解】十八日に、御遺骸を藥草院に御送り申上げ遊ばされる。仁和寺の御室性助法親王、圓滿院圓助法親王、聖護院覺助法親王、菩提院、青蓮院慈助法親王、何れも皆御供におつき遊ばされる。内裏から頭中將實冬が御使として參る。三十年が間、世の政事をお取り遊ばしたのに、少しの御失態もなく、萬事思召しのまゝで、後深草院、龜山帝、皇太子、何れも皆院の御子孫で、更に他の御系統に分れるべき事もないから、御心殘りになるやうな點は一つもない。崩御の後までも、人々の靡きお仕へ申上げる有樣は、今迄にその例がない程であります。

【語義】○藥草院　龜山殿内に在る。御遺骸を壽量院からそこへ御遷し申上げたのである。○仁和寺の御室云々　菩提院の外何れも後嵯峨院の皇子。即ち次の系圖の通り。

後嵯峨
- 後深草
- 龜山
  - 春宮（後宇多）
  - 仁和寺の御室（性助）
- 圓滿院（圓助）
- 聖護院（覺助）
- 青蓮院（慈助）

○菩提院　延暦寺中にあり、澄覺法親王と申す御方だらう。○三十年が程　仁治三年正月二十日御踐祚、御在位四年、後深草、龜山兩代の院政二十六年であつた。○世をしたゝめ　世を治め、天下の政權を執り。○動きなく　變りなくの意。盡く皆院の御子孫でといふ思想。○又外樣に分るべき事もなければ　更に他

「天の下……ことわりにも過ぎたりしや、良問題」

の系統に皇位の移るべき事がないから。この「又」は「更に、決して」の意で打消を強めてゐる趣。

二十三日御初七日に、大宮院御髪おろさる。その程、いみじく悲しき事多かり。天の下おしなべて黒み渡りぬ。萬しめやかに哀なる世のけしきに、心あるも心なきも、涙催さぬはなし。院、内の御歎はさる事にて、朝夕睦じく仕う奉りし人々の、思ひ沈みあへる様、ことわりにも過ぎたり。その中に、經任の中納言は、人よりことに御覺ありき。年も若からねば、定めて頭おろしなむと、皆人思へるに、なよらかなる狩衣にて、御骨の御壺持ちまゐらせて參れるを、思のほかにもと、見る人思へり。

【通解】二十三日後嵯峨院の御初七日に、大宮院は御剃髪になる。この頃には、非常に悲しい事が色々澤山ある。天下一體に黒の喪服になつた。萬事しんみりとして物哀な世の有様につけて、心ある者も心なき者も、誰一人涙を催さぬ者はない。後深草院、龜山帝の御愁歎はいふ迄もない事で、朝夕院の御傍に親しくお仕へ申上げた人々の、深く思ひ沈んでゐる有様、なるほど尤もと思はれる以上であります。その中に、中納言經任は、他の人々よりも特別に御寵愛があつた。年も若くないのだから、定めて剃髪する事だらうと、みんな思つてゐたのに、平素の通りなよやかな狩衣姿で、御遺骨の御壺をお持ちして參つたのを、案外な事よと、それを見た人は思つたのでした。

【語義】○天の下おしなべて黒み渡りぬ　諒闇で、天下の人々皆喪服をつけるので、一體にぞうーッと黒くなつたのである。○萬しめやかに　すべて皆ひつそりとして。○心あるも心なきも　深き心ばへある者もなき者も。つまりは貴賤上下老若男女誰も彼もといふ思想。○ことわりにも過ぎたり　道理にも過ぎてゐる。成程尤もだと思はれる以上に非常な悲しみ方だといふ意。○御覺　御寵愛。○年も若からねば　公卿補任に依ると當時四十歳と考へられる。○なよらかなる狩衣にて　なよ〳〵とした柔い狩衣で。出家する様子もなくいつもの通りの狩衣姿での意。この場合特になよらかな狩衣を着けたといふではない。○御骨の御壺　御遺骨を納めた壺。○思のほかにも　「思のほかにもあるかな」の略。

權中納言公雄と聞ゆるは、皇后宮の御兄なり。早うより、故院、いみじくらうたがらせ給ひて、夜晝御傍去らず候ひて、明暮つかうまつらせ給ひしかば、かぎりある道にも、後らかし給へることを、若きほどに、やる方なく悲しと、思ひ入り給へり。西の對の前なる紅梅の、いと美しきを折りて、具氏の宰相中將、かの中納言に消息きこゆ。

梅のはな、春は春にもあらぬ世を、いつと知りてか咲き匂ふらむ。
かへし、
心あらば、ころもうき世の梅の花、をり忘れずばにほはざらまし。

【通解】　檜中納言公雄と申す方は、皇后宮の御兄上です。以前から、故後嵯峨院が、大層いとほしがり遊ばして、日夜御傍を去らず伺候して、朝夕御仕へ申上げて居られたので、死出の道にも、自分を一人あとにお残し遊ばした事を、若い身空に、何と心の慰めやうもなく悲しい事と、一途に深く思ひ込んでいらせられる。西の對屋の前にある紅梅の、大層美しく咲いてゐるのを折つて、具氏の宰相中將が、かの中納言公雄の許におたよりを申上げられた。

梅のはな……＝春ながら春にもあらず、天下皆悲しみに沈んでゐる時だのに、この梅の花は、今を何時と心得て斯く咲き匂うてゐる事でせう、心ない花でありますなア。

公雄中納言の御返歌、

心あらば……＝若し梅の花に心があつたら、この悲しく心憂い時に咲き匂ふ事はありますまい。ほんとに折を忘れた、心ない花でありますなア。

【語義】　○檜中納言公雄　次の系圖の通り。

實雄
- 公宗
- 公雄
- 實藤
- 信子（亀山后、後字多帝後深草妃）
- 棲子（後伏見帝）

○早うより　以前から、前々から。○らうたがらせ給ひて　可愛がり遊ばして。○かぎりある道　限界があつて共に行く事の出來ぬ道、即ち死出の道。○後らかし給へること　後に殘し給へる事、自分一人をこの世に殘して崩御遊ばした事。○若きほどに　若い身の一徹の心でといふ意。若い心で、只もう一途に悲しいといふ思想。「若いに似ず」といふ解があるが原文の表現に叶はぬ。○やる方なく悲しと　心の慰めやうもなく悲しいと。この心の悲しみはどうしたつて晴しやうはないとの意。「やる方なく」を「若きほどに」に接して「若年の身には慰みやうもなく」と解する說は當らぬ。「若き程に＝思ひ入り給へり」と續いて、「やるかたなく悲しと」が「思ひ」の補語になる筋。○春は春にもあらぬ世を　春ながらこの春は誠の春にもあらぬ世なるものをの意、○いつと知りてか　いつと思ひてかの意。○心あらば　下の「をり忘れずば」と相呼應して、心あつて今の折を忘れぬならばの意を成す。○ころもうき世　頃も憂き世、世の憂き頃の意。○をり忘れずばにほはざらまし　折を忘れたればこそ斯く咲き匂ふのだらうの意。「匂はであれかしと

也」といふ解は誤。

「夜さり對面に何事も聞えむ」といへるを、この中將も、故院の御いとほしみの人にて、同じ心なる友に覺えければ、いと哀にて、悲しき事も語りあはせむと、日ぐらし侍ち居たるに、遂に見えず。あやしと思ふに、はやその夜頭おろしてけり。齡も盛に、今も皇后宮の御兄、春宮の御伯父なれば、世覺おとるべくもあらず、思ひなしも賴もしく、ほこりかなるべき身にて、かく捨てはつる程、いみじく哀なれば、皆人、いとほしう悲しき事にいひあつかふめり。經任の中納言には、こよなき心ばへにや。父大臣も、院の御事をつきせず歎き給ふに打ち添へて、いみじと思す。

【通解】「夜分お目に懸つた時何事も申上げませう」といふ返事であつたのを見て、この具氏中將も、故後嵯峨院の御寵愛の人で、同じ心の友と思はれたので、誠に感深くて、お互に悲しい事も語り合はせようと、終日待つて居た所が、公雄中納言はとう〳〵見えない。變だと思つた所が、中納言はもはやその夜剃髪して了つたのでした。年も盛りで、現に皇后宮の御兄、春宮の御伯父なので、世間から重んぜられる事

も他に劣る筈もなく、氣のせいだけでも如何にも賴もしく、得々然たるべき身で、斯く世の中を捨て切つて了ふ心根が、實にどうも哀れなので、誰も皆、おいとしく悲しい事として取沙汰する風です。經任中納言とは、格段に違つた御氣持で得座いませうか。父の大臣實雄公も、後嵯峨院の御事を限りなくお歎き遊ばす上に、更に又斯うした事が添つて、實にどうもつらい事と御思ひ遊ばされる。

【語義】○夜さり　夜になつて。○御いとほしみの人　御寵愛の人。○同じ心なる友　心を同じうした友、同じく人一倍院の崩御を悲しみ奉る友の意。「氣の合つた友達」といふ解はやゝ外れてゐる。○日ぐらし　終日、朝から晩まで。○世覺　世間の尊崇。○思ひなしも賴もしく　さう思ふとそれだけでも如何にも賴もしい身の上の意。「思ふ」は當人でなく第三者であるが、「世間の人が推し量る所も有望であり」などいふ解は甚だピンと來ない。○ほこりかなるべき　得意顏であるべき、得々然として居るべき。○捨てはつる程　世を捨てて了つて出家する心持。「程」は「心の程」の意。○いひあつかふめり　噂し合ふやうだの意。○經任の中納言　院の崩御にて出家せぬ事が前々節に見えてゐる人。○こよなき　格段に違つた。「この上なく優れた」といふ解は語感が一寸外れる。○打ち添へて　息子の出家の事を打ち添へて。○いみじ「いみじく悲し」の意。

あはれに悲しといひつゝも、とまらぬ月日なれば、故院の御日數も程なう過ぎ給ひぬ。

問題としてより史實上留意すべき所

世の中は、新院かくておはしませば、法皇の御代に、引きうつして、さぞあらむと、世の人もおもひ聞えけるに、當代の御ひとつすぢにてあるべきさまの御おきてなりけり。長講堂領、また播磨の國、尾張の熱田の社などをぞ、御處分ありける。いづれの年なりしにか、新院、六條殿に渡らせ給ひし頃、祇園の神輿たがひの行幸ありしとき、御對面のやうを、故院へ尋ね申されたりしにも、「我と等しかるべき御事なれば、朝覲になぞらへらるべし」と申されけり。一つ腹の御兄にてもおはします。かたがたことわりなるべき世を、思の外にもと思ふ人々も多かるべし。「いでや、位におはしますにつきて、さしあたりの御政事などはことわりなり。新院にも若宮おはしませば、行末のひとふしは、などかは」など言ひしろふ。

【通解】　哀に悲しいとはいひながらも、月日は停つてゐるわけでもないので、故後嵯峨院の七七四十九日の御日數も程なく過ぎて了つた。世の中は、後深草院が斯うしていらつしやるから、後嵯峨法皇の御代りとして、こちらの方へ世の政事を引移して、萬事御取計らひになる事だらうと、世の人も思ひ申上げて居つた所が、今上龜山帝の御一系で政道を行ふべき趣の後嵯峨院の御遺詔であつたのでした。長講堂所領の莊園、又播磨の國衙の所領、尾張の熱田の社領などをば、後深草院に御分配あつたのでした。いつの年の事でしたか、後深草院が、六條殿に御いで遊ばした頃、祇園の御輿よけの行幸のあつた時、後深草院と御對面の樣式について、龜山帝から後嵯峨院へ御尋ね申された際にも、「兄ではあるが太上天皇で、その點我と等しかるべき御事だから、朝覲の儀になぞらへられて宜しからう」と申されたのでした。それに後深草院は帝と御同母の兄君でもいらせられる。かたがた當然後嵯峨院に代つて政道を御指圖あるべき世だのに、さうした御遺詔があつたとは實に意外の事だと思ふ人々も多い事でせう。「いやまア、斯うして龜山帝が御在位あらせられるにつけて、差當つての御政事を遊ばすのは御尤もである。が、後深草院にも若宮がいらせられるのだから、將來皇位御繼承の一條は、どうしてないといふ筈があらうや」などがや〳〵と言ひ合つてゐる。

【語義】　○御日數　中陰、七七四十九日。○引きうつして　世の政事を新院の方に引移して。○さぞあらむと　院政を聞しめすであらうと。○當代の云々　龜山帝の御一系で政事を取るべき旨の後嵯峨院の御遺詔。○長講堂　後白河院が六條殿内に御草創になり、その後所々造替へられた御堂で、後には所領百八十處の多きに至つた。○處分　親から子に財産を配分すること。○祇園の神輿たがひの行幸　毎年六月祇園御靈會があり、その前に御輿迎といふ事があつて、此の日神輿が旅所に御渡りになる、この渡御の道筋が

皇居の方位に當つてゐて禁忌すべき時は、主上が他所へ行幸あらせられる。この時は六條殿へ行幸あつたのである。○我と等しかるべき御事なれば　兄君も太上天皇で父たる我と變りはないからの意。○朝覲天皇が、太上天皇、皇太后を拜し給ふ儀。○かたがたことわりなるべき世を　後嵯峨院が「我と等しかるべき御事」と仰せあつた程だし、又帝の御同母兄でもありかたがた當然御院政あるべき世の中だのにの意。「後深草上皇の子孫が皇位を繼承されるのは勿論であるのに」といふ解は違ふ。「ことわりなるべき世」は前の「引きうつしてさぞあらむ」を承けた文句。○思の外にもと　案外の事かなとの意。「も」は感興强勢の助詞。○いでや　「いやもう」「いやなに」といふ趣の語。○位におはしますにつきて云々　龜山帝が御在位だから、それにつけて、當面の御政事を聞し召すのは御尤もだの意。○行末のひとふしはなどかは　將來皇位繼承の一事は必ずあるべき筈、それまで否定せられた御遺詔は不合理だの意。

かゝれば、いつしか院方、内方と、人の心々も引きわかるゝやうに、うちつけ事ども出できけり。人ひとりおはしまさぬあとは、いみじきものにぞありける。朝の御まもりとて、田村の將軍より傳はり參りける御佩刀などをも、かの御氣色の、しかおはしましけるにや、御かくれの後、やがて内裏へ奉らせ給ひにしかば、それなどをぞ、女院のうらめしき御事には、院も思ひ聞えさせ給ひける。さてしもやはなれば、このよしをも、關の東へぞのたまひ遣しける。

【通解】　こんな風であるので、いつの間にか、後深草院方、龜山帝方と、人々の心も自然二派に分れる樣になつて、思ひも掛けぬ卒爾な事も生じて來たのであつた。大事なお方が一人いらつしやらぬ跡は、どうもひどいものでありますナ。朝廷御守護の寶劍として、田村將軍から傳つて參つた御佩刀などをも、後嵯峨院の思召が、さうおありなされたからだらうか、崩御の後、その儘すぐ宮中へ奉られたので、それなどを、あまりのなされ方だと、御母女院が御恨めしい事に、後深草院もお思ひ申上げ遊ばされたのでした。何ぼ御遺詔とはいへ、その儘にもならぬ事なので、事の次第をも關東へ仰せ遣はされたのでありました。

【語義】　○引きわかるゝやうに　兩派に分れるやうになつて。○うちつけ事　卒爾唐突の事、思ひも掛けぬひどい事の意。○人ひとりおはしまさぬあとは　後嵯峨上皇崩御後の事態の甚しさを一般概念的に咏歎した趣の語。「後嵯峨院が崩御の後はひどいものである」などいふ解は原文の趣に副はぬ。○田村の將軍より云々　坂上田村麿佩用の寶劍が後に朝廷に入り代々傳へ來つたものであらう。○かの御氣色のしかおはしましけるにや　そのやうに後嵯峨院が御遺詔あらせられたからかの意。○御かくれの後　後嵯峨院崩御の後。○女院のうらめしき御事には云々　たとひ後嵯峨院の御遺詔とはいへ、おそばに在られた母大宮

院の、あまり片晶負な御取計ひだと、後深草院はお恨み申上げたといふのである。○さてしもやはなれば、御遺詔だからとて、事が重大だから、そのまゝ實行するわけには行かぬからの意。○このよし　帝位繼承は龜山一系たるべき遺詔の次第を。

内には、花山院の太政大臣、後院の別當になされて、世の中、みづからしたゝめさせ給ふ。もとより、いと花やかに、今めかしき所おはする君にて、よろづかど〳〵しうなむ。皇后宮かくれさせ給ひにし後は、盡きせぬ御歎さめがたうて、ところせき御有樣もよだけう、いかで本意をも遂げてばやなど、思されけり。故院の御はても過ぎさせ給へば、世の中色改りて、花やかに、人々の御歎の色もうすらぎ行くしも、あはれなる習なりかし。

【通解】　龜山帝には、花山院の太政大臣通雅を、御讓位後の離宮の長官になされて、世の中を、親しく御治め遊ばされる。帝は、もとより、誠に花やかで、新しい御氣分のおあり遊ばす君主で、萬事にキビ〳〵として才氣御英發といふ風であらせられる。皇后の宮が崩御あらせられた後は、限りなき御歎きがなかなか止み難くて、一天萬乘の御窮屈な御有樣も誠に臆劫に業々しいやうで、どうか兼々志した讓位の考をも果したいものだなアと思召されたのでした。その内に後嵯峨院の御一周忌もお過ぎになると、世の中の喪服の色も常の服に改つて、花やかになり、それにつれて人々の御歎きの色も薄らいで行く、いやもう哀れな世の習はしでありますなア。

【語義】　○後院　御讓位後の御座所たる離宮で、後には上皇の院政のない時にのみ置かれたもの。その長官を別當といふ。こゝは豫めその御任命があつたのである。○したゝめさせ給ふ　お治め遊ばされる。○今めかしき所　當世風の所、新しくキビ〳〵とした御氣性。○かど〳〵しうなむ　才氣が英發していらせられる。○さめがたうて　釋し難くて、止み難くての意。○ところせき御有樣　御窮屈な御有樣、帝位に在つて萬事に御窮屈な御狀態。○よだけう　「よだけく」の音便、事々しく、仰々しく。こゝは「よだけき事に思され」といふ思想。○いかで本意をも遂げてばや　どうぞ讓位の素志を遂げたきものよの意。出家の考を遂げたいの意とも取れるが、前後の趣から見て、讓位の本意と見るが自然だらう。○御はて　忌の果即ち御一周忌。○色改りて　黒の色が改つて、喪服をぬいだのをいふ。

その夏、春宮例にもおはしまさで日比經れば、内のうへ御胸つぶれて、御修法や何やと

騒がせ給ふ。和氣、丹波の藥師氏成春成ども、夜晝さぶらひて、御藥の事色々につかうまつれど、たゞ同じ樣にのみおはす。いかなるべき御事にかと、いとあさましうて、上も、つと此の御方に渡らせ給ひて、見奉られ給ふに、御目の中、おほかた御身の色なども、ことの外黄に見えければ、いと怪しうて、御虎子を召寄せて御覽ぜらる。紙を浸して見せらるゝに、いみじう濃く出でたる黄皮の色なり。いとあさましく、などかばかりの事を知り聞えざらむとて、御氣色あしければ、藥師ども、いたう畏り色を失ふ。

【通解】　その夏、皇太子は、御不例に渡らせられて、幾日もたつので、天子樣は大層お驚き遊ばされて、御祈禱や何や彼とお騒ぎ遊ばされる。和氣氏や、丹波氏の醫師たちが、夜晝御側に侍して居て、御藥の事を色々と御事へ申上げるが、御容態はたゞ同じやうでばかりいらつしやる。どうしたわけの御事であらうかと、誠に申さうやうもない次第で、龜山帝も、づッと春宮の方に御いでになつてゐて、御樣子を御覽遊ばすに、御目の中や、その他大體御からだの色なども、殊の外に黄色く見えたので、甚だ不審に思はれて、虎子を取寄せて御覽遊ばされる。その御尿の中へ紙を浸して見せられたところが、大層濃く染み出た黄皮のやうな色です。大層驚いて、何だつてこれ程の事を知らないといふ法があるかと、陛下の御氣色が惡いので、醫師共は非常に畏れ入つて顔色を失つた。

【語義】　○例にもおはしまさで　御不例で、御病氣の具合で。○御胸つぶれて　大層驚かれての意。○和氣丹波　この兩氏は累代醫を職としてゐる。氏成は典藥頭時成の子、春成は侍醫種成の子で、これは二人共和氣氏で侍醫となつたもの。○いかなるべき御事にかと　どういふわけのものであらうかと。○いとあさましうて　餘りの事に驚き呆れて、何といはうやうもない次第での意。○つと　づッと、只管に。○黄に云々　黄疸の御病氣であつたのだらう。○怪しうて　不審に思はれて。○虎子　おまる。尿を入れる器。○紙を浸して見せらるゝに　尿に紙を浸して見よとお命じになつて見せられた所がの意。○濃く出でたる黄皮の色　尿の色が濃い黄色であつたのをいふ。黄皮は高さ二三丈程になる木で、この木の皮は黄色の染料に用ひる。即ちその皮を濃く煎じ出したやうな色だといふのである。○などかばかりの事を云々　醫者として何だつてこれ程の事を知り申さぬといふ法があるかの意。後の「かばかりになりては」は「これほどの重態になつては」の意だが、こゝの「かばかりになりては」は尿が紙に黄色く染る程の明かな黄疸の症狀が分らぬといふ法があるかの意と考へられる。○御氣色あしければ　主上の御機嫌が惡かつたので。

かばかりになりては、御やいとなくては、まが〳〵しき御事いで來べしと、おの〳〵驚き騒ぐ。いまだ例なきことは、如何あるべきと、定めかねらる。位にては、たゞ一度

例ありけり。春宮にては、未だざる例なかりけれど、いかゞはせむとて、思し定む。七にならせ給へば、さらでだに心苦しき御程なるに、まめやかにいみじとおぼす。藥師と大夫君定實一人召し入れて、又人も參らず。御門の御前にて、五所ぞせさせ奉らせ給ひける。御乳母ども、いと悲しと思ひて、いぶかしうすれど、をさ〳〵ゆるさせ給はず。宮いとあつくむづかしう思せど、大夫につといだかれ給ひて、上の、御手をとらへ、よろづに慰め聞えさせ給ふ御氣色の、あはれにかたじけなさを、稚き御心に思し知るにや、いとおとなしく念じ給ふ。かくて後、程なくおこたらせ給ひぬれば、めでたく御心おちゐ給ひぬ。

【通解】　これ程の御重態になつては、御灸治をなさらなくては、忌はしい御事も出來しようと、人々皆驚き騒ぐ。まだその前例のない事は、どうしたものかと、決し兼ねられた。天皇に於ては、只一度御灸治の前例がありました。春宮としては、まだその例はなかつたけれど、非常の場合だからどうも致し方がないと、思ひ定め遊ばした。春宮は七つにおなり遊ばすので、只さへ御重患がおいたはしい御年配だのに、まして御灸までする事はほんとにどうもいたましい事だと、お思ひ遊ばされる。醫者と春宮大夫定實一人とを召し入れて、外には誰も參らない。天子樣の御前で、五ヶ所お灸をおすゑ申上げられたのでした。御乳母共は、大層悲しい事に思つて、どうか〳〵と氣遣はしがるが、帝は一寸も御許し遊ばされぬ。宮は大層熱くつらい事にお思ひ遊ばすが、春宮大夫にじつと抱かれ遊ばして、陛下が、御手を提へて、いろ〳〵とお慰め遊ばす御樣子の、しみ〴〵勿體なさを、御幼少な御心にも御承知遊ばしてか、大層おとなしくじつとこらへていらつしやる。斯うして御灸治があつた後、間もなく御平癒遊ばしたので、天皇も、誠に喜ばしく御安堵遊ばされた。

【語義】　○やいと　灸治。○まが〳〵しき御事　不吉の事、御一命にもかゝはるやうの事。○いまだ例なき事は云々　東宮としての御灸治は前例がない、さういふ前例のない事はやつてよいものかどうかと決定し兼ねられたの意。「如何あるべき」は「していゝか惡いか」の意、「どのやうに取扱ふべきか」の意ではない。○位にては　御在位中での御灸治は。○さる例　そのやうな例、御灸の例。○いかゞはせむ　どうも仕方がない、こんな御重患だから止むを得ぬ。○さらでだに心苦しき御程なるに云々　灸など据ゑないでも御重患である事が如何にも氣の毒な年頃だのに、まして灸を据ゑるのだから、ほんとにどうも氣の毒だと思召すの意。「いみじと」は「いみじく心苦しと」の略。○いぶかしうすれど　お灸など据ゑても大丈夫でせうか大丈夫でせうかと氣遣はしがるがの意。○をさ〳〵ゆるさせ給はず　少しも御許しにならぬ。乳

母などがいくら心配してもどうしても灸を据ゑる事は止めさせられないの意。○つといだかれ給ひて　下の「いとおとなしく念じ給ふ」にかゝる。

かくて今年も暮れぬ。上は、いよ〳〵世の中のあわたゞしう思されて、おりゐなむの御心づかひすめり。位におはしましては、十五年ばかりにやなりぬらむ。いまだ三十にも遙かに足らぬ程の御齢なれば、今ぞ、さかりに、若う清らなる御程なめる。

【通解】　斯うして今年も暮れた。亀山帝は、いよ〳〵世の中がさわがしく落着きなく思召して、譲位しようとの御心構をする風です。帝位にいらしつては、十五年程になりませうか。また三十にもずッと足らぬ程の御年であるから、今こそ、眞盛りで、若くお美しい頃でいらせられませう。

【語義】　○世の中のあわたゞしう思されて　天變地災等のために世の中が如何にもそゝくさと落着きのないやうに思召して。○おりゐなむの御心づかひすめり　いよ〳〵帝位を譲らうと思召して、その御心用意をされる風だ。○三十にも云々　御年二十六でいらせられた。○御程なめる　頃でいらせられると見える。「めり」は現在推量の助動詞で、「頃でせう」と婉曲にいうた趣の語。

第十一　草まくら

文永十一年正月二十六日、春宮に位譲り申させ給ふ。二十五日夜、まづ内侍所劔璽ひき具して、押小路殿へ行幸なりて、又の日、殊更に二條内裏へわたされけり。九條の攝政殿まゐり給ひて、藏人召して、禁色仰せらる。上は八にならせ給へば、いと小く美しげにて、びむづらゆひて、御引直衣、うち御衣、はりばかま奉れる御氣色、おとな〳〵しう、めでたくおはするを、花山院内大臣扶持し申さるゝを、故皇后宮の御兄公守の君などは、あはれに見給ひつゝ、故大臣、宮などのおはせましかばと思し出づ。

【通解】　文永十一年正月二十六日に、亀山帝は、春宮に帝位を御譲り遊ばされる。二十五日の夜、亀山帝は、まづ以て三種の神器を携へて、一旦押小路の御殿へ行幸になつて、翌日、殊更にそこから二條内裏の春宮の方へ神器をお渡しになつたのでした。九條の攝政忠家公が參られて、藏人を召して、禁色の宣旨を仰せ下される。新帝後宇多帝は八つにおなり遊ばすので、誠に小さくお可愛らしい御樣子で、みづらを

結つて、御引直衣に、打絹の御衣を召され、張袴をおつけ遊ばした御樣子が、如何にも大人つぽく、御見事にいらせられるのを、花山院内大臣師繼が色々御世話申して居られる、それを見て、故皇后宮の御兄公守君などは、しみ〴〵感深くお思ひ遊ばされて、故大臣實雄公や、御母后の宮などが御在世だつたら、どんなにお悦びだらうにと、思ひ出し遊ばされる。

【語義】○内侍所劔璽　八咫鏡と御劔と御玉、卽ち三種の神器。○二條内裏　二條の南、押小路の北。○藏人　殿上に近侍して雜事に從ふ役。○禁色仰せらる　裝束に禁制の色織物を用ひる事を聽許せられる旨の宣旨。踐祚の際の一つの御儀。○びむづら　「みづら」を訛つた語。少年の結髮の風で、髮を耳の上に肇の軸程に結んで、耳の前に垂れるもの。○御引直衣　天皇や上皇の御常用の御裝束。○うち御衣　打つた絹の御下衣。○はりばかま　張つた平絹の袴。○扶持し申さる　附添つて御世話を申上げる。○おはせましかばと　若し御在世であつたらどんなに御悦びになるであらうかと。

本院は、故院の御第三年のこと思し入りて、睦月の末つ方より、六條殿の長講堂にて、哀にたふとく行はせたまふ。御指の血をいだして、御手づから法華經など書かせ給ふ。衆僧も、十餘人がほど召しおきて、懺法などよませらる。御おきての思はずなりしつらさをも、おぼし知らぬにはあらねど、それもさるべきにこそはあらめと、いよ〳〵御心をいたして、懇にけうじ申させ給ふさま、いとあはれなり。新院も、いかめしう、御佛事嵯峨殿にて行はる。

【通解】後深草院は、故後嵯峨院の御三周忌の事を深く御考へになつて、正月の末頃から、六條殿の長講堂で、しみ〴〵と感深く尊く法會を行ひ遊ばされる。御指の血を出して、御親ら法華經などを御書き遊ばされる。法會に參する僧も、十餘人程召し置いて、法華懺法などを讀ませられる。後嵯峨院の御遺詔の實に意外だつたなさけなさをも、お思ひにならぬではないが、それも然るべき宿緣に違ひないと、いよ〳〵御心をこめて、懇に孝道を盡して御供養遊ばされる樣は、誠に感に堪へぬ事であります。龜山院も、莊嚴に、御佛事を嵯峨殿で行ひ遊ばされる。

【語義】○思し入りて　深く御心に掛けられて。○御指の血をいだして　御指を刺して血を出し、血書あらせられたのである。○衆僧　御法事の時招請せられる僧をいふ。○懺法　法華懺法。故人の滅罪のために讀む懺悔の文をいふ。○御おきて云々　御指圖卽ち後嵯峨院の御遺詔が案外だつた事をつれなくなさけなく思ふ事をいふ。天下の政道は龜山の一系たるべしとの御遺詔をいふ。(二二七頁參照)。○おぼし知

らぬにはあらねど　お思ひ知らぬではないが、御心の中に思ひ給はぬではないがの意。○それもさるべきにこそはあらめと　それもさうあるべき前世からの因縁であらうと。○けうじ　孝の字音で、孝道を盡すの義、それから轉じて、專ら亡き父母の爲に追善供養する事にいふ、それも亦孝道だからである。

新院は、世をしろしめす事かはらねば、よろづ御心のまゝに、日頃ゆかしくおぼしめされし所々へ、いつしか御幸しげう、花やかにて過させ給ふ。いとあらまほしげなり。本院は、猶いとあやしかりける御身の宿世を、人の思ふらむ事もすさまじう、思しむすぼほれて、世を背かむのまうけにて、尊號をもかへし奉らせ給へば、兵仗をも止めむとて、御隨身どもめして、祿かづけ、暇たまはするほど、いと心細しと思ひあへり。大方のありさまうち思ひめぐらすも、いと忍び難き事多くて、内外の人々、袖どもうるほひわたる。院も、いと哀なる御氣色にて、心づよからず。今年三十三にぞおはします。

【通解】　龜山院は、世の政道を御執りになる事は御在位の時と變らぬので、萬事御心のまゝで、兼々見てみたいと思召された所々へ、いつの間にか御幸が繁々とあつて、花やかに過していらせられる。まことに結構な御樣子です。後深草院は、やはり誠に拙かつた御身の御宿緣を、世の人の思惑の程も誠に不興で、轉々として深く心に不快に思召されて、出家して了はうとの御心構へで、太上天皇の尊號をも返上遊ばされたので、護衛の武士をもよさうとして、御隨身共を召して、纒頭の物を下賜せられ、お暇を賜はる、その程は、皆々誠に心細い事に思ひ合つてゐた。大體の院内の有樣を思ひめぐらすにつけても、誠にこらへられぬ悲しい事が多くて、院の内外の人々は、何れも皆涙で袖を濡した。後深草院も、誠に哀な御樣子で、御氣强くもいらせられぬ。今年三十三でいらせられる。

【語義】　○世をしろしめす事かはらねば　依然として院政を執り給ふをいふ。○ゆかしくおぼしめされし所　行つて見たいと深く興味を持つておいでになつた所。○あらまほしげなり　かうありたいと思はれるやうな風だの義で、望ましく羨ましく理想的な御樣子だの意。○いとあやしかりける御身の宿世　我が御子孫は皇位を繼承する事が出來ぬといふやうな誠になさけなくつまらぬ我が身の御宿緣。○人の思ふらむ事もすさまじう　人が色々と思ふであらう、その思惑を考へて實に不興での意。○思しむすぼほれて　深く心に不快に思つて、轉々として樂まれず。○世を背かむのまうけにて　出家しようとの御用意で。○尊號　太上天皇の尊號。○兵仗をも止めむとて　護衛の隨身をも辭せんとして。○大方のありさまうち思ひめぐらすも　院中の一體の有樣を色々と考へて見るにつけても。○忍び難き事　堪へ難く御氣の毒で悲しい事。○内外の人々　院内院外の人々。院にお仕へしてゐる人々は勿論、院外の人々までもといふ思想。

○心づよからず　つい氣がよわくなつて御涙も出るといふやうな趣の語。

故院の、四十九にて御髪おろし給ひしをだに、さこそは誰も〳〵惜み聞えしか。東の御方もおくれ聞えじと、御心づかひし給ふ。さならぬ女房、上達部の中にも、とりわき睦じうつかまつる人三四人ばかり、御供つかまつるべき用意すめれば、ほど〳〵につけて、私も物心細う思ひ歎く家々あるべし。かゝる事ども、あづまにも聞え驚きて、例の陣のさだめなどやうに、これかれあまた武士ども、よりあひよりあひ評定しけり。

【通解】故後嵯峨院が、四十九で御剃髪遊ばしたのをすら、あんなにまア誰も〳〵お惜み申上げたのでしたのにネ。院の妃東の御方も、院の御出家におくれず御一緒に御内家遊ばさうと、御心構へを遊ばされる。その外の女官や、上達部の中にも、とりわけ親しく院にお仕へしてゐる人三四人許り、院の御出家のお供を致すべき用意をする風なので、その程々につけて、さうした個人方面にも物心細く歎き悲む家々もある事でせう。斯うした樣々の事が、關東の方にも聞えて、關東側でも驚いて、例の朝廷に於ける陣の座の評定などのやうな風に、色々と大勢の武士たちが、寄り合ひ寄り合ひ評議をしたのでした。

【語義】○さこそは云々　あれほどまで人々が皆お惜み申した事であつた。この句の裏面には、まして後深草院が三十三で御剃髪になるのを人々がお惜み申すのは勿論だといふ意が含まれてゐる。○東の御方　皆子、後深草院の妃、伏見帝の御母。○さならぬ女房　その他后妃などでない普通の女官。○とりわき　格別、特に。○御供つかまつる　院と同じく出家するをいふ。○ほど〳〵につけて　身分々々に應じて。○私も　公に對していうた語で御供として出家する人々の上をいふ。「も」は「にも」の趣。○陣のさだめ　朝廷の陣の座に於ける公卿の評定。○これかれあまた武士ども　色々な武士たちが大勢の意。

東京外語　全文として文檢程度にふさはしい問題

「故時頼朝臣は……謀にてありける」　あやしの……御消息なりけり」何れもやゝ良問題

この頃は、ありし時頼朝臣の子時宗、相模守といふぞ、世の中はからふ主なりける。故時頼朝臣は、康元元年に頭おろして後、忍びて諸國を修行しあるきけり。それも、國々の有樣、人のうれへなど、委しくあなぐり見聞かむの謀にてありける。あやしの宿に立ち寄りては、その家主がありさまを問ひ聞き、ことわりある愁などの埋もれたるを聞きひらきては、「我はあやしき身なれど、昔よろしき主をもち奉りし、いまだ世にやおはすると、消息奉らむ。もてまうでて聞え給へ」などいへば、「なでう事なき修行者の、何ばかりかは」とは思ひながら、言ひ合せて、その文をもちて、東へ行きて、しかじか

と教へしまゝにいひて見れば、入道殿の御消息なりけり。「あなかまあなかま」とて、永く愁なきやうに計らひつ。佛神のあらはれたまへるかとて、みな額をつきて悦びけり。かやうの事、すべて數しらずありしほどに、國々も心づかひをのみしけり。最明寺入道とぞいひける。

【通解】この頃は、あの、時頼朝臣の子の相模守時宗といふのが、世の中の事を取計ふ執權職でありました。故時頼朝臣は、康元元年に剃髪して後、こつそりと諸國を修行者として遍歴して歩いたのでした。それも、諸國の有様や、人の愁訴などを、委しく探つて見聞かうとの考へであつたのでした。賤しい宿所に立ち寄つては、その家の主人の有様を尋ね聞いて、道理のある愁訴の筋などの妨げられて通らずにゐるのを聞き出しては、「私は賤しい身だが、昔相當な主人を持つて居りました、その主人が、まだ御存命でいらつしやるかどうか、一つその御主人に手紙を差上げませう。持つておいでになつて事情を委しく申上げなさい」などいふと、「何といふ事もないつまらぬ修行者が、どれ程の事が出來るものか」とは思ひながら、互に相談し合つて、その手紙を持つて、鎌倉へ行つて、斯様斯く〳〵と、その修行者が教へた通りにいつて見ると、それは時頼入道殿の御手紙であつたのでした。役人共は、「まア〳〵靜かに」といつて永く愁訴の必要のないやうに取計つた。訴人達は、佛様神様があらはれ遊ばしたのかと、皆額をすりつけて悦んだのでした。このやうな事が、凡て數知らずあつたので、國々の守護地頭も、非政を行はぬやう專心注意したのでした。この時頼は最明寺入道と申しました。

【語義】○ありし　あの。以前あつたといふ思想の語。○世の中をはからふ主　世の中の事を取計ふ主、執權職をいふ。○うれへ　愁訴、愁へてお上に訴へ出るやうな筋合の事をいふ。○あなぐり　檢索する、探り調べるをいふ。○あやしの宿　賤しい宿所。殊更に賤しく粗末な家に一夜の宿を求めてそこに立寄つてはといふ思想の文。○ことわりある愁　道理のある愁訴、如何にも尤もな正しい訴訟の筋。○埋もれたるを　姦吏などに妨げられて、言ひ條が立たずにそのまゝ泣寢入りになつてゐるのを。○聞きひらきては　聞き出しては。「埋れ」に對して「開き」といふた言葉の綾。○あやしき身　賤しい身分。○よろしき主　相當な主人、相當に身分があつて權力を持つた人に仕へてゐたの意。「よろしき」は、かなりな、相當なの意。○奉りし　「奉りしが」の趣の連體省略。○世にやおはすると　御在世だらうかどうかとためしに一つの意。「世に權力を持つてゐられるかも知れぬから」といふ解は立入り過ぎよう。○なでう事なき　何といふ事もない、つまらぬ、賤しい。○何ばかりかは　どれ程の事が出來よう、どれだけの役にも立つまい。○入道殿の御消息なりけり　この文句からをその手紙を見た役人の言葉とする説もあるが文調に自然であるまい、○あなかまあなかま　「まア〳〵お靜かに、必ずよきに計らひますから」といふ風に愁訴者をおさ

史實として特に留意すべき所

へ靜める詞。「やア事が面倒だ」といふやうな解は當らぬと思ふ。○國々も云々　諸國の守護地頭も特に政事に注意した。

その子なればにや、今の時宗朝臣も、いとめでたきものにて、「本院の、かく世をおぼし捨てむずる、いとかたじけなく、哀なる御事なり。故院の御おきては、やうこそあらめなれど、そこらの御このかみにて、させる御あやまりもおはしまさざらむ、いかでかは、忽ちに名殘なくはものし給ふべき。いとたい〳〵しきわざなり」とて、新院へも奏し、彼方此方なだめ申して、東の御方の若宮を、坊に立て奉りぬ。十一月五日、節會行はれて、いとめでたし。かゝれば、少し御心慰めて、このきはは、强ひて背かせ給ふべき御道心にもあらねば、思し止まりぬ。これぞあるべき事と、あいなう、世人も思ひいふべし。御門よりは、今二つばかりの御兄なり。

【通解】　その時頼の子であるからか、今の執權時宗朝臣も、誠に立派な人で、「後深草院が、こんなに世を思ひ捨てて御出家遊ばさうとする事は、甚だ畏れ多く、哀な御事である。後嵯峨院の御遺詔は、なるほど何か深い仔細もあるに違ひないが、澤山の皇子方の御兄上として、別段これといふ御過失もおありなさらなからう方が、何だつて、突如として全然帝系と御緣がなくなつて了ふといふ筈があらう。誠に以て不條理千萬な儀である」というて、龜山院へも奏上し、後深草・龜山兩院の御仲をおなだめ申上げて、東の御方の御生みになつた若宮を、春宮にお立て申上げた。十一月五日に、立太子の節會が行はれて、誠にお喜ばしい事です。斯うなつたので、後深草院も少し御心を慰めて、今度の場合は、無理にも出家なさらうと遊ばす程の御菩提心でもないので、御出家の事は思ひ止まり遊ばした。これこそ當然の事と、つひつけつけと無遠慮に、世間の人も考へもし言ひもする事でせう。皇太子は、天子樣よりは、今二つばかりの御年上です。

【語義】　○めでたきもの　すぐれた人物。○かたじけなく　畏多く。○御おきて　御指圖、御遺詔。○やうこそあらめなれど　深い仔細があらうけれど。○そこらの御このかみ　多くの皇子方の兄君。後深草院は後嵯峨院の第一皇子であらせられるからいふ。○させる御あやまり　さしたる御過失。○おはしまさざらむ　「おはしまさざらむが」の趣の連體省略。○名殘なく　全然跡がなくなつておしまひになる。只御一代限りで後に帝位に立つ方が自然なくなつて了ふのをいふ。○たい〳〵しきわざ　怠々しき事、あるまじき事、不合理な事。○彼方此方　あちらこちら、即ち後深草と龜山との御仲。○なだめ申して　おだやかに取りなしての意。○坊　春宮。○節會　立太子の儀式。○このきはは　この際は、今度の出家の事は。

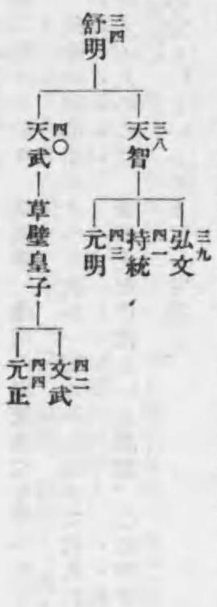
これ亦史實として留意

○強ひて背かせ給ふべき御道心　何でも彼でも世を背かうといふやうな強い御道心。道心は菩提心即ち佛道に歸依する心。○あるべき事　さうあるべき事、當然の事。○あいなう　「あひなう」の音便の趣、こゝの語意は、元來つゝましく御遠慮申すべきことだのに、それを率直に無遠慮にの趣。

儲の君御年まされる例、遠き昔はさておきぬ、近頃は、三條院、小一條院、高倉院などやおはしましけむ。高倉院の御末ぞ、今もかく榮えさせおはしませば、かしこきためしなめり。いにしへの天智天皇と、天武天皇とは、おなじ御腹の御兄弟なり、その御末しば〳〵うちかはりうちかはり、世をしろしめしし例などをも、思ひや出でけむ、御二流にて、位にもおはしまさなむと、思ひ申しけり。新院は、御心ゆくとしもなくやありけめど、大方の人めには、御中いとよくなりて、御消息も常に通ひ、上達部なども、彼方此方參り仕うまつれば、大宮院も、めやすく思さるべし。

【通解】　皇太子が御年嵩であつた例は、遠い昔の事はさしおきます、近頃では、三條院、小一條院、高倉院などがいらつしやいましたちうか。高倉院の御子孫が、今も斯うしてお榮えになつていらつしやるので、それは誠におめでたい例でありませう。又、昔の天智天皇と、天武天皇とは、御同腹の御兄弟です。その御子孫が、幾度も〳〵、代り〳〵、皇位に即いて世をお治め遊ばした例などをも、思ひ出したのであらうか、時宗は、後深草院と龜山院との御兩統で、帝位にもお即き遊ばしますやうにと、お思ひ申上げたのであつた。龜山院は、さうした關東の御處置に對して、御滿足といふ事は決してなかつたらうけれど、大體の所他處から見た目では、御兩院の御仲が大層よくなつて、御手紙も常に取りかはされ、上達部なども、あちらへもこちらへも參上して御仕へ申上げるので、御母后大宮院も、誠に見よく悦ばしい事にお思ひ遊ばす事でせう。

【語義】　○儲の君　皇太子。○遠き昔はさておきぬ　挿入句で、「例＝近頃は」と續く文の筋。○三條院　一條帝七歳の御時、三條院東宮で十一歳。○小一條院　後一條帝九歳の御時、小一條院東宮で二十三歳。○高倉院　六條帝三歳の御時、高倉院東宮で六歳。○かしこきためし　結構な例、お目出度い例。○おなじ御腹　同じく皇極天皇の御腹。○その御末　次の御系圖の通り。



○御二流にて云々　後深草、亀山の兩統迭立を考へたといふのである。○御心ゆくとしもなくやありけめど、　父帝の御遺詔によつて我が一統のみと思つて居られたから、この儀を御不滿には思召したらうがの意。

○大方の人めには　表面上だけはといふ思想。○めやすく　見よく。見苦しくなくて悦ばしい事にの意。

「心安く」といふのとは一寸違ふ。

第十二　老のなみ

建治三年正月三日、内の上御冠したまふ。十一にぞならせ給ふらむかし。御諱世仁と聞ゆ。二十二日朝覲の行幸、亀山殿へなりしかば、上達部、殿上人、例のいろ〳〵のえり、下襲、織物、打物、めでたくゆゝしかりき。御前の大井川に、龍頭鷁首浮べらる。夜に入りて鵜飼どもめして、篝火ともして乘せらる。御前の御遊、地下の舞など様々の面白き事ども、例の事なれば、うるさくて、さのみもえ書かず。同三月廿六日、石清水の社へ行幸、四月十九日、賀茂の社へ行幸、何れもめでたかりき。人々さだめて記しおき給へらむと、讓りてとめ侍りぬ。

【通解】　建治三年正月三日に、今上後宇多帝が御元服遊ばされる。十一におなり遊ばすのでせうよ。御諱は世仁と申上げる。二十二日に朝覲の行幸として、亀山殿へお成りになつたので、上達部、殿上人たち、いつもの通り色々の美しい襟、下襲、織物、打物と、美々しく大層な事でした。亀山殿の御前の大井川に、

龍頭鷁首の船を浮べられる。夜に入つて、鵜飼どもを召して、篝火をともして舟に乘せられる。御前の管絃の御遊、地下の舞など、色々の面白い事は、いつもの事ですから、煩はしくて、さう一々はよう書きません。同年三月廿六日に、石清水の社へ行幸、四月十九日に、賀茂の社へ行幸、何れも結構な事でした。それらの模樣は、人々が定めて記してお置き遊ばした事と存じまして、その方へ讓つて差控へる事に致します。

【語義】○朝覲の行幸　天皇が上皇や皇太后の宮に行幸し給ふこと。こゝは龜山上皇宮への行幸。○龜山殿　龜山上皇の御所。○えり　下着の襟で、小袖衣など色々着た事をいふ。○打物　絹を槌で打つて光澤を出したもの。○ゆゝしかりき　大層美しい事であつた。○龍頭鷁首　船首に龍の形、鷁の形を裝つた唐風の二隻一對の船、之に樂人を乘せ、船中から奏樂するのである。○鵜飼　鵜を放つて魚を捕る者。○地下の舞　地下人即ち五位以下で昇殿を許されぬ人々の舞。○人々云々　扈從の人々の日記などに委しく記してあるだらうと思つて、その方に讓つて詳にいはぬ事としますの意。「とめ」は止め、即ち話すのはよすの意。

かくて、弘安元年になりぬ。十月ばかり、また二條内裏に火いで來て、いみじうあさましし。萬里小路殿は、ありし火の後、又造られて、今年の八月に御わたましありて、新院住ませ給へれど、内裏焼けぬれば、この院、また内裏になりぬ。うちつゞき火のしげさ、いとおそろし。

【通解】斯うして、弘安元年になつた。十月頃、又二條内裏に火事が出て、實にどうも驚き入つた次第です。萬里小路殿は、あの出火の後、又造られて、今年の八月に御移轉があつて、龜山院が住んでいらせられるが、内裏が焼けたので、この院が、また内裏になりました。打續いて火事の頻々とある事は、誠に恐ろしい事です。

【語義】○あさまし　驚き入つた、なさけない事態だの意。○ありし火　あの以前の火事。文永十年十月の事で、あすか川の卷に見えてゐる。○御わたまし　御引越し。○この院　萬里小路殿、新院がお住みだから「院」といふ。

例の五月の供花、やがてうち續きければ、女院たち、宮々など、夜の御時に閼伽奉らせ給へば、御堂のかをり、名香の香も、外には多くまさりて、いとしみ深う、なまめかしうおもしろし。大方、いづれも、年に二度は、昔よりの事にて、いみじうけいめいし給

へば、世の人のなびき仕う奉るさま限りなし。日に二たび、院の出で居させ給ふに、關白大臣以下、やむごとなき人々、絶えずさぶらひたまふ。大中納言、二位三位、非參議、四位五位などは、ましてかずしらず。すべて、前の司、道々の人々、道なども參る事なれば、時ならぬ院の御前ともなく、いみじう花やかに、おもしろう尊し。昔の後二條關白師通と聞えしは、「おりゐの御門の門に車の立つべき事なし」と、そしりたまひけるに、今の世を見給はばと、思ひ出でらる。九月の供花には、新院さへわたりものし給へば、いよ〳〵女房の袖口、心ことに用意加へ給ふ。

【通解】例の五月の供花が、そのまゝすぐに打續いたので、女院たち、宮々などが、夜の供花の御時に佛前に御水をお供へ遊ばすと、御堂の木の香や、名香の香も、外の所とはぐつとまさつて、深く堂内にしみ渡つて、如何にも優雅に面白い。大體、どこの寺でも、年に二度五月と九月に供花のあるのは、昔からの事で、特に今度は非常に色々と心をお盡し遊ばすので、世の人の心を寄せて御奉仕申上げる有樣は大した事です。日に二度、朝と夕とに、供花のために後深草院が出御あらせられるにつけ、關白大臣以下、高貴の人々が、絶えず御前に侍しておいでになる。大中納言、二位三位、非參議、四位五位などは、まして數知らず出仕してゐる。凡て、前の司から、諸道の專門の人々まで、行道の儀などにも參ずる事なので、日頃お淋しい院の御前ともなく、非常に花やかに、面白く尊い事です。昔の後二條關白師通と申した方は、「御讓位の帝の御門前に人々の伺候の車の立つべきわけはない」と、非難せられたのであつたが、この今の世の有樣を御覽になつたら、何とおつしやる事だらうかと、昔のその御言葉が思ひ出される。九月の供花の時には、龜山院までもお渡り遊ばしたので、いよ〳〵女房の裝束に氣を配つて、車からおし出す袖口も、格別に美しく心遣ひ遊ばしたのでした。

【語義】○供花、「くげ」の延音、五月と九月に、佛前に花を供へる特別の儀式。○やがて　前の前栽合（この項はさしたる事もないから本書には省く事にした）からそのまゝすぐ續いて行はれる。○閼伽　佛前に供へる清水、或は香花を入れた水の稱。○御堂のかをり　御堂の新築の木の香。或は香るやうな御堂の美々しさの義とも考へられる。○しみ深う　深く堂内に浸み入つて。○いづれも　何れの寺にても。○けいめい　經營。色々と用意施設するをいふ。○日に二たび　供花は朝夕二度行はれる。○非參議　四位で參議に任ずべき格の者、三位以上でまだ參議に任ぜられぬもの、四位で一度參議に任ぜられたものの三種。○前の司　官を辭して位ばかりある人。○道々の人々　紀傳、明經、明法、陰陽等の諸道の專門家。○道「行道」の略で、佛事の時、佛前を廻る儀をいふ。或はこの一字行文かとも考へられる。○時たらぬ　今時

を得て居ぬ、即ち權勢もなく淋しいの意。或は「時ならず」の副詞を形容詞化したものとも見られよう。○後二條關白　堀河天皇の時の關白。○おりゐの御門の云々　上皇の門前に車を立てて御機嫌を伺ふべき理由はないの意。これは白河院の院政を誹つた言葉で、今鏡紅葉の御狩の卷に出てゐる。○今の世を云々　師通がこの有様を見られたら、どんなに誹る事だらうと、昔の事が思ひ出される。○いよ〳〵　心ことに云々」に掛る副詞。新院がいよ〳〵心ことに用意加へ給ふといふのである。○袖口　車から出す袖口。○用意加へ給ふ　心を遣つて特別に美々しくなされる。

「野山のけしき……身にしむばかり思へり」の間、やゝ良問題

御花はつれば、兩院、ひとつ御車にて、伏見殿へ御幸なる。秋山の景色、御覽ぜさせむとなりけり。上達部、殿上人、かなたこなたおしあはせて、いろ〳〵の狩衣すがた、菊紅葉こきまぜてうち群れたる、見所多かるべし。野山のけしき色づき渡るに、伏見山、田面につゞく宇治の川浪、遙々と見わたされたるほど、いと艶なるを、若き人々などは、身にしむばかり思へり。鷹司殿の大殿も參りたまふべしと聞えけるを、御物忌とてとまり給へれば、五葉の枝につけて奏せられける、

伏見山、いくよろづ代も枝そへて、さかえむ松のすゑぞひさしき。

御かへし、

さかゆべきほどぞひさしき、伏見山、おひ添ふ松の枝をつらねて。

【通解】　御供花が終ると、後深草龜山兩院は、御同車で、伏見殿へ御幸になる。秋の山の景色を御見物遊ばさうが爲でした。上達部、殿上人、あちらからもこちらからも押合ふやうにして、色々の狩衣委で、菊や紅葉や色々の色彩が一つにまざつて群つてゐる有様は、見所の多い事でせう。野山の景色が草木の紅葉で美しく一體にずゝーッと色づいてゐる中に、伏見山から、田の面につゞく宇治川の浪まで、遙々と見渡された趣は、實に美しくつやゝかなので、それを見て、若い人々などは、ぞッと身にしみる程に面白く思つた。鷹司殿の大殿兼平公もお出で遊ばす筈との事でしたが、御物忌で御止め遊ばしたので、五葉の枝につけて次のやうな歌を奏せられたのでした。

伏見山……＝幾千萬年も枝を生ひ添へて榮えて行く伏見山の松の、末久しいやうに、御兩院様の御榮え、末久しく渡らせ給ふ事でありませう。

御返歌、

さかゆべき……＝伏見山に枝を連ねて生ひ添うてゐる松の、榮え行くべき末の久しいやうに、吾等兩院も共々に久しく榮える事であらう。

【語義】○御花　供花の儀。○伏見殿　山城國紀伊郡。○おしあはせて　數多押し合ふやうにして扈從し。○菊紅葉　狩衣の色目で、菊には葉菊（表白裏青）、苔菊（表紅裏黄）等、紅葉には青紅葉（表青裏朽葉）、黄紅葉（表黄裏蘇芳）等色々の別がある。○色づき渡る　紅葉して一體に美しく色づいてゐる。○伏見山云々　伏見山も見え、それからその麓の千町田につゞいて宇治川の川浪まで遙々と見渡される趣。○いと艶なるを　實に優雅で美しいのでそれを見て。この場合の「を」は前提法の「に」の心持に目的格の「を」の氣持が働いてゐる趣。○若き人々云々　多感なる若人達は、ぞッとする程に感じた。○物忌　陰陽家の説で、天一神（なかみ）や太白神（ひとよ）等を避けて、一日或は數日家に籠つて、簾に物忌と書いた札を掛けて、外來の人に會はず謹慎してゐること。○五葉　五葉の松。○枝そへて　枝を上皇にたとへ、兩院竝びいますのを「枝そへて」と申したのである。○おひ添ふ松の枝をつらねて　前の歌に「枝そへて」とあるを承け給うた言葉だから「おひ添ふ」は枝の生ひ添ふ義と考へられる。「枝をつらね」は連枝で、兩院御兄弟の事を申されたのである。

この御代にもまた、勅撰の沙汰、をとゞしばかりより侍りし、爲氏大納言えらばれつる、このしはすにぞ奏せられける。續拾遺集と聞ゆ。「魂あるさまには、いたく侍らざめれど、艶には見ゆる」と、時の人々申し侍りけり。續古今のひきうつし、おぼろげの事は、たちならび難くぞ侍るべき。

【通解】この御代にも亦、勅撰集を撰ぶといふ儀が、一昨年頃より御座いまして、爲氏大納言が撰ばれましたが、この十二月に出來上つて奏上せられたのでした。續拾遺集と申します。「この集の歌は、魂のある趣では、どうもあまりないやうですが、美しくあてやかには見える」と、當時の人々が申した事でした。大體が續古今集の型を模したもので、並一通りの事といふものは、仲々本元の集には立ち並び難いので御座いませう。

【語義】○勅撰の沙汰　勅撰集を作らるべしとの事。○をとゞし　建治二年。○侍りし　「侍りしが」の意。○爲氏　爲家の子。○つる　「つるが」の意。○このしはす　弘安元年十二月。○魂あるさまには　いたく侍らざめれど　歌に精神氣魄のあるやうには餘り見えないが。○ひきうつし　模倣の意。○おぼろげの事は云々　一通りの努力では本元には叶はぬものだといふ一般思想。「ひきうつし」を「完備」の義とし、「おぼろげ」を「おぼろげならぬ」即ち「非常にすぐれた」の義とする説もあるが、首肯し難い。

史實上特に留意

その頃、蒙古おこるとかやいひて、世の中さわぎ立ちぬ。いろ〳〵さま〴〵恐しう聞ゆれば、「本院、新院は、あづまへ御下りあるべし。内、春宮は、京に渡らせたまひて、東の武士ども上り候ふべし」など沙汰ありて、山々寺々、御祈かずしらず。伊勢の勅使に、經任大納言まゐる。新院も八幡へ御幸なりて、西大寺の長老召されて、眞讀の大般若供養せらる。太神宮へ御願に、「我が御代にしもかゝる亂出できて、誠にこの日本のそこなはるべくば、御命を召すべき」よし、御手づから書かせたまひけるを、大宮院、「いとあさましきことなり」と、猶諫め聞えさせ給ふぞ、ことわりにあはれなる。東にも、いひ知らぬ祈ども、こちたくのゝしる。故院の御代にも、御賀の試樂の頃、かゝる大事ありしかど、程なくこそしづまりにしを、この度は、いとにが〳〵しう、牒狀とかや持ちて參れる人などありて、わづらはしう聞ゆれば、上下思ひまどふ事かぎりなし。

【通解】その頃、蒙古の軍が襲來するとかいつて、世の中がさわぎ立つた。色々樣々と恐ろしい事が耳に入るので、「後深草院、龜山院は、關東へ御下りあらう。天子樣と春宮は、京に御座あつて、關東の武士どもが京へ上る事であらう」などいふ取沙汰があつて、諸寺諸山で數知らず御祈禱がある。伊勢太神宮への勅使として、經任大納言が參る。龜山院も石清水の八幡へ御幸あつて、奈良の西大寺の長老をお召しになつて、眞讀の大般若供養を遊ばされる。太神宮への御願文に、「我が御代に於て斯樣な亂が起つて、これがためにほんとにこの日本が亡びるやうな事なら、我が御命を御斷ち下さるべし」との旨を、龜山院御手づからお書き遊ばされたのであつたが、それを見て、大宮院は、「それは誠におなさけない儀です」と、それでもやはり御諫め申上げられましたのは、如何にも御道理で哀れな事であります。關東でも、何とも言へず大した御祈禱を色々と、大さわぎで事々しく行はれる。故後嵯峨院の御代にも、御賀の試樂の頃に、斯ういふ大事件があつたが、それは程なく靜つたのに、今度は、誠に心苦しく困つた事で、蒙古から牒狀とかいふ物を持つて參つた人などがあつて、甚だ面倒な事態のやうにいふので、上も下もどうしたものかと限りなく當惑した。

【語義】○蒙古おこる　蒙古軍が我が國に襲來するをいふ。○沙汰　取沙汰、世の噂。○伊勢の勅使　伊勢大廟に幣帛を奉り、外寇調伏を祈願する勅使。○八幡　石清水男山八幡宮。○西大寺の長老　奈良七大寺の一、西大寺の長老思圓上人。○眞讀　轉讀に對する語で、全部を省略なく丁寧に讀む佛事。○御願御願文で、龜山院の御書きになつたものと考へられる。○我が御代　後宇多帝の御代ではあるが、龜山上皇御院政であるから斯く仰せられたのである。○そこなはるべくば　滅亡するならば。「べくは」といふや

うに「は」を潜んで讀むとの説もある。○御命を召すべき　我が命を取つて下さい。御身を以て國難に代らんとの御精神である。「べきよし」の表現は、直接敍法の末をそのまゝ間接敍法の形に轉じたもので、古文に普通なる一種の表現樣式である。○あさましきことなり　御命を掛けての御祈願は餘りの事でせうの意。○猶諫め云々　國家の一大事ながらやはり親子の情として御諫めあつたのは御尤もで哀れな事だといふ意。○いひしらぬ　何ともいへぬ、大層な。○こちたくのゝしる　大層に騷ぎ立ててやる。○故院の御代にも云々　この事はあすか川の卷に出てゐる。○かゝる大事　蒙古襲來の事。○にが〳〵しう　心苦しく厭はしい事態で。○牒狀　國書をいふ。○わづらはしう聞ゆれば　仲々事が面倒だといふ事なのでの意。○思ひまどふ　思案に暮れる、當惑する。

史實として面白い一節

されど、七月一日、おびたゞしき大風吹きて、異國の船六萬艘、兵乘りて筑紫へよりたる、皆吹き破られぬれば、あるは水に沈み、おのづから殘れるも、なく〳〵本國へ歸りにけり。石清水の社にて、大般若供養說法いみじかりける刻限に、晴れたる空に、黑雲一むら、俄に見えてたなびく。かの雲の中より、白き羽にてはぎたる鏑矢の大なる、西をさして飛び出でて、鳴る音おびたゞしかりければ、彼處には、大風の吹き來ると、兵の耳には聞えて、浪荒くたち、海の上あさましくなりて、皆沈みにけるとぞ。猶吾が國に神のおはします事、あらたに侍りけるにこそ。

【通解】　けれども、七月一日に、非常な大風が吹いて、異國の船六萬艘、兵士が乘り込んで筑紫へ寄せて來たのが、皆吹き破られて了つたので、兵士等は、或は水中に沈み、自然たまさか殘つた者も、泣く泣く本國へ歸つて了つた。石清水の社で、大般若經供養の說法を盛に嚴かに行はれてゐた刻限に、晴れた空に、黑雲が一むら、急に現はれて棚引いた。その雲の中から、白い羽ではいだ大きな鏑矢が、西の空を指して飛び出して行つて、その鳴る音が非常だつたので、筑紫では、大風が吹いて來るものと、敵の兵士の耳には聞えて、浪が荒く立ち、海上は恐しく荒れ立つて來て、皆沈んで了つたといふ事です。やはり吾が日本の國に神のいらせられる事は、誠にあらたかなものです。

【語義】　○七月一日　閏七月の事であつた。○異國の船　蒙古の兵船。○いみじかりける刻限に　大層有難く盛に行はれてゐた時刻に。○はぎたる　矢竹に羽をつける事を「はぐ」といふ。○鏑矢　篦の先に木で長圓形を作つて、中を空にして孔を穿ち、射れば音を立てるやうにした矢。○あさましくなりて　驚きあきれる程になつて。恐しく荒れ立つたのをいふ。○あらたに　あらたかに、靈驗著しく。なほ嚴密に

いへば、我が國に神樣のいらせられる事はあらたかなもので、その神樣の靈驗が著しかつたのであるといふ思想。

さて爲氏の大納言、伊勢の勅使にて上る道より申しおくりける。

勅をしていのるしるしの神風に、寄せくる浪ぞかつくだけつる。

かくてしづまりぬれば、京にも東にも、御心どもおちゐて、めでたさ限りなし。かの異國の御門、心うしと思して、湯水をも召さず、「我いかにもして、この度日本の帝王に生れて、かの國を亡す身となならむ」とぞちかひて死に給ひけるとぞ聞き侍りし。まことにやありけむ。

【通解】そこで爲氏の大納言は、伊勢の勅使で京へ歸り上る道から、次のやうな歌を申し送つた。

勅をして……＝勅を奉じて祈願をこめたその御しるしとして吹いた神風のために、寄せ來る浪が、そばから打碎けるやうに、外國から寄せ來た敵は忽ち亡びて了つた事であります。

斯うして蒙古の來寇は靜まつたので、京でも鎌倉でも、皆々御安心になつて、目出度さ限りない事です。

かの異國の天子は、癪にさはる事に思はれて、湯水も召上らず、「おれは如何樣にもして、今度は日本の帝王に生れて、かの日本國を亡す身となならう」と誓つておなくなりになつたと聞き及びました。ほんとの事でありましたらうか。

【語義】○爲氏　前節に中御門大納言經任が伊勢への勅使とあるから、爲氏とあるは誤だらう。○上る道より申しおくりける　都へ上る道から申し送つた歌。「申しおくりける」といふのであるから奏上したものとは見られぬ。如何なる人に申し送つたのかそれは明かでない。○勅をして　「勅として」となつた本もある。何れにしても、「勅を以て」「勅を奉じて」の意。○かつ　片端から、そばからすぐの意。○御心どもおちゐて　御心が落着いて、御安心になつて。「ども」は方々の御心の意の複數。○異國の御門　元主忽必烈。○心うしと思して　今度の大敗を心憂く口惜しい事に思はれて。○我いかにもして云々　忽必烈はこの弘安四年から十三年の後、伏見帝の永仁二年に至つて年八十でなくなつたのであるから、固より事實に合はず、又他に斯うした記錄もない。或は當時このやうなデマが行はれたのかもしれぬ。○まことにやありけむ　ほんとの事でしたらうか。空恐ろしい事だといふやうな心持で書き添へた文句だらう。

同じ六年正月六日、日吉の社の訴訟勅裁なしとて、御輿は都へ入らせ給ふ。六波羅の武士ども、けしきばかり防ぎ奉りけれど、まめやかには、神にむかひ奉りて、弓射るも

のなければ、紫宸殿、清涼殿などにふり棄て參らせて、山法師はのぼりぬ。御門は急ぎ對屋に出でさせ給ひて、腰輿にて近衛殿へ行幸なる。殿上人ども、柏ばさみして仕うまつりけり。七日の節會も、まほには行はれず。それより三條坊門萬里小路の、通成の大臣の家へ行幸なりて、しばし内裏になりし時、萬里小路おもての四足はたてられ侍りき。

【通解】　同じ弘安六年正月六日に、日吉神社の事についての愁訴に對して勅裁がないといふので、日吉の御輿は都へ御入りになつた。六波羅の武士どもが、ほんの形式ばかり御防ぎ申上げたが、本氣には、神に向ひ奉つて、弓を引く者がないので、御輿を宮中へかつぎ込んで、紫宸殿、清涼殿などの邊に振り棄て奉つて、延暦寺の僧達は山へ歸り登つて了つた。後宇多帝は急いで對屋にお出ましになつて、腰輿で近衛殿に行幸になる。殿上人どもは、冠の纓を柏ばさみにして御供申上げたのであつた。七日の白馬の節會も、ちやんとは行はれない。それから、三條坊門萬里小路の、大臣通成の家へ行幸になつて、そこが暫く内裏になつてゐた時、萬里小路表の四足門は立てられました。

【語義】　○日吉の社の訴訟勅裁なしとて　日吉神社の事について、延暦寺の僧徒が愁訴したが、それを御裁可がないといふ事で。○御輿は都へ入らせ給ふ　僧徒が日吉の神輿を京都へかつぎ込んだのである。○けしきばかり　おしるし程、少し許り。○まめやかには　眞面目には、本氣には。○紫宸殿　禁中の正殿。○清涼殿　紫宸殿の西にあり、天皇の常の御座所のある御殿。○ふり棄て參らせて　御輿振りをしてその邊に御輿を据ゑ置き奉つて。○山法師はのぼりぬ　延暦寺の僧徒は山へ歸つた。○近衛殿　内大臣近衛家基の第、近衛北、室町東、烏丸西、鷹匠西に在る。○柏ばさみ　冠の纓を撓め疊んで、白木の挾木でとめて置く事。非常時、急用時等に文官のすること。○七日の節會　白馬の節會。○まほには　完全には。○通成　土御門大納言通方の子、内大臣。○四足　四足門、扉のついた柱の前後に、四本の添柱を立てた門。

何となく過ぎ行くほどに、弘安も十年になりぬ。この御門位に卽かせ給ひて、十三年ばかりにやなりぬらむ。本院待遠に思さるらむと、いとほしく推し量り奉るにや、例の東より奏する事あるべし。新院の御方さまには、心細う聞召しなやむべし。去年の春、御乳母の按察の二位殿うせにしかば、一めぐりの佛事に、龜山殿へおはしまして、いかめ

しう八講行はせたまふ日、雪いたう降りければ、九條三位隆博、檜扇のつまををりて、

跡とめてとはるゝ御代の光をや、雪のうちにもおもひ出づらむ。

女房の中に聞えたるを、院御覽じて返しにのたまふ。

なき人のかさねし罪も消えねとて、雪のうちにも跡をとふかな。

【通解】何となくつひ月日が過ぎて行くうちに、弘安も十年になりました。この後宇多天皇が御位にお即き遊ばして、十三年程になりましたらうか。後深草院は御子の春宮御即位を待遠に思召される事であらうと、御いとしい事に御推量申上げてか、例によつて鎌倉から御讓位について奏上する事があるやうです。亀山院の御一統の方では、それを聞召して心細う思ひ惱まされる事でせう。去年の春、亀山院の御乳母の按察の二位が亡くなつたので、一周忌の佛事に、亀山殿へ御幸になつて、嚴かに法華八講を行ひ遊ばした日、雪が大層降つたので、九條三位隆博が、檜扇の端を折つて、

跡とめて……＝この深い雪の中に、わざ〳〵尋ねて來て、跡懇ろに弔ひ給ふ君の御恩德を、雪に埋つた地下の御靈も有難く思出す事でありませう。

と認めて、女房の中に申上げたのを、亀山院が御覽遊ばして、返歌として次のやうに仰せ遊ばされた。

なき人の……＝雪の消えるやうに、亡き人の罪障も消滅せよと、斯く雪の中に亡き跡を弔ふ事である。

【語義】○十三年　後宇多帝即位の文永十一年から弘安十年まで十三年。○本院待遠に思さるらむ　後深草院は御自分の皇子たる春宮の御即位を待遠しく思召す事だらう。○例の「例の＝あるべし」と續く心持の文。○東より奏する事あるべし　鎌倉から御讓位の事を奏上する事であらう。○御方ざま　御方の方といふ意。○心細く聞召しなやむべし「聞召して心細う思しなやむべし」といふ文の筋。○いかめしう　莊嚴に。○檜扇　檜の薄板を骨として作つた扇。○つまををりて　端を折つてそれに次の歌を書いた。○跡とめて　跡を尋ねての意で、雪の緣語。○とはるゝ御代の光をや　とひ弔ひ給ふ君の御恩惠をの意。「や」は下の「らむ」に應じた輕い疑問推量の助詞。○雪のうちにも　雪の下に埋つてゐる按察二位の亡き魂もの意。○女房の中に聞えたるを　女官中の或人にその歌を上げたのであるがそれをの意。○返しに　返事として。○罪も消えねと　罪障も消滅せよと。「消え」は雪の緣語。方丈記にも「冬は雪をあはれむ。つもり消ゆるさま、罪障にたとへつべし」とある。罪障消滅を雪の消えるのに譬へるのは常套的手法であらう。

文檢程度の良問題

史實として特に意味の深い章

よろづ飽かず思さるゝ程なれど、その年の十月におりゐさせ給ふ。もとの上は、二十一にぞならせ給ひける。御本性もいとうるはしく、のどめたるさまにおぼして、すくよか

に、御才もかしこう、めでたうおはしませば、御政事なども、やう〳〵譲りや聞えましなど思されつるに、いとあへなくうつろひぬる世を、すげなく新院は思さるべし。春宮位に即き給ひぬれば、天下本院におしうつりぬ。世の中おしわかれて、人の心どもも、かゝる際にぞあらはれける。今の御門も、故山階の大臣の御孫にてわたらせ給へば、かの殿ばらのみぞ、いづ方にもすさめぬ人にておはしける。

【通解】　凡てに飽足らず殘り惜しくお思ひ遊ばすのではあるが、その年の十月に御退位遊ばされた。先帝後宇多天皇は、二十一におなり遊ばされたのでした。御氣立も誠に御端麗に、落着いた御樣子で、而も剛直に、御學才も勝れて、誠に御立派でいらせられたので、御政事なども、段々御譲り申さうなど思召されたのに、如何にもあつけなく政權が他に移つて了つた世の樣を、情ない事に龜山院は思召される事でせう。春宮が御即位あらせられたので、天下の政權は後深草院の方へ押移つた。世の中は後深草院方と龜山院方とに分れて、人の心といふものも、こんな際にすつかり現はれたのでした。今の伏見天皇も、やはり故山階大臣實雄公の御孫でいらせられるので、かの實雄一門の殿方ばかりは、どちらにも粗末にされぬ人でいらせられたのでした。

【語義】　○よろづ　御年配といひその他一般の事情といひ凡ての意。○飽かず思さるゝ程なれど　御退位を御不滿に思召されるのではあるが。「程」は「頃」の意。「飽かず」を「御位に飽かれたとは思し召されぬ」など解するは甚だ語感に反する。○もとの上　前帝。○うるはしく　きちつとして、端正で。○のどめたるさまにおぼして　おだやかに落着いた御樣子であられて。「おぼして」は「世を思して」の略とする說もあるが、「おはして」の誤と見る方が自然だらう。○すくよかに　剛直で。○御政事なども云々　龜山院が院政を後宇多帝にお譲り申さうかと思召した。○あへなくうつろひぬる世を　あつけなく政權が持明院方に移つた世の樣を。○すげなく　すげない事に、情ない事と。○世の中おしわかれて　天下は、後深草院方、龜山院方といふ風に二つに分れて。○人の心どもも　人の心の深淺も。○山階の大臣の御孫　次の系圖の通り。

實雄┬京極院―後宇多帝
　　└玄輝門院―伏見帝

○いづ方にもすさめぬ　後深草にも龜山方にも粗末にされぬ。

第十三　今日のひかげ

正應元年三月十五日、官廳にて御即位あり。このほどは、香園院の左のおとゞ師忠關白にておはしき。その後、近衛殿家基、また九條、左大臣殿忠教、その後、また近衛殿かへりなりたまひき。なほ後に、歡喜園院など、いとしげうかはり給ふ。おりゐの御門を、今は新院と聞ゆれば、太上天皇三人世におはします頃なり。いと珍しく侍るにや。

【通解】　正應元年三月十五日に、太政官の正廳で伏見帝が御即位あつた。この頃は、香園院の左大臣師忠が關白でいらしつた。その後に、近衛家基殿、それから九條の左大臣忠教公、その後に、また近衛殿が再び戻つて關白におなりになつた。なほ又後に、歡喜園院兼忠公など、大層しげ〳〵と關白がお變りになる。御退位の後宇多帝を、今では新院と申上げるので、太上天皇が御三方世にいらせられる頃です。大層珍らしい事で御座いませうか。

【語義】　○官廳　太政官の正廳。○しげう　しげく、頻りと。○太上天皇三人　後深草、龜山、後宇多の三上皇。

年かへりて正應も二年になりぬ。よろづめでたき事ども多くて、三月二十三日、鳥羽院へ朝覲の行幸なる。本院は、かねてより鳥羽殿におはしまして、池の水草かき拂ひ、いみじうみがかれて、例のことゞ〳〵しき唐の御船浮べられて、二十四日に舞樂ありき。二十六日にぞ歸らせ給ひける。さても去年の三月三日かとよ、經氏の宰相の女の御腹に、若宮出來させ給へりしを、太子に立て奉らせ給ふ。いとかしこき御宿世なり。中宮の御子にぞなし奉らせ給ひける。おなじうは誠にておはせましかばとぞ、大將殿などおぼしけむかし。おりゐの御門も、御子あまたおはしませば、坊になど思しけるを、ひきよぎぬる、いと本意なし。十月二十五日、一院の御所にてまなきこしめす。いとめでたき事ども、のゝしり過ぎもてゆく。

【通解】　年が改つて正應も二年になつた。色々と結構な事が多くて、三月二十三日に、鳥羽殿へ朝覲の行幸がある。後深草院は、前々から鳥羽殿においで遊ばして、池の水草を拂ひ清め、非常にきれいに磨き

立てられて、例の業々しい唐の御船を浮べられて、二十四日に舞樂があつた。帝は二十六日に御歸還遊ばされたのでした。扨も去年の三月三日の頃とか、經氏の宰相の女經子の御腹に、若宮がお出來遊ばされたが、その若宮を皇太子にお立て申上げ遊ばされる。誠に大した前世の御果報です。中宮鐘子の御子におなし申上げられたのでした。同じ事ならほんとの御子でいらしつたらばなアと、大將實兼公などはお思ひ遊ばした事でせうヨ。御退位の後宇多帝も、御子樣が澤山いらせられるので、その中から皇太子になど思召したところが、斯うして豫期が外れた事は、實に不本意です。十月二十五日に、皇太子樣は、後深草院の御所で始めて魚味を召上る御儀がある。誠に色々お目出度い事で、わい〳〵と賑やかな事で月日は段々と過ぎて行く。

【語義】　○朝覲の行幸　天皇が、太上天皇、皇太后の宮へ行幸になること。こゝは御父帝の御所への行幸。○みがかれて　御殿などを綺麗に清め飾られるをいふ。○例のこと〴〵しき唐の御船　龍頭鷁首の船、即ち樂人を乘せる二艘の船。○若宮出來させ給へりしを　若宮が御生誕あらせられた、その若宮をの意。この若宮は後に後伏見帝とならせ給ふ。○いとかしこき御宿世　その若宮の前世の御果報のすぐれてめでたい事をいふ。○中宮の御子に　その若宮を中宮鐘子の御子樣になされた。○おなじうは誠にておはせましかばと　同じ事なら中宮の御實子が斯く立太子あらせられたらばどんなによからうと。○大將殿　中宮の御父右大將實兼。○おりゐの御門　讓位の帝、即ち太上天皇。○坊　春宮。多くの御子樣の中でどなたかを皇太子に立てたいと思召されたがの意。○ひきよぎぬる「よぐ」は「避ける」意、立太子といふ事柄が、後宇多院の方を避けて他の方に行つて了つたといふ思想の表現。つまりは希望が裏切られた、豫期に反したの意。○本意なし　不本意だ、つまらぬ。後宇多院の御胸中を第三者の立場で批評的に書いた表現。○一院　本院と同義。○まなきこしめす　始めて魚味を召上る御儀。

史實上着目すべき記事

同じき三年三月四日五日の頃、紫宸殿の獅子狛犬、中よりわれたる、驚きおぼして御占あるに、血流るべしとかや申しければ、いかなる事のあるべきにかと、誰も〳〵思しさわぐに、その九日の夜、右衛門の陣より、おそろしげなる武士三四人、馬に乘りながら、九重の中へ馳せ入りて、上に昇りて、女孺が局の口に立ちて、「やゝ」といふものを、見あげたれば、丈高くおそろしげなる男の、赤地の錦の鎧直垂に、緋威の鎧着て、只赤鬼などのやうなる面つきにて、「御門はいづくに御よるぞ」と問ふ。「夜のおとゞに」といらふれば「いづくぐぞ」と又問ふ。「南殿より東北の隅」と教ふれば、南ざまへ歩みゆく間に、女孺内より參りて、權大内言典侍殿、新内侍殿などに語る。うへは中宮の

御方に渡らせ給ひければ、對の屋へ忍びて逃げさせ給ひて、春日殿へ、女房のやうにて、いと怪しきさまをつくりて入らせ給ふ。内侍劍璽を取りて出づ。女孺は、玄象鈴鹿とり て逃げけり。春宮をば、中宮の御方の按富殿抱き參らせて、常磐井殿へ徒歩にて逃ぐ。その程の心の中ども、いはむ方なし。この男をば淺原のなにがしとかいひけり。

【通解】同じ三年三月四日か五日の頃、紫宸殿の獅子狛犬が中央から二つに割れた、それを見て、お驚きになつて御占があつた所が、占形の文に、血の流れる事變があらうとか申したので、どんな事があるのだらうと、誰も〳〵胸をどきつかせて御心配になつて居られたところが、その九日の夜、右衛門の陣から、恐ろしさうな武士が三四人、馬に乘つたまゝ、禁中に馳せ入つて、御殿の上へ昇つて、女孺の局の口に立つて、「おいとらッ」といふ、女孺がその者を見上げると、丈高く如何にも恐ろしさうな男が、赤地の錦の鎧直垂に、緋威の鎧を着て、只もう赤鬼のやうな顏つきで、「天子樣はどこに御寢なるか」と問ふ。女孺が「夜の御殿に」と答へると、「それはどこか」と重ねて問ふ。女孺が「南殿から東北の隅」と僞り敎へると、南の方へ歩いて行く、その間に、女孺は内部の方から參つて、權大納言典侍殿や新内侍殿などに事の次第を告げる。天子樣は中宮の方にお渡り遊ばして居られたので、對の屋へ忍んで御逃げ遊ばして、御母の御所たる春日殿へ、女房のやうにして、誠に異樣な風に拵へて御入り遊ばされた。内侍が劍璽を持つて出る。女孺は、御琵琶玄象と、和琴鈴鹿とを持つて逃げたのでした。春宮をば、中宮の御方の按察殿がお抱き申上げて、後深草院の仙洞御所たる常盤井殿へ歩いて逃げる。その程の人々の心の中、何といはうやうもない。この内裏へ闖入した狼籍者は淺原の何某とかいふのでした。

【語義】○紫宸殿　禁中南西の正殿。○獅子狛犬　紫宸殿の御帳の前に、左に獅子、右に狛犬と相對して置いてある。獅子は黃で口を開け、狛犬は白で口を閉ぢ、角がある。○中より　中央から。「内部から」といふ解もあるがいかゞ。○御占　神祇官や陰陽寮の官人を召して卜筮させる。○血流るべし　占形の文で、禁中に血が流れるといふ象があらはれたのである。○右衞門の陣　内裏の西南の宣秋門。○女孺　掃部司の女官。殿中の掃除や指油等の雜役をするもので、その部屋は桂芳坊にあつた。○やゝといふものを「やゝ」は呼び掛ける詞。「やゝといふにその者を」といふ文の筋。○鎧直垂　鎧の下に着る一種の直垂。○緋威の鎧　緋に染めた革でをどした鎧。「をどし」は「緒通し」の義で「威」はあて字だから假名は「を」。○面つき　顏つき。○南殿より東北の隅　夜の御座は淸涼殿の晝の御座の北、朝餉の間の東、淸涼殿は仁壽殿の西にあり、南殿より西北の隅といふべきをわざと僞つて迂向させたのである。○對の屋　寢殿に對した別殿で、女房の住む局。○春日殿　伏見帝の御母玄輝門院の御所。○内侍　掌侍。○常盤井殿　西園寺第で、春日の南、京極の西にあり、當時後深草院の御所。○淺原のなにがし　淺原三郎行信の孫、小三

郎頼行の子の八郎爲頼。後文に依ればその子二人も一緒だつた。原因については後文にもあるが、淺原は甲斐の國小笠原の一族で、强弓大力に任せて諸國に狼藉したため、召取りの觸れが廻つてゐた。そこで捨てばちのたくらみで禁中へ闖入したものとも考へられてゐる。

辛くして夜のおとゞへ尋ね參りたれども、大かた人もなし。中宮の御方の侍の長景政といふもの、名のり參りて、いみじく戰ひ防ぎければ、疵かうぶりなどしてひしめく。かゝる程に、二條京極の簾屋備後守とかや、五十餘騎にて馳せ參りて、闕をつくるに、合する聲僅に聞えければ、心やすくて內にまゐる。御殿どもの格子ひきかなぐりて亂れ入るに、かなはじと思ひて、夜の御殿の御茵のうへにて、淺原自害しぬ。太郎なりける男は、南殿の御帳の內にて自害しぬ。弟の八郎といひて、十九になりけるは、大床子のあしの下にふして、寄るものの足をきり〳〵しけれども、さすが數多して搦めむとすれば、かなはで自害すとて、腸をば皆繰り出して、手にぞ持たりける。そのまゝながら、いづれをも六波羅へかき續けて出しけり。

當年の禁中のさま忍ぶべし

【通解】　淺原は漸うの事で夜の御殿へ尋ねて參つたが、その頃は丸ツきり誰もゐない。中宮の御方の侍の長の景政といふ者が、名乘つて參つて、非常に激しく防戰したので、手傷を受けなどして犇々と格闘をする。かうしてゐる內に、二條京極の簾屋の備後守とかいふ者が、五十餘騎で馳せて參つて、どつと闕を作つたところが、內からそれに應じて揚げる敵の闕の聲が少しに聞えたので、氣安くて禁中に參る。御殿の格子をメリ〳〵とひつぱがして亂入した所が、所詮叶はじと思つて、夜の御殿の御茵の上で、淺原は自害した。淺原の長子であつた男は、南殿の御帳の內で自害した。弟の八郎というて、十九になつた男は、清涼殿の大床子の脚の下に伏してゐて、寄る者の足を切り〳〵したけれど、さすがに多人數で搦め取らうとすると、叶はないで自害するというて、腸をば殘らず手繰り出して、手に持つてゐたのでした。そのままの姿で、三人共に六波羅へ擔ぎつゞけて突き出したのであつた。

【語義】　○辛くして云々　女嬬に欺かれ、所々迂回して、漸くにして夜の御殿へ辿りついたが。○大かた人もなし　前項にある通り皆逃げ去つた後だつたのである。「大かた」は打消語の副詞となる時「全く」の趣に慣用される。○中宮の御方の侍の長　中宮御所の武士の長で、西園寺家の侍。○疵かうぶりなどして景政が疵を受けてであらう。○簾屋　簾火をたいて市中を警衛する役所、そこに宿直する者を簾屋守護人というて、備後守は卽ちそれである。○合する聲　味方の闕の聲に合せて、敵のつくる闕の聲。○心やすくて　敵が小勢と知れて安心して。○ひきかなぐりて　手荒くばり〳〵と引き破つて。○御茵　天子樣の

御座蒲團。○太郎　爲頼の長子。○御帳　畫の御座の御帳臺。○弟八郎　次男の方が父の通稱を承けついで八郎というてゐたのである。○大床子　清涼殿の母屋の御座所の傍にある臺、天皇の御膳を載せて召上るための机で、長さ三尺許り、脚の高さ二尺許り。○さすがに　いくらあばれてもそれでもの意。○そのまゝながら　自害したそのまゝの姿で。○いづれをも　淺原父子三人とも皆。○かき續けて　一人づゝ戸板などに載せて續いて擔いで行つての意。

ほの〴〵と明くる程に、内、春宮、御車にて、忍び歸らせ給ひて、晝つ方ぞ、又更に春日殿へなる。大方雲の上穢れぬれば、いかゞにて、中宮の日の御座へ腰輿よせて、兵衛の陣より出でさせ給ふ。春宮は絲毛の御車にて、又常磐井殿へわたらせ給ふ。中宮も春日殿へ御啓なる。世の中ゆすり騒ぐさま、言の葉もなし。

【通解】ほの〴〵と夜の明ける頃に、帝、春宮、御車で、こつそりと禁中に御歸還になり、晝頃に、又更めて春日殿へ御成りになつた。大體禁中が穢れたので、どういふものかといふ事で、中宮の日の御座へ腰輿を寄せて御召しになつて、兵衛の陣から出御あらせられた。春宮は絲毛の御車で、又常磐井殿へ御渡りあらせられる。中宮も春日殿へ行啓になる。世の中の騒ぎ立てるさま、言はうやうもない。

【語義】○なる　行幸になる。○雲の上穢れぬれば　禁中が穢れたから。斯く血を見た時は、觸穢（しょくえ）というて、神事や禁中出入を遠慮する事になつてゐる。○いかゞ　宜しくないの意。○中宮の日の御座　清涼殿の畫の御座と同じやうに、中宮御所にある晝の御座。○兵衛の陣　兵衛の詰所、陰明門。○ゆすり騒ぐ　人心恟々として大さわぎをする。○言の葉もなし　形容すべき言葉もない。

この事、次第に六波羅にて尋ね沙汰するほどに、三條の宰相、中將實盛も召し捕られぬ。三條の家につたはりて、鯰尾とかやいふ刀のありけるを、この中將、日比持たれたりけるにて、かの淺原自害したるなどいふ事ども出できて、中院も知ろしめしたるなどいふ聞えありて、心うく、いみじきやうに、いひあつかふ、いとあさまし。

【通解】この事件を、段々と六波羅で詮議する内に、三條の宰相中將實盛も召し捕られた。三條の家に傳つて、鯰尾とかいふ刀があつて、それをこの中將實盛が、常日頃持つて居られたが、その刀で、彼の淺原が自害したなどいふ事が色々と出て來て、これは龜山院も御關係があるなどいふ噂があつて、世の中で

史實として注目すべき所

は、困つた、非常な事のやうに取沙汰をする、いやもう餘りの事に驚き入つた次第です。

【語義】○尋ね沙汰する　事の眞相を調べ詮議する。○三條の家に云々　三條家傳來の饒尾といふ刀で淺原爲頼が自害したために、三條實盛に嫌疑が掛つたのである。○中院も云々　龜山院もその事に御關係なされた。これによると三條實盛は龜山院親近の者だつたやうに考へられる。○心うくいみじきやうに「心うき＋いみじき事のやうに」といふ文の筋。「心うく」はよくない、困つたの意。○いひあつかふ　噂をする。「いひあつかふが」の連體省略。○あさましい　龜山院にまで嫌疑を掛けるとは餘りだの意。

中宮の御兄權大納言公衡、一院の御前にて、「このことは猶禪林寺殿の御心合せたるなるべし。後嵯峨院の御處分を引きたがへ、あづまより、かく當代をもすゑ奉り、世をしろしめさする事を、心よからず思すによりて、世をかたぶけ給はむの御本意なり。さてなだらかにもおはしまさば、まさる事や出でまうで來む。院をまづ六波羅にうつし奉らるべきにこそ」など、かの承久の例も引き出でつべく申し給へば、いといとほしうあさましと思して、「いかでかさまではあらむ。じちならぬ事をも、人はよく言ひなすものなりかし。故院のなき御影にも思さむ事こそいみじけれ」と、涙ぐみてのたまふを、心弱くおはしますかなと、見奉り給ひて、猶内よりの仰など、きびしき事ども聞ゆれば、中の院も、新院も、思し驚く。いとあわたゞしきやうになりぬれば、如何はせむにて、しろしめさぬよし誓ひたる御消息など、あづまへ遣されて後ぞ、事しづまりにける。

【通解】中宮の御兄の權大納言公衡は、後深草院の御前で、「この事は、やはり龜山院樣が御心を合せてなされた事でせう。後嵯峨院の御遺言の御處置をすつかり變へて、鎌倉から、斯く今上陛下をも帝位に卽け奉り、世を治めさせる事を、御不快に思召されるによつて、天下を覆し給はう御考へです。そのまゝ安泰でいらつしやるやうでしたら、更にこれ以上の事が起つ　參りませうか。依つて龜山院をまづ以て六波羅にお遷し申上ぐべきであります」など、彼の承久に三上皇を遠島にお遷し申上げた例をも引起しさうに申上げなされると、後深草院は、誠に御可愛さうに餘りの事とお思ひ遊ばされて、「どうしてそれ程にあらう。事實でない事をも、世間の人はよくそんな風に言ふものだヨ。後嵯峨院の亡き御靈にも何と思召されよう、その思召の程も誠に畏多い事だ」と、涙ぐんで仰せ遊ばすのを、お心弱くいらせられるなアと、御見上げ申される、そしてなほ、天子からの勅諚など、嚴重な事も色々と世に聞えるので、龜山院も後宇多院もお驚き遊ばされる。事が甚だ危急なやうになつて來たので、どうも仕方がないといふ事で、更に御存知ない旨を誓つた御親書を、龜山院から關東へ御遣しになつて後に、漸く事が鎭まつたのでした。

【語義】○禪林寺殿　龜山院の御所で、やがて龜山院の事を申す。○後嵯峨院の御處分　後嵯峨院の御遺詔に龜山の御一統のみ皇位をつぐやうに御處置あつたのをいふ。こゝの「御處分」は御遺產分配といふよりも御處置といふ方の意。○さてなだらかにもおはしまさば　諸註「このまゝ寛大の御處置あらば、といふに一致してゐるが、「さて」は「御本意なり」を受けた語で、こゝは寛大な處置の結果から言つた趣。卽ち、このまゝ龜山院が御安泰であられるやうだと、の意。○引き出でつべく　「引き出しさうに峻嚴に論ずる」とも取れるが、「引き起しさうに」卽ち、そんな事態にもなりさうにの意に取るが自然だらう。○いかでかさまではあらむ　龜山院にはそんな事は無いといふ意と、そんなに迄する事はないといふ意と、兩意に亘るやうに聞える。○じちならぬ　「實ならぬ」卽ち虛僞の事。○御影　御姿の意、御靈の事をいふ。○內よりの仰など　伏見帝よりの嚴重な勅諚と一續きにも取れようが、「勅諚など色々と容易ならぬ事」と見る方が自然だらう。○聞ゆれば　諸註「本院或は兩院に申上げると」といふに一致してゐるが、それなら「聞え給へば」「聞え奉れば」などあるべきだらう。こゝは上の「見奉り給ひて」で文の筋が一轉化した「て」の特格と見るべきだらう。○あわたゞしき　事が危急に迫つたの意。○如何はせむにて　是非もない事で。○しろしめさぬよし　淺原事件は全く知らぬ、關係がないといふ旨。

「さても……出立ちたりしやゝ良問題

「棧敷ども」以下やゝ良問題

第十四　つげの小櫛

さても石清水の流をわけて、鬪の東にも、若宮ときこゆる社おはしますに、八月十五日、都の放生會をまねびて行ふ。そのありさま誠にめでたし。將軍もまうで給ふ。位あるつはもの、諸國の受領どもなど、いろ〳〵の狩衣、思ひ〳〵の衣かさねて出立ちたり。赤橋といふ所に、將軍御車とゞめて下り給ふ。上達部は、うへのきぬなるもあり、殿上人など、いと多く仕うまつれり。この將軍は、中務の宮の御子なり。このころ權中納言にて、右大將かね給へれば、御隨身ども、花を折らせてさうぞきあへるさま、都めきておもしろし。法會のありさまも、本社にかはらず、舞樂、田樂、獅子がしら、流鏑馬など、さま〴〵所にしつけたる事どもおもしろし。十六日にも猶かやうの事なり。棧敷どもいかめしく造り竝べて、いろ〳〵の幔幕などひき續けて、將軍の御棧敷の前には、相模守をはじめ、そこらの武士ども竝居たるけしき、さまかはりて、好ましうけばり

たる、心地よげに、所につけては、又なく見えたり。

【通解】　さても石清水八幡宮の御分靈を勸請して、關東鎌倉にも、若宮八幡宮と申す社がいらせられるが、その社に於て、八月十五日に、都の石清水八幡の放生會をまねて、放生會を行ふ。その有樣が誠に見事です。將軍惟康も御參詣遊ばされる。位のある武士、諸國の國司共などが、樣々な狩衣、思ひ〳〵の衣を重ねて裝ひ立ててゐる。社前の赤橋といふ所に、將軍は御車を止めてお下りになる。上達部は、袍を着けたのもあり、殿上人など、非常に澤山お供を申上げてゐる。この將軍は、中務の宮宗尊親王の御子樣です。この頃は櫃中納言で、右大將を兼ねておいで遊ばすので、御隨身共が、互に美々しく裝ひ立ててゐる有樣が、都めいて面白い。法會の有樣も、本社石清水八幡宮と變りはない。それに又、舞樂、田樂、獅子舞、流鏑馬など、色々と土地でやりつけてゐる事どもが行はれて面白い。十六日にもやはりそのやうな事です。棧敷ども立派に造り並べて、色々の幔幕などを引き續けて、將軍の御棧敷の前には、相模守貞時を始めとして、澤山の武士たちが並んで居た樣子が、趣が變つて、感じよく得意然としてゐる樣も、如何にも心持よささうで、場所柄につけては、この上なく面白く見えました。

【語義】　○流をわけて　御神靈を分けたのを勸請して。水の緣語で「流」といふ。○若宮　鎌倉の若宮八幡宮。○放生會　社前で魚鳥を放つ法會。○受領　國司の事で、こゝは守護地頭をいふ。○出立ちたり　裝つてゐる。○赤橋　鎌倉八幡宮社前にあつて本社への通路になつてゐる反橋の稱。○うへのきぬ　袍即ち本格の禮裝。○右大將かね給へれば御隨身ども　右大將を兼ねてゐられるから御隨身がつく、その隨身が云々といふ文の筋。○花を折らせて　殊更美々しく裝つての意の慣用語。○獅子がしら　獅子舞、唐獅子の頭を作つたものを冠つて舞ふ。○流鏑馬　騎射の儀で、角板の的を三處に立てて、馬を馳せながら鏑矢で射るもの、武家では重い儀式として、放生會の時には必ず行はれた事が吾妻鏡に見えてゐる。○所にしつけたる事ども　土地で、即ち鎌倉で常にやりつけてゐる色々な事。○いかめしく　見事に、業々しく。○幔幕　上下を横幅にし、中を竪幅にして作つて陣所などに引廻す幕。○さまかはりて　大宮人とは樣變つて。○好ましうけばりたる　見た目の感じがよく、おッぱッて得々としてゐる樣が。「うけばりたる」は我こそはといふ風に大きく得意然と構へ込んだ樣子をいふ。○所につけては　外では鬼も角、この鎌倉といふ所柄としてはの意。○又なく　又なく面白く。

文檢程度の良問題

その後いくほどなく、鎌倉より騷がしき事出で來て、皆人きもをつぶしさゞめくといふ程こそあれ、將軍都へ流され給ふとぞ聞ゆる。めづらしき言の葉なりかし。近く仕うま

つる男女、いと心細く思ひ歎く。たとへば御位などのかはる氣色に異ならず。さて上らせ給ふありさま、いとあやしげなく網代の御輿を、逆に寄せて乘せ奉るも、げにいとまが〳〵しき事のさまなり。うちまかせては、都へ御上りこそ、いとおもしろくもめでたかるべきわざなれど、かくあやしきは珍かなり。

【通解】　その後幾らもたゝぬうちに、鎌倉から騷々しい事件が起つて來て、世の人々が肯膽をつぶして驚きさゝやいてゐる内に、今度は將軍が都へ流され遊ばされるといふ話です。都へ流されるとは珍しい言葉ですワネ。將軍に近くお仕へ申してゐる男も女も、誠に心細い事に思ひ歎く。譬へば天子樣の御代などが代る時の有樣と違ひはありません。さて都へお上り遊ばされる御有樣は、誠に賤しい風の網代の御輿で、而もそれを逆に寄せてお乘せ申上げるのも、ほんとにどうも不吉ッたらしい事の趣です。一口に申せば、都へ御上りこそは、誠に面白く結構であるべき事ではあるが、こんなに變な御上洛は珍しい事です。

【語義】　○騷がしき事　騷動。執權貞時が、管領平頼綱の讒を信じて、外戚安達泰盛父子を殺し、後頼綱の非望を知つて之を誅し、遂に惟康將軍を廢するに至つた事變をいふ。○程こそあれ　「程に」を强めた語。徒然草に「花もやう〳〵けしき立つ程こそあれ折しも雨風打續きて」とあると同じ趣。○めづらしき言の葉　流罪といへば都から他國へ流されるが普通だのに、都へ流されるとは珍らしい言葉だの意。○逆に寄せて　罪人の押送には行く先を背にして後ざまに舁いで行くのである。○うちまかせては　大方は、一概にいへば。「普通ならば」と解しては語の感じがそれる。

文永三年より今年まで二十四年、將軍にて、天下のかためといつかれ給へれば、日の本の兵をしたがへてぞおはしましつるに、今日は彼等にくつがへされて、かくいとあさましき御有樣にてのぼり給ふ。いといとほしうあはれなり。道すがらも、思し亂るゝにや、御たゝう紙の音しげう漏れ聞ゆるに、たけきものゝふも涙おとしけり。

【通解】　文永三年から今年まで二十四年間、將軍として、天下の重鎭と崇められておいでになつたので、この日本の國の武士を從へていらせられたのに、今日は彼等に將軍の位を奪はれて、こんな風に實にどうもなさけない御有樣で都へ御上りになる。誠においたはしく哀な事です。御道中でも、思ひ亂れ遊ばすのでせうか、御鼻紙の音がしげ〳〵と漏れ聞えるにつけ、强い武士たちも涙を落した事でした。

【語義】　○天下のかためといつかれ　天下を固め護つてゐる御方として大切に崇められて居られた。○日の本の兵をしたがへてぞおはしましつるに　日本の武家の棟梁として彼等を從へておいでになつたのに。

○くつがへされて　ひつくりかへされて、將軍の職を奪はれて。○たゝう紙　墨紙、鼻紙をいふ。こゝの文章は鼻紙で度々鼻をかんで、涙を拭はれる、その音がしげ〳〵と漏れ聞えるにつけての意。○たけきものゝふも涙おとしけり　さすがに勇猛な武士も同情の涙を流した。

さてこのかはりには、一院の御子、御母は三條内大臣公親の御むすめ、御匣殿とて候ひ給ひし御腹なり。當代の御はらからにて、今少しよせ重く、やんごとなき御有様なれば、只受禪の心地ぞしける。もとの將軍おはせし宮をば造り改めて、いみじうみがきなす。つはものの勝れたる七人、御むかへに上る中に、いひぬまの判官といふもの、前の將軍のぼり給ひし道もまが〳〵しければ、あとをも越えじとて、足柄山をよぎて上るなどぞ、あまりなる事にや。皇子は十月三日御元服したまひて、久明親王ときこゆ。おなじき十日、院よりやがて六波羅の北方、さきざきも宮のわたりたまひし所へおはして、それよりぞ東に赴かせ給ふ。

【通解】　さてこの惟康親王の代りとしては、後深草院の御子様で、御母は三條内大臣公親の御息女、御匣殿と申して御仕へ遊ばされた方の御腹です。今上伏見帝の御兄弟で、前の惟康親王より今少しうしろだてが重く、尊貴な御有様なので、丸で帝位ゆづり受けの時のやうな心持がしたのでした。もとの將軍のいらしつた御殿を改造して、非常に美々しく磨き立てる。武士の屈竟なのが七人、御迎へとして都へ上る中に、飯沼の判官といふ者は、前の將軍の御上りになつた道も不吉だから、その跡をも踏むまいというて、わざ〳〵足柄山を避けて上つたのであつたが、これなどは餘りな事でせうか。この皇子は十月三日に御元服遊ばして、久明親王と申上げる。同じ十日に、後深草院からそのまゝぢかに六波羅の北館、前々も將軍の宮の住つておいで遊ばした所へいらしつて、そこから關東に赴き遊ばされた。

【語義】　○よせ重く　後楯が重い、背景が重い。惟康親王は孫王に當らせられるが、この方は後深草院の皇子で、今上の皇弟だから今一段後楯が重いといふのである。○只受禪の心地ぞしける　凡てが重々しくて、將軍繼承が丸で帝位繼承と思はれる程の事々しさだの意。印本には「夢幻の心地ぞする」とあるがそれはしつくりしない。○いひぬまの判官　飯沼だらう。判官は檢非違使尉の稱。○まが〳〵しければ　不吉だから、不祥だから。○あとをも越えじとて　前將軍の上つた跡をも通るまいと。斯うなると鎌倉から京都まで全然別の道を通る事になるが、只箱根路と足柄路と二つあつて、當時足柄路が普通だつたのに、こんな理由で殊更に箱根路を取つたといふのであらう。○よぎて　よけて、避けて。○六波羅の北方　六波羅の北の方の館。○さきざきも云々　以前にも將軍の宮が御住所とせられた事のあるその北館にお越し遊

ばされて。○それよりぞ　その北館から御進發になつて。

同二十五日、鎌倉へつかせ給ふにも、御關むかへとて、ゆゝしき武士ども、うちつれて參る。宮はきくのとれむじの御輿に、御簾あげて、御覽じ習はぬえびすどものうち圍み奉れる、たのもしく見給ふ。しのぶをみだれ織りたる萌黄の御狩衣、紅の御衣、濃き紫の指貫奉りて、いと細やかになまめかし。いひぬまの判官、とくさの狩衣、青毛の馬に、金のかなものの鞍置きて、隨兵いかめしく召し具して、御輿のきはにうちたり。都にたとへば行幸に、しかるべき大臣などの仕うまつり給へるによそへぬべし。

【通解】　同月二十五日、新將軍が鎌倉へ御着き遊ばされる時にも、御關迎へといふて、堂々たる武士どもが、打連れて參る。宮は菊の外櫻子の御輿にお召しになつて、御簾を上げて、御見なれ遊ばさぬ荒武士共の御輿を打圍み申上げて居るのを、頼もしく御覽遊ばされる。將軍の宮は、忍草を亂れ織りにした萌黄の御狩衣、紅の御衣、濃い紫の指貫の袴をお召しになつて、どく細つそりと御上品にいらせられる。飯沼の判官が、木賊色の狩衣で、青毛の馬に、金の金物の鞍を置いて、從兵を嚴重に召し連れて、御輿のすぐわきに騎從してゐる。都の事にたとへたら、天子樣の行幸に、然るべき大臣などの供奉していられるのにも比べられませう。

當年の面影を忍ぶべし

【語義】　○關むかへ　遠來の人や旅行から歸る人を關所まで出迎へる儀で、京都ならば逢坂關、鎌倉ならば普通足柄關まで出迎へる。但し、こゝは箱根關。○ゆゝしき　立派な。○きくのとれむじ　この語は不明だが、蓋し「菊の外櫻子」の儀で、輿の外部に格子を設けて、菊の紋をつけたものかといふ。○えびす、荒々しい武士。○しのぶをみだれ織りたる萌黄の御狩衣　忍草の形を亂模樣に織つた萌黄の御狩衣。○紅の御衣　紅染の御小袖。○とくさの狩衣　木賊色、卽ち青黑い色の御狩衣。○青毛の馬　黑に青い差毛のある馬。○金のかなものの鞍　金覆輪の鞍。鞍の前後の山形や、爪先等を黃金で裝つた鞍。○うちたり、騎馬でお伴をしてゐる。○よそへぬべし　比して然るべきであらうの意。

三日が程は、わうばむといふ事、又、馬御覽、何くれといかめしき事ども、鎌倉うちのけいめいなり。宮の中のかざり、御調度などは更にもいはず、帝釋の宮殿もかくやと、七寶を集めて磨きたるさま、目もかゞやく心地す。いとあらまほしき御有樣なるべし。關の東を、都のほかとて、おとしむべくもあらざりけり。都におはしますなま宮たち

の、より所なくたゞよはしげなるには、こよなく勝りて、めでたく賑はゝしく見えたり。

【通解】 三日が間は、新將軍への御饗膳といふ事、それから又、新將軍の御閲馬、何や彼やと厳かな事を色々と、鎌倉幕府總掛りの御もてなしです。御所の中の裝飾、御手廻りの道具などは更めていふ迄もなく、帝釋天の宮殿も斯うかと思はれる程、七珍萬寶を集めて磨き立てたさまは、目もきら〳〵するやうな心持がする。誠に望ましく結構な御有樣でありませう。關東の事を都の外だというて、どうしてどうして馬鹿になんぞすべきではないのでした。都にいらせられるなまじツかの宮樣方の、頼り所もなく世に漂ふといつた風なのに比しては、格段にすぐれて、誠に結構に賑々しく見えてをります。

【語義】 ○わうばむ　椀飯。人に馳走する食膳の事で、それから一般に馳走の儀にいふ。俗に「わうばんぶるまひ」などいふのがそれで、こゝは膳部を將軍に献ずる儀をいふ。○鎌倉うちのけいめい　鎌倉幕府内全部總掛りの經營の意。○帝釋の宮殿　善見天の殊勝殿の事で、莊厳な宮殿の喩として引かれる。○七寶　七種の珍寶。色々説があるが、普通、金・銀・瑠璃・頗梨・珊瑚・瑪瑙・硨磲の稱とする。勿論事實それだけの珍寶を集めたといふでなく、種々樣々な珍寶を集めて磨き立てたといふのである。○あらまほしき　さうありたい、望ましい、理想的なの意。○關の東を云々　關東鎌倉を一概に都の外の田舍だと見くびるべきではないの意。○なま宮たち　なまなかの宮樣方。○より所なくたゞよはしげなるには　うしろだてとして頼むべき外戚などもなく、よるべないさまで暮してゐるやうな方に比しては。「たゞよはしげ」は、水に漂ふやうにたよりなく暮してゐるの意。

時宗朝臣といひしも、又頭おろして、法光寺の入道とて、いとたふとく行ひて、世にもいろはず、太郎貞時の相模守といふにぞ、よろづ言ひつけける。さても上り給ひにし前大將殿は、嵯峨のほとりに、御ぐしおろし、いとかすかに、さびしくてぞおはしける。

【通解】 時宗朝臣というた方も、やはり剃髪して、法光寺の入道というて、大層尊く佛道を行ひすまして、世の中の事にもかゝづらはず、長男の貞時の相模守といふ者に、萬事言ひつけて行はせたのでした。さて前に都にお上りになつた前大將殿惟康親王は、嵯峨の邊で、御剃髪になつて、誠にひつそりと、寂しく暮しておいで遊ばすのでした。

【語義】 ○世にもいろはず　世の中の事にも關係しない。「世をもいろはず」ともいふ。○よろづ言ひつけける　天下の事を萬事皆言ひつけてさせた。

かくて年かはりぬ。その年二月の頃、一院御髪おろし給ふ。年月の御本意なれど、たゆたひ過し給ひけるに、禪林寺殿、去年の秋思し立ちにしに、いとゞ驚かされ給ひぬるにやありけむ。二月十一日、龜山殿にて、いむ事うけさせ給ふ。四十八にぞならせ給ふ。御法名素實と申すなり。

【通解】　かうして年が改つた。その年の二月の頃に、後深草院は御剃髪遊ばされた。長い間の御望みではあつたが、それを躊躇してお過し遊ばして居つた内に、龜山院が、去年の秋御出家を思立ち遊ばしたので、それに一入驚かされ遊ばしての御思立ちでありませうか。二月十一日に、龜山殿で、佛戒をお受け遊ばされた。御年四十八におなり遊ばされる。御法名は素實と申すのです。

【語義】　○その年　正應三年。○年月の御本意　永年の御希望。○たゆたひ過し　出家するのを躊躇して年月を過し。○いとゞ驚かされ　兼ねてその御考へのある所へ却て龜山院に先を越されたので、おやこれはと一入その事に驚かされ給うたといふ思想。○にやありけむ　この語は下の文句に對する副詞的終止のやうにも取れるが、上の「御髪おろし給ふ」を説明した完全終止と見る方が自然だらう。○いむ事うけさせ給ふ　御受戒あらせられた。

程なく明け暮れて、永仁も六年になりぬ。七月二十二日、春宮に御位譲りて、おり給ひぬ。霜月になりて、五節の頃、去年を思し出でて、そのをりに關白におはせし兼忠のおとゞに、櫛つかはすとて、新院、

少女子がさすや小櫛のそのかみを、ともに馴れにし時ぞ忘れぬ。

御かへし、歡喜園前攝政殿、

いとゞ又去年の今宵ぞ忍ばるゝ、つげの小櫛を見るにつけても。

【通解】　程なく年が明け暮れて、永仁も六年になりました。七月二十二日に、伏見帝は、春宮（後伏見帝）に御位を譲つて、帝位をお下りになつた。十一月になつて、五節の舞の頃に、去年の事を思ひ出し遊ばして、その折に關白でいらせられた兼忠の大臣に、櫛をお遣はしになるといつて、伏見院は、

少女子が……＝少女子たちが小櫛をさして五節の舞を舞ふのを、共々に馴れて眺めたその當時が忘れられない。

と御詠みになつた。その御返歌に、歡喜園前攝政兼忠公、

史實特に注目すべし

いとゞ又……＝拜領のつげの小櫛を見るにつけても、一入又去年の今夜五節の舞を見たその折の事が思ひ出される事であります。

【語義】○五節　五節の舞、十一月、大嘗祭又は新嘗祭の節會に行はれる女舞。こゝは大嘗祭後の五節である。○去年を思し出でて　去年の十一月新嘗祭の後に行はれた五節の舞の事を思ひ出し遊ばされての意。○櫛　五節の舞姫のさす櫛。○少女子が云々　上の二句は「そのかみ」の序であるが、同時に五節の舞の義をも含めた趣である。「そのかみ」は「その當時」の意に「髪」の意を掛け、舞姫の髪を卿と共に馴れて眺めた時が忘られぬと仰せられたのである。「ともに馴れにし」とは、朕も帝位に在り、卿も關白の當職にあつて、共々に親しく馴れてゐたとの御意である。○いとゞ又　一層又、又更に一段と。○去年の今宵ぞ忍ばるゝ　去年の今夜の五節の事が思ひ出されるの意。○つげの小櫛　黄楊で造つた櫛、舞姫のさす櫛。

正安二年正月三日、御門御元服したまふ。今年十三にならせ給へば、御行末はるかなる程なり。又の年正月の頃、内侍所の御しめのおり給へるは、いかなるべき事にかなど、忍びてさゝめく程こそあれ、東よりの御使のぼるとて、世の中さわぎて、「禪林寺殿見奉り給ふ世に」とや、正月二十一日、春宮御位に即かせ給ひぬ。おりゐの御門御年十四にて、太上天皇の尊號あり。いときびはに、いたはしき御事なるべし。僅に三年にておりさせ給へれば、何事のはえもなし。この春は春日社に行幸などあるべしとて、世の中、まだきより、おもしろき事にいひあへりつるも、かいしめりて、いとさうゞしし。さてこの君を新院と申せば、父の院をば中院ときこゆ。御門の御父は一院と申す。法皇も、このころは一所におはしますなめり。一院世の政事きこしめせば、天下の人、又おしかへし一方になびきたる程も、さも目の前にうつろひかはる世の中かなと、あぢきなし。

【通解】正安二年正月三日に、天子樣が御元服遊ばされる。今年十三におなり遊ばすので、まだ〳〵御前途遙かな御年配です。その翌年正月の頃、内侍所の御注連繩がお落ちになつた、これはどんな事の前兆だらうかなど、こそ〳〵とさゝやいてゐる内に、恰も鎌倉からの御使が上洛するといふ事で、世の中が騒ぎ立つ、そしてその使の趣旨は、「龜山法皇がお治め遊ばされる世の中に」といふ事であつたのか、正月廿

一日に、春宮が御位にお即き遊ばされた。御退位の天子様は御年十四で、太上天皇の尊號があつた。まだごく御幼少で、おいたはしい御事でありませう。僅か三年で御退位遊ばしたので、何の花やかな事柄もない。この春は春日神社へ行幸などあるべしといふ事で、世の中では、まだその時にならぬ内から、面白い事に噂し合つてゐたが、それもこんなことになつて、ひつそりとして、誠に物淋しい。さてこの帝を新院と申すので、父の伏見院をば中院と申上げる。天子様の御父後宇多院は一院と申す。亀山法皇も、此の頃は後宇多院と御一所の御殿にいらつしやる風です。一院が世の政事をお取り遊ばすので、世の中の人々は、又押し返してその御一方に靡き從つてゐる有様も、斯うも目の前に移り變る世の中よと、誠になさけなく思はれる。

【語義】○内侍所　温明殿に在つて神鏡を奉安してある所。○おり給へる　落ちたのを殊更に斯くいふ。○程こそあれ　「程に」を強めた表現。○さわぎて　「騒ぐそして」の意で、この「て」は話の筋の展開を現す用例。○禪林寺殿云々　禪林寺殿は亀山法皇の御所。法皇が院中で天下を治めさせ給ふ様になし奉らうとして、その御系統の皇太子を位に即け奉らんがための使者であつたのかの意。○きびは　幼稚、幼少。○三年　永仁六年から正安三年迄で、事實は足掛四年になる。○何事のはえもなし　何等映々しい事もない。○まだきより　早くから、まだその時にならぬ中から。○いひあへりつるも　いひ合つてゐたがそれも空しくなつての意。○かいしめりて　御讓位のために、世の中がしめつぼくひつそりとして了つての意。

○一所におはしますなめり　後宇多上皇と同一の御所にいらせられるやうだ。○一院云々　院政として、亀山法皇でなく、後宇多上皇が天下の政事をお取りになつたのである。○又おしかへし云々　今迄は持明院方に奉仕してゐたのであるが、今度は又がらつと變つて、反對に亀山院方に靡き從つてゐるのも。「なびきたる程も＝あぢきなし」と續く文の筋で、この「程」は様子有様の意に近い特義。○一方に　他の一方にの意。○さも　なるほど斯うもの意。○うつろひかはる　移り變る、變轉する。○あぢきなし　つまらぬ、なさけない。しみじみ世の中がなさけなく面白くなく思はれるといふ思想。

持明院殿には、世の中すさまじく思されて、伏見殿に籠りおはしますべく宣へれど、二の御子坊に定まり給へば、又めでたくて、なだらかにておはしますべし。先に聞えつる御母女院の御はらからの姫君、縁親門院と聞えし御腹なり。八月十五日まづ親王になし奉らせ給ひて、同二十四日に春宮に立ち給ひぬ。

【通解】持明院殿系の後深草院、伏見院には、世の中を面白くなく思召して、伏見殿にとぢ籠つて世にまじらはぬやうになされさうに仰せられたが、伏見院の第二の皇子が皇太子にお定り遊ばしたので、又誠

に結構な事で、御不平もなく穏かにいらせられる事でせう。この御子は、先に御話申上げた御母女院の御妹の姫君で、顯親門院と申した方の御腹です。八月十五日にまづ親王におなし申上げられて、同二十四日に春宮にお立ち遊ばされた。

【語義】○すさまじく　面白からず、不興に。○伏見殿に云々　伏見殿の中に籠居して、世にも出で交らふまいと御意あつたの意。○二の御子　花園帝とならせ給ふ。○坊　皇太子。○なだらかに　御心も平穏に、御不平もなく穏かで。○御母女院　伏見院の御母玄輝門院、藤原愔子、實雄の御女。○親王になし奉らせ給ひて　親王宣下があつたのである。

かくて新帝は十七になり給へば、いと盛りに美しう、御心ばへもあてに氣高う、すみたるさまして、しめやかにおはします。三月二十四日御即位、この行幸の時、花山院〻三位〻中將家定、御劍の役をつとめ給ふとて、さかさまに内侍に渡されけるを、今出川の大臣御覽じ咎めて、出仕とゞめらるべきよし申されしかど、鷹司の大殿、「なか〳〵沙汰がましくてあしかりなむ。たゞ普なくてこそ」と申しとゞめ給へりしこそ、なさけ深く侍りしか。後に思へば、げにあさましきことのしるしにや侍りけむ。十月二十八日御禊、

この度の女御代にも、堀川の大臣の姫君いで給へり。今のうへも、源氏の御腹にてものし給ふ。いと珍しくやむごとなし。されど、うけばりたるさまにはおはせぬぞ、心もとなかめる。

【通解】斯うして新帝は十七におなり遊ばすので、今眞盛りの御年配で御美しく、御氣立も貴く氣高く、取すました御樣子で、しつとりとしていらせられる。三月二十四日に御即位、その行幸の時に、花山院の三位中將家定が、御劍の役をお勤め遊ばすというて、御劍をさかさまに内侍に渡されたのを、今出川の大臣公衡公が御見咎めになつて、出仕を止め謹慎を命ぜらるべき旨を申されたが、鷹司の大殿基忠公が、「さうするのは却て角が立つてよろしくあるまい。たゞ默つてそのまゝすます方がよいでせう」と申しとゞめ遊ばしたのは、誠にどうもなさけ深い事で御座いました。後から思ひ合はせると、それはほんとに大變な不祥事の前兆で御座いましたらうか。十月二十八日に御禊、今度の女御代にも、堀川の大臣源具守の姫君がお出でになつた。今の天子樣も、源氏の姫君の御腹でいらせられる。斯うして代々源氏の姫君が後宮に上られる事は、誠に珍しく尊い事です。然し、どうしても攝家などのやうにおつぱつて勢力を揮ふといふ趣ではいらせられぬのが、誠に心もとない事でありませう。

【語義】 ○すみたるさまして　眞面目に取りすました樣子で。○しめやかにおはします　沈着にいらせられる。○この行幸　御即位のために太政官廳への行幸。○御劔の役　行幸の時、畫の御座の御劔を取つて内侍に傳へる役。○さかさまに　御劔を逆に。○内侍　掌侍。○出仕とゞめらる　宮中への出仕を差止める、即ち固く謹慎を申付ける。○なか〳〵沙汰がましくてあしかりなむ　そんな事をするのは、却て表沙汰がましく角が立つて、折角の御大禮を傷つける事になるからよくあるまい。○音なくてこそ　そのまま默つて、問題にせずに過した方がよからうの意。○げにあさましきことのしるし　そんな失態はとかく不吉を豫感されるものだが、なるほどこれもさういふ前兆であつたらうかの意。この帝は在位僅に七年、二十四で崩ぜられた事を指す。○女御代　御禊の時女御の代りとして供奉する女官。○堀川の大臣の姫君　内大臣源具守の女瑜子、帝の御母基子の妹君。○源氏の御腹　堀川の内大臣源具守の御女基子の御腹。○うけばりたるさまにはおはせぬ　攝家の女などは外戚の勢力を背景にして大つぴらに勢力を揮ふが、源氏の姫君はどうも肩身が狹いの意。○心もとなかめる　たよりない、おぼつかないといふ思想。

かくて又の年春の頃より、東二條院御惱日々におもり給ひて、今はと見えさせ給へば、伏見殿へ出でさせ給ひて、遂にうせさせ給ひぬ。七十に餘らせ給へば、ことわりの御事なり。法皇もその御なげきの後、をさ〳〵物聞しめさずなどありしをはじめにて、うち續き心よからず、御わらはやみなど聞ゆる程に、七月十六日、二條富小路殿にてかくれさせ給ひぬ。六十二にぞならせ給ひける。いとあはれに悲しき事ども、いへばさらなり。御孫の春宮も一つにおはしましつれば、急ぎて外へ行啓なりぬ。御修法の壇ども、こぼこぼと毀ちて、くづれ出づる法師原のけしきまで、今を限りと、とぢめはつる世のありさま、いと悲し。宵過ぐるほどに、六波羅の貞顯、憲時二人、御とぶらひに參れり。京極おもての門の前に、床子にしり掛けてさぶらふ。隨ふものども、左右になみゐたるさま、いとよそほしげなり。

【通解】 斯うしてその翌年の春の頃から、東二條院は御病氣が日に〳〵重り遊ばして、いよ〳〵御臨終とお見え遊ばしたので、伏見殿へ御出ましになつて、遂におなくなり遊ばしました。御年七十に餘り遊ばすので、御年に御不足はないわけです。法皇もその御愁傷の後は、とんと物も召上らぬなどいふ風であつたのが始りで、打續き御不例で、御癒病など申す内に、七月十六日に、二條富小路殿で崩御遊ばしました。

六十二におなり遊ばしたのでした。誠に哀れに悲しい次第、更めていふ迄もありません。御孫の春宮も御一緒でいらしつたので、急いで外へ行啓になりました。御祈禱の壇どもを、がた〳〵と打こはして、どさどさと崩れ出る法師共の様子まで、今が限りと、何も彼もおしまひになつて了ふ世の有様、實に悲しい。宵過ぎる頃に、六波羅の貞顯と憲時の二人が、御弔問に參つた。京極おもての門の前に、床几に腰を掛けて控へてゐる。隨兵どもが、ずらつと左右に並んで居る様子、誠に物々しい事です。

【語解】　○又の年　嘉元二年。○東二條院　後深草帝の皇后公子。○今はと　今はもう御臨終と。○とわりの御事　御年の上から申せば、崩御も御道理の事の意。○その御なげき　東二條院の崩御に對する御愁嘆。○をさ〳〵　少しも。○ありしをはじめにて　「ありしがはじまりにて」の意。○わらはやみ　瘧病、おこり、間缺熱。○春宮　花園帝とならせ給ふ御方。○一つにおはしましつれば　二條富小路殿に同じく御住居あらせられたので。○外へ行啓　御穢に觸れさせ給はぬため他所に行啓あらせられたのである。○こぼこぼと　がた〳〵と、壇を打毀す音の形容。○とぢめはつる世のありさま　萬事おしまひにして了ふ世の有様、諸莊概ね「世の中も終り果てて了ふかと思はれるやうな有様」といふ趣に解してゐるが、「世」はその御方の世で、一般に世の中を指してゐる趣ではないと思ふ。○京極おもての門　二條富小路の東の門をいふ。○隨ふものども　隨兵、非常警固のため兵を隨へたのである。○よそほしげなり　裝々しい、物々しい、嚴重だの意。

文檢程度としてやゝ良問題

又の日、夜に入りて、深草殿へゐてわたし奉る。御車さし寄せて、御棺乘せ奉る程、うちとよみあひたる、いとことわりに、心をさむる人もなし。院の御前、宮たちなど、藁履とかやいふもの奉りて、門まで御送つかまつらせ給ひて、とみにもえのぼらせ給はず、御直衣の袖をおしあてて、遙かに程經てぞ、御車にたてまつりて、伏見殿へ御おくりもせさせ給ひける。院のうちゆゝしきまで泣きあへり。後深草院とぞきこゆめる。御日數のほどは、伏見殿に、宮たち遊義門院などおはします。秋さへ深くなり行くまゝに、よとともの御涙、ひる間なく思しまどふ。遊義門院、

物をのみ思ひねざめに、つくづくと見るも悲しきともし火の色。

春着てし霞のころも乾さぬ間に、こゝろもくるゝあきぎりの空。

【通解】　翌日、夜に入つてから、御尊骸を深草殿へ御移し申上げる。御車をさし寄せて、御棺を御乘せ申上げる時分には、皆おい〳〵と聲をあげて泣き立てる、それも如何にも道理で、じつと心を鎭めてゐる人もない。伏見院様、宮様方など、藁履とかいふものをお召しになつて、御門まで御棺をお送り申上げ遊

ばして、急にはよう御車にも御乗り遊ばされず、御直衣の袖を額に押當てて泣き沈んでいらしつて、遙かに程經てから、御車にお召しになつて、伏見殿への御見送も遊ばしたのでした。院中はあまり不吉がましい迄に皆々泣いてゐる。後深草院と申上げるやうです。御中陰の四十九日の間は、伏見殿に、宮々遊義門院などいらせられる。秋も深くなつて行くにつけて、絶えず流れる御涙の、乾く間もないやうに御歎き遊ばされる。遊義門院の御詠、

物をのみ……‖只もう物思ひに沈んで寢て、目を覺してはつくづくと眺める燈火の色も誠に物悲しい事だ。

春着てし……‖この春は東二條院の崩御で、その時着けた喪服の涙も乾かぬ間に、又斯うしてこの秋は法皇の崩御に遭ひ奉つて、秋霧の空のやうに、心も闇にくれまどふ事であります。

【語義】○ゐてわたし　「率て渡し」の意。○うちとよみあひたる　おい〳〵と聲を出して泣き立てるのをいふ。○心をさむる人もなし　じつと心を取りしづめて平靜にしてゐる人もない。○藁履　葬送の時にはく粗末な沓、葬送の人は之をはいて白木の杖を持つ。○門まで　富小路御殿からその御門の所まで。○とみにもえのぼらせ給はず　門から後には御車で御送りであるが、急には御乘車もあらせられぬの意。○おしあてて　御額におし當てて。○伏見殿へ云々　深草殿は所在不明だが、そこで荼毘に附せられ、伏見上皇方はそこ迄はいらせられず、伏見殿まで御見送あらせられたのである。但、公衡公の記によれば、密々に山作所に御幸あつて荼毘を御遠見あらせられた趣である。○ゆゝしきまで　忌々しき迄、さう泣いては却て不吉と思はれる迄の意。○御日數のほど　御中陰、即ち七々四十九日の間。○よとともの御涙　古今集に「世と共に流れてぞ行く涙川、冬も氷らぬ水泡なりけり」とある歌を背景にした文。「よとともに」は「世と共」で一生常に絶える事なきの意。○ひる間なく　かわく間なく。「よ」に「夜」を掛けて「晝間」を兼ねた言葉の綾だらう。○霞のころも云々　春の霞、秋の霧といふ言葉の對應で、「霞の衣」に墨染の衣の意を掛け、「くるゝ」に心のくれまどふ意と秋の空の暮れ行く意とを掛けた言葉の綾。

年かへりぬれば、嘉元も三年になりぬ。萬里小路殿の法皇、また御惱とて、龜山殿へ遷らせ給ふ。いろ〳〵に御修法や何くれ御祈ども、こちたくせさせ給へるも、しるしなくて、九月十五日のあけぼのに、終にかくれさせ給ひぬ。去年今年の世のさがなさ、打續きたる人々の御歎ども、いはむ方なし。

【通解】年が改まると、嘉元も三年になつた。萬里小路殿の龜山法皇も、やはり御不例といふ事で、龜山殿へ御遷り遊ばされた。いろ〳〵に御修法や何やかやの御祈禱どもを、大層に遊ばされたが、それもそ

の效驗がなくて、九月十五日の明け方に、とう〳〵崩御あらせられた。去年今年の世の不祥さ、打續いた人々の御歎は、何ともいはうやうがない。

【語義】○こちたくせさせ給へるも　大層事々しくせられたがそれも。「給へるも」の「も」は主格の「も」。○去年今年云々　去年正月東二條院、七月後深草院、今年又龜山院と、引續き崩御あらせられた世の不祥事。「さがなさ」は「打續き」に直接につゞく主格でなくて、「さがなさに」の趣と見てよからう。

さてしもあらぬ習なれば、同じ十七日に、御わざの事せさせたまふ。ことわりといひながら、いといかめしう人々仕う奉り給ふ。よそほしかりつる御ありさまも、いとほどなく、只ときの間の煙にてのぼり給ひぬれば、誰も誰も夢の心地して、ほの〴〵と明けゆく程に、おの〳〵まかで給ふ。三條大納言入道公貫、萬里小路大納言師重などは、とりわき御志深くて、御荼毘のはつるまで、墨染の袖を顔におし當てつゝ候ひ給ふ。かねてより山道造られて、木草きり拂ひなどせられつれど、露けさぞ分けむ方なき。涙の雨の添ふなるべし。内よりの御使に、はじめ長親朝臣、雅行、有忠朝臣など、三度まゐる。

ふるき例なるべし。

【通解】いつまでさうしてもゐられぬ習なので、同じ十七日に、御葬送の事を營ませられる。固より當然の事とはいひながら、誠に嚴かに人々がお奉仕致される。龜山院のあの美々しくきらびやかであつた御有樣も、誠に程なく、只一瞬の荼毘の烟となつて御上り遊ばされたので、誰も〳〵丸で夢の心持がして、ほの〴〵と夜の明け行く頃に、各々退出致された。三條大納言入道公貫、萬里小路大納言師重などは、とりわけ御追慕の御志が深くて、御荼毘が終るまで、墨染の袖を顔におし當てておいで遊ばされる。前以てから山道を造られて、邪魔にならぬやうに、木や草を伐り拂ひなどせられたが、何分にも露がひどくて、踏み分けて行きやうがない程です。人々の涙の雨が添うて一入露けくなつたわけでせう。天子樣からの御使として、最初長親朝臣、それから雅行、有忠朝臣など、三度まゐる。それは古例に據られたのでありませう。

【語義】○さてしもあらぬ習なれば　いくら悲しくても、崩御あらせられた以上、いつまでさうしてもゐられぬ世の習はしなので。○御わざの事　御葬送の御儀。○ことわりといひながら　今上の御祖父帝に渡らせられるから、天下の人々皆嚴かに奉仕するのは固より當然の事とはいひながらの意。○よそほしか、

りつる御ありさまも　きらびやかに美々しく渡らせられた龜山院の御有樣も。「只ときの間の煙」につゞく句。○いとほどなく　忽ちの内にの意で、「只ときの間の煙にてのぼり給ひぬれば」に掛る副詞。「後二條帝即位の後は御祖父の院にて、よろづきらびやかにおはせし事も、まだわづかなる月日にて、幾程もなく崩御あらせられ」といふ解は立入り過ぎると思ふ。○ときの間の煙にて　一刻の間の煙となつて、茶毘一片の煙となつて。○御深志くて　龜山院を思慕し奉る御志が深くて。○御茶毘　御火葬の儀。○かねてより山道造られて　御葬送のために、前以つて山道を開いて。○露けさぞ分けむ方なき　露けさの分けやうがない。木草の露がはげしくて分けのぼるすべもない程、人々の袖が濡れた。人々が葬送の道々もいたく悲しんだといふ意の文飾。○涙の雨の添ふなるべし　人々の涙が添つて一入露けいのであらう。○内よりの御使　勅使。御葬送御茶毘の模樣など御尋ねのため、三度の勅使が立つたのである。

院の二のみこ、忠繼の宰相の女、今は准后と聞ゆる御腹におはします、この頃帥宮と聞ゆるを、法皇とりわき御傍さらずならはし奉り給ひて、いみじうらうたがり聞えさせ給ひしかば、人より殊に思し歎くべし。頃さへ時雨がちなる空のけしきに、山の木の葉も涙あらそふ心地して、いとかなし。所がらしも、いとゞあはれを添へたり。川浪のひゞき、戸無瀬の瀧の音までも、とり集めたる御心の中どもなり。御日數のほどは、帥宮ひとつ御腹の内親王なども、この院におはします程、つれ〴〵なるまゝに、はかなし事など聞えかはして、花紅葉につけても、睦じくなれ聞え給ふべし。

【通解】　後宇多院の第二皇子で、忠繼の宰相の女忠子、今は准后と申上げる方の御腹にいらせられ、この頃帥の宮と申上げる方を、龜山法皇が特別に御傍放さず御馴し遊ばして、大層お可愛がり申され遊ばしたので、この御子は外の人より殊更悲しく思召してお歎き遊ばす事でせう。時節も時雨がちな九月末頃の空の模樣につけて、山の木の葉も涙と共に競ひ散るやうな心持がして、誠に悲しい。龜山院の場所柄も、一入哀れを添へてゐる。大井川の浪のひゞき、戸無瀬の瀧の音までも、何やかやと一つに集まつて、誠に物悲しい御心の中であります。御中陰の四十九日の間は、帥の宮の御同腹の内親王なども、この龜山院にいらせられるので、その間、遣瀬なく無聊でいらせられるまゝに、つひ何といふ事もない御歌など互に御贈答になり、花や紅葉につけても、仲よくおなじみ遊ばされる事でありませう。

【語義】　○院の二のみこ　後醍醐天皇とならせ給ふ御方。「の」は「にして」の意。詳解本は、「みこの」の下に一本に依つて「御母」と補つてゐるが、文義上それは無い方がいゝと思ふ。○おはします　諸本と

こで終止としてゐるが、思想の筋が繼いてゐるから、こゝで切つて了つてはいけない。○帥宮　太宰の帥に任ぜられたからの稱。○涙あらそふ　涙と相爭つて亂れ散る。○所がらしも　龜山院のある場所柄が又どうも實にの意。○戸無瀬の瀧　大井川の上流で、龜山殿の附近。○とり集めたる　あれやこれやと悲しい情調が一つに集つたの意。○はかなし事　つひ一寸した御歌などの御贈答をいふ。○なれ聞え　なじみ申されの意。

帥の御子は、大多勝院の西の廂にわたらせ給ふ。御前の松の木に這ひかゝれる蔦の紅葉の、いたう染めこがしたるをとりて、九月三十日の夕つかた、昭訓門院の御方へ奉らせたまふ。

明日よりのしぐれも待たで染めてけり、袖の涙や蔦のもみぢ葉。

木の葉よりももろき御涙は、ましていとゞせきかね給へりし、御かへし、

四方はみな涙のいろにそめてけり、空にはぬれぬ秋のもみぢ葉。

あはれに見奉らせ給ひつゝ、名殘もいみじくながめられて、高欄におしかゝりたまへる夕ばえの御かたち、いとめでたし。ありつる紅葉を、西園寺ノ大納言公顯の宿直所へ遣はす。

雨と降るなみだの色やこれならむ、袖より外にそむるもみぢ葉。

女院の御兄なれば、しめやかなる御山住の心苦しさに、さぶらひたまふなりけり。御返事、

いくしほか涙の色のそめつらむ、今日をかぎりの秋のもみぢ葉。

【通解】帥の御子は、大多勝院の西の廂の間において遊ばされる。御前の松の木に這ひ掛つてゐる蔦の紅葉の、焦げたやうに眞赤に染つてゐるのを取つて、九月三十日の夕方に、昭訓門院（瑛子）の御方に差上げ遊ばされた。

明日よりの……＝明日から降る時雨も待たないで、蔦の紅葉はこのやうに眞赤に染りました、これはこの御歌を御覽になるにつけて、女院は木の葉よりももろく散る涙が、まして一入堰き止め兼ね遊ばした、その御返歌に、

四方はみな……＝空の時雨にはぬれぬ秋の紅葉も、私共の涙の色であたり一面皆眞赤に染つた事であ

ります。

昭訓門院は帥の御子の御歌をしみ〴〵感深く御覽になりながら、暮れ行く秋の名殘の空も非常に物悲しく、自然じつと見入られて、高欄におし掛つていらせられる夕映の中の御姿、實にお美しくいらせられる。帥の御子から奉られた彼の紅葉を、西園寺大納言公顯の宿直所へ遣はされる。それにつけての御歌、

雨と降る……＝雨のやうに降る涙の色はこれでありませう、袖より外に、これ斯うして紅葉も眞紅に染つて居ります。

公顯は女院の御兄上なので、しんみりとした淋しい御山住の御いたはしさに、斯うして伺候しておいでになるのでありました。公顯からの御返歌、

いくしほか……＝いよ〳〵今日が最後の秋の紅葉を、幾染めとなく涙の色が染めた事でせう、實にどうも眞赤な紅葉であります。

【語義】○大多勝院　龜山殿の中にあつて、おりゐる雲の卷に、「大多勝院と聞ゆるは、寢殿のつゞき、御持佛すゑ奉らせ給へり」と見えてゐる。○染めこがしたる　黑ずむ程に濃く色づいたのをいふ。○明日よりのしぐれも待たで　今日は九月三十日だから明日からは神無月で時雨の降る期節になるが、その明日からの時雨も待たずに染めたの意。○袖の涙や　「袖の涙や染めつらん」の略。○木の葉よりももろき御涙は　秋の木葉よりもなほもろく散る昭訓門院の御涙は。○ましていとゞせきかね給へりし　この御歌を見るにつけてなほさら一入はげしく流れたの意。「給へりし」はやゝゆとりを持つた連體法の趣。○空にはぬれぬ　空の時雨には濡れぬ。○あはれに見奉らせ給ひつゝ　昭訓門院は帥の御子の御歌をしみ〴〵感深く御覽になつて。○名殘も　暮れ行く秋の空の名殘も。「法皇の御名殘惜しさも一入悲しく」といふ解もあるが、それは表現に自然でないと思ふ。○いみじくながめられて　非常に見入られて。悲しさに自然じーッと見入るやうになつて。「られ」は自然の働きを現はす。○夕ばえの御かたち　夕映の中に高欄にもたれてじッと眺めておいでになる御姿の意。○雨と降る云々　袖ばかりか紅葉まで眞赤に染つた、この眞赤さ、これが雨のやうに降る我が涙の色なのだらうの意。○しめやかなる御山住の心苦しさに　女院がしめやかに御山住をなされるそれが御いとしさに、斯く宿直していらせられるのであつたの意。「心苦しさ」は氣の毒さ、おいたはしさの意。○いくしほか　幾染か。「しほ」は物を染める度數を數へる語。○今日をかぎりの　今日は九月三十日で、明日から十月即ち冬になるから、今日がいよ〳〵秋の最後の日である、その秋の最後の日の紅葉の斯くも眞赤なのは、幾染か血の涙の赤い色が染めた事だらうの意。

時雨はしたなく、風あらゝかに吹きて、暮れぬれば、宮、内に入り給ひて、御殿油近くめして、晝御覽じさしたる御經など讀み給ふほどに、若殿上人どもうち連れて、此方

の御宿直にまゐれり。畫の蔦の葉の散りぼひたるを、人々見るに、宮、「それにおの〳〵歌かきて」とのたまへば、中將爲藤朝臣、

もみぢ葉に泣く音はたえず、空蟬のからくれなゐも涙とや見む。

清忠朝臣、

山姫のなみだの色もこのごろはわきてやそむる、蔦のもみぢ葉。

光忠朝臣、

世の中の敷のいろを知らねばや、去年にかはらぬ蔦のもみぢ葉。

これらをとり集めて、北殿の内親王の御方へ奉らせ給へれば、

さすがなほいろは木の葉にのこりけり、形見もかなし秋の別路。

【通解】時雨が烈しく降り、風が荒々しく吹いて、日が暮れたので、帥の宮は、御殿の内に御入りになつて、御燈火を近く召寄せて、畫間御見掛けになつた御經などをお讀み遊ばす所へ、若い殿上人たちが連れ立つて、こちらの御宿直に參つた。畫間の蔦の葉の散らばつてゐるのを、人々が見ると、帥の宮は、「この蔦の葉に皆々歌を書いてごらん」と仰せになると、中將爲藤朝臣、

もみぢ葉に……‖法皇を偲び奉つて泣く聲は絶える間もありませんで、この紅葉の眞赤に染つたのを見ても、これが私共の涙の色かと思はれます。

清忠朝臣、

山姫の……‖山姫の涙の色も、この頃はわけて眞赤なものと見えまして、蔦の紅葉がいつもとは違つて一入眞赤に染つて居ります。

光忠朝臣、

世の中の……‖世の中は皆歎きに沈んで墨染の色になつて居るのに、それを知らぬからか、蔦の紅葉は、去年にかはらず眞赤に染つて居る事です。

これ等の歌を取集めて、北の御殿にゐる内親王(弁子)の方へ差上げ遊ばされると、内親王は、

さすがなほ……‖秋は暮れたが、さすがにやはりその秋の色は木の葉に殘つて居ります、その形見を見るにつけても秋の別れが誠に悲しい事です。

【語義】○はしたなく　烈しく。「意地惡く、相憎と」の義もあるが、こゝにはその氣持は無いやうだ。○御覽じさしたる　御見掛けになつた、御讀み掛けになつた。「さす」は仕掛けて中途で止める意。○此方の御宿直　帥宮の御宿直。○もみぢ葉に云々　「泣く音はたえずもみぢ葉に（ツケテモ、ソノ）からくれな

ゐも涙とや見む」といふ語位を倒置した表現。「泣く音」は蟬の縁語。「空蟬(蟬のぬけがら)の」は「から」の序。　○山姫のなみだの色　山の姫神が法皇の崩御を悲しんで泣く涙の色。○わきてやそむる　とりわけて特別眞赤にこの蔦の紅葉を染めたのであるかの意。○歎のいろ　墨染の衣をいふ。世間一體皆墨染の衣にやつれてゐる、それを知つたら紅葉は斯うは染まるまいに、それを知らぬので、去年と同じやうに、この蔦の紅葉は眞赤に染つた事であらうの意。○北殿　龜山殿の北の對、そこに内親王がいらせられるのである。○さすがなほ云々　秋は昨日を限りに暮れて了つたが、さすがにやはりその色は木の葉に殘つて、この通り蔦の葉が美しく紅葉してゐるの意。○形見もかなし秋の別路　かうした形見を見るにつけても秋の別れが悲しいの意。秋の形見の紅葉を見るにつけても過ぎし秋の日お別れ申上げた法皇の事が一入思出されて、悲しみに堪へぬといふ意を含めた趣の御歌である。

月日程なくうつりぬれば、院も宮々も、おの〳〵ちり〴〵にあかれ給ふほど、今少し物悲しさまさる御心のうちどもは盡きせねど、世のならひなれば、さのみしもはいかゞ。昭慶門院は、あまたの宮たちの御中に、勝れてかなしきものに思ひ聞えさせ給ひしかば、御處分なども、いとこちたし。大井河に向ひて、離れたる院のあるをぞ奉らせ給へれば、そこにおはしましし程に、川ばた殿の女院など、人は申し侍りし。かの所は、臨川寺とぞいふめる。都にも、土御門室町にありし院、いづれも、この頃は、寺になりて侍るめりとぞ。めでたくこそあはれなれ。

【通解】　月日が程なく移つて、御中陰も過ぎたので、女院も宮樣方も、めい〳〵散りぢりにお別れ遊ばす頃、更に又物悲しさの增す御心の内は限りない事であるが、世の習はしであるので、さうさういつ迄も籠つてもいられぬわけです。昭慶門院喜子は、澤山の宮達の御中でも、特にすぐれて故法皇が可憐なものにお思ひ申上げ遊ばされたので、御領の御配分なども、大層どうもどつさりです。大井河に向つて、都から離れた御所がある、それを差上げ遊ばされたので、昭慶門院はそこに住つていらせられたから、川端の女院などと、世の人は申しました。彼の所は、臨川寺といふ風です。都の中にも、土御門室町にあつた女院の御所が、何れも皆、この頃は、寺になつて居る樣子との事です。誠に結構な又物哀れな事です。

【語義】　○院も宮々も　院は女院、宮々はお子樣の宮方をいふ。○あかれ　別れ。○今少し　今迄よりも更に又少し。○盡きせねど　限りはないが、いつまでたつても盡きる事はないが。○世のならひなれば　中陰がすんだ以上、銘々自分の住居に分れ歸るのが世の常だから。○さのみしもはいかゞ　さういつまで

も留つて居る事は出來ない。「いかゞ」の下に「留りあへん」など補つて見よ。○勝れてかなしきものに云々

龜山院が特に可愛いものにお思ひ遊ばしたから。○御處分　御領の莊園などの御配分。○こちたし　澤山にある。○離れたる　都から離れて建ててあるの意。○院　龜山院御領の御所。○奉らせ給へれば　昭慶門院に差上げられたので。○臨川寺とぞいふめる　後に寺になつて臨川寺といふやうだの意。○土御門室町にありし院　これも昭慶門院の御所。○めでたくこそあはれなれ　御所の跡が寺になつてゐるのは誠に結構で而も又哀れな事だの意だらう。

第十五　うら千鳥

露霜かさなりて、程なく徳治二年にもなりぬ。遊義門院そこはかとなく御惱と聞えしかば、院のおぼしさわぐ事限りなし。よろづに御祈、祭祓とのゝしりしかど、かひなき御事にて、いとあさましくあへなし。院も、それゆゑ御ぐしおろして、ひたぶるに聖にぞならせ給ひぬる。その程、さまゞ〳〵のあはれ思ひやるべし。悲しき事ども多かりしかど、みなもらしつ。

【通解】　年月が過ぎて、程なく徳治二年にもなつた。遊義門院はどこがどうといふ事もなく御煩ひと申す事でしたので、後宇多院は限りなく御心配あらせられた。色々と御祈禱やら祭やらお祓やらと騒ぎ立てましたが、その甲斐もない御事で、誠に申上げやうもなくあへない次第です。後宇多院も、その御歎き故に剃髪遊ばされて、只もう一途に聖僧におなり遊ばされました。その間、いろ〳〵の哀れさ想像がつきませう。悲しい事が色々と澤山ありましたが、皆省いて申上げません。

【語義】○露霜かさなりて　月日が經つての意。○そこはかとなく　何といふ事もなく、どこがどうといふしつかりした御症狀もなく。○おぼしさわぐ　思ひ騷がれる、御心配になる。○かひなき御事にて　その甲斐もなく崩御になつての意。德治二年七月二十四日崩御。○あへなし　はかない。○ひたぶるに云云　一向專念に佛道に歸依して行ひすましていらせられるの意。○その程　遊義門院の崩御から、院の御出家と、色々悲しい出來事のあるその間の意。

かくて、八月の初めつかたより、内の上例ならずおはしますとて、さま〴〵の御修法、五壇、藥師、愛染、いろ〳〵の祕法ども、諸社の奉幣神馬、何かとのゝしり騷ぎつれど、むげにふかくにならせ給ひて、二十三日御氣色かはるとて、世のひゞきいはむ方なく、馬車走りちがひ、所もなきまで人々は參りこみたれど、いとかひなく、二十五日子の時ばかりにはてさせ給ひぬ。火の消えぬるさまにて、かきくれたる雲の上のけしき、いはずともおしはかられなむ。まことや、中宮は、德大寺の公孝の太政大臣の御女ぞかし。珍しく、かの御家にかゝる事のいたくなかりつるに、御おぼえもめでたく候ひたまへるに、あさましともいはん方なし。二十八日にまかで給ふ。

【通解】斯うして、八月の初の頃から、天子樣が御不例にいらせられるといふ事で、色々の御修法が行はれて、五壇の修法、藥師の修法、愛染の修法と、いろ〳〵の祕法があつて、諸社への奉幣、神馬の献納、何やかやと大さわぎをしたが、天皇は、全然もう人事不省の御狀態におなり遊ばして、二十三日には益々御危篤に陷らせられたといふ事で、世間のさわぎは言はうやうもなく、馬や車はあちらこちらと馳せ違ひ、もう居所もない程に人々は一杯に宮中に參候したが、更にその甲斐なく、二十五日の子の刻程に崩御遊ばされた。丸で火の消えたやうな有樣で、悲歎に暮れた宮中の樣子は、申さずとも推量が出來ませう。ほんにさういへば、中宮忻子は德大寺太政大臣公孝公の御息女でありますよ。彼の德大寺家には、斯うして中宮に上るといふ事はそんなになかつたのに、珍しくもこの姫君が中宮に上つて、而も御覺えもめでたくいらせられたのに、突然こんな事になつて、餘りの事ともなんとも申さうやうがありません。二十八日に中宮は宮中から御里方へ御退出遊ばされた。

【語義】○御修法　御病氣平癒の御祈禱の佛事。○五壇　五大明王を本尊とする修法。中壇に不動、東壇に降三世、西壇に大威德、南壇に軍荼利夜叉、北壇に金剛夜叉を祭る。○藥師　藥師如來を本尊とする

修法。○愛染　愛染明王を本尊とする修法。○諸社の奉幣神馬　御病氣平癒祈願のため、諸社に幣帛を奉り神馬を献ずること。○むげに　只もう一途に。○ふかく　不覺、御心地が亂れて、所謂人事不省の狀態になられること。○御氣色かはる　御樣子が變る、御危篤に陷らせられる。○所もなきまで　伺候する場所もない程一杯に。○子の時　夜中の十二時。○はてさせ給ひぬ　崩御あらせられた。御年二十四。○かきくれたる　かきくもりたる、悲しさに閉されたるの意。○珍しく云々　珍しく德大寺家には中宮に上る事が餘りなかつた——ありさうでなかつたといふのでなく、德大寺家にはこれまで餘りさういふ事がなかつたのに珍しく今度上つてといふ趣の措辭。○いたく　そんなに、餘りの意。

先帝の御わざのさたあり。院號ありて、後二條院とぞ聞ゆる。堀川右大將具守御車寄せらる。心のうちいかばかりかおはしけむ。大將になり給へるも、この御門の、西華門院むつまじうも仕う奉り給へるに、いとほしき御事なり。御素服を着給はざりしをぞ、思はずなる事に、世の人もいひさたしける。內侍のかむの君も、さまかはり給ふ。中宮も院號ありて、長樂門院と聞ゆ。よろづ哀なる事のみ、書き盡しがたし。

【通解】　先帝の御葬送の取定めがある。院號があつて、後二條院と申上げる。堀川右大將具守が御棺を載せ奉る御車をさし寄せられた。その御心の中はどんなにいらせられたらう。この具守が大將におなり遊ばしたのも、この帝が、御生母の西華門院へ誠に睦じく御仕へ遊ばされた結果、門院の御父としてさういふ事になられたのであるのに、誠にいたはしい御事です。だから具守が御喪服を御着けにならなかつた事を、誠に意外の事として、世間の人もとやかく申したのでした。內侍の督の君(項子)も、御剃髮遊ばされた。中宮も院號があつて、長樂門院と申上げる。何かと哀な事ばかりで、仲々書ききれません。

【語義】　○御わざのさた　御葬送の儀、「さた」は取極めの思想。○心のうち　具守の心の中。具守は帝の外祖父に當るから、その心中はさこそ悲しかつたらうといふ意。○大將になり給へるも云々　この文意は通解に述べた通りであるが、餘り省略に過ぎる、少くも「仕う奉り給へるに」の所は「仕う奉り給へる故なるに」などありたいが、これは誤寫でなくて寧ろ原文そのもののルースさであらうと思ふ。○いとほしき御事なり　帝の崩御が具守に對して御氣の毒な事だの意。○思はずなる事に　思ひに反する事として、意外の事として。○いひさたしける　彼是いうた。非難したといふ思想の表現。○さまかはり給ふ　御姿がお變りになつた、剃髮し給うたのをいふ。○事のみ　「事のみにて」の意。○書き盡し難し　「いひつくし難し」などあるべきを、尼の話といふ意識を忘れてのルースな表現。

「夢のうちの……堪へがたげなり」やゝ良問題

春宮は正親町殿へ行啓なりて、劍璽わたさる。八月二十五日踐祚なり。十二にぞならせ給ふ。夢のうちの心地しつゝも、程なく過ぎうつる御日數さへはてぬれば、盡せぬあはれさむる世なけれど、人々もおのがちり〴〵になる程、今一しほ堪へがたげなり。持明院殿には、いつしかめでたき事どものみぞ聞ゆる。大覺寺殿には、遊義門院の御事にうちそへて、御涙のひる世なくおぼさるべし。帥のみこの御事を、あづまへ宣ひ遣した る、相違なしとて、九月十九日立太子の節會ありて、坊に居給ひぬ。今は世をとぢむる心地しつる人々、少し慰みぬべし。

【通解】　春宮（花園帝）は正親町殿へ行啓になつて、そこへ神器がお渡りになる。八月二十五日が御踐祚です。十二におなり遊ばされる。丸で夢のやうな心持がしいしい、程なく月日は過ぎ移つて、四十九日の御日數も終つて了つたので、限りなき哀愁のさめる時はないが、人々も銘々散り〴〵に別れ去る頃、今一段と悲しみに堪へがたい有樣です。持明院殿（伏見院）の方では、いつとなく誠に結構なことばかりおありなされる。大覺寺殿（後宇多院）の方では、遊義門院崩御の御事にかはつて加へて、又後二條帝の崩御で、御涙の乾く時もないやうに思召される事でせう。春宮には帥の御子（後醍醐帝）をとの御事を、關東へ仰せ遣はされた所が、御定の通り異存がないといふ事で、九月十九日に立太子の節會があつて、帥の御子が春宮にお定りになつた。今はもう世がおしまひになるやうな心持のしてゐた大覺寺系の人々も、これで少しは心の慰む事でありませう。

【語義】　○心地しつゝも　「心地しつゝ」の意で、「も」は感興の趣の助詞。「心地がしながらも而も」の趣ではない。○程なく過ぎうつる　「程なく過ぎうつりて」の副詞を「御日數」の形容詞のやうに變へた表現。○日數　中陰卽ち七七四十九日の日數。○さむる世　さめる時、なくなる時の意。○人々もおのがちりぢりになる程　中陰が終つて、後の營みのために參集してゐた人々が退散するその頃。○いつしかめでたき事ども　その系統たる花園帝が踐祚ありて、御卽位、大嘗會と、色々めでたい事が續くのをいふ。「いつしか」は「いつとなく」の意で、つひうか〳〵と浮れ心地の中にそのやうな目出度い事が續くといふ思想。○うちそへて　後二條帝崩御の事を打添へての意。○帥のみこの御事を　帥の宮を春宮に立てたいとの御事を。○相違なしとて　御下問の通り從ひますとの事での意。○今は世をとぢむる心地しつる人々　後二條帝の崩御でもはや世がおしまひになるやうな心持のしてゐた人々。

院のうへ、さばかり和歌の道に御名たかく、いみじくおはしませば、いかばかりかと思

されしかども、正應に、撰者どものことゆゑに煩どもありて、撰集も無かりしかば、いとゞ口をしう思されて、

わが世には集めぬ和歌のうら千鳥、空しき名をやあとに殘さむ。

など詠ませおはしましたりしを、今だにと急ぎたゝせたまひて、爲兼の大納言うけたまはりて、萬葉よりこなたの歌ども集められき。正和元年三月二十八日奏せらる。玉葉集とぞいふなる。

【通解】伏見院は、あんなに歌道に御名が高く、非常にその道に勝れていらせられたから、どんなにか立派な撰集をとお思ひ遊ばされたのであつたが、正應年間に、撰者たちに關していろ〳〵と面倒な事故があつて、勅撰集もなかつたので、一入殘念に思召されて、

わが世には……＝我が治世に勅撰集の事もなくて、只徒らなる歌好みの名を後世に殘す事であらうか。

など詠ませられたのであつたが、たとひ後れた今日でなりともと急ぎ勅撰集の事を思ひ立ち遊ばされて、爲兼の大納言が命を拜して、萬葉集からこの方の歌を色々と集められました。正和元年三月二十八日に集が成つて奏上せられた。玉葉集といふのであります。

【語義】○さばかり　あれほど。○いみじく　御歌が非常に御上手で。○いかばかりかと　如何ばかり立派な勅撰集を作らんとの意。○撰者どもの云々　撰者の一人爲兼は、謀叛の疑を受けて佐渡に流され、帝も御讓位あつて、撰集の事が沙汰やみになつたのをいふ。「ことゆゑ」は事故の義。○いとゞ口をしう思されて　御歌が優れていらせられて、特に優れた撰集をとの思召だつたのに、こんな事で沙汰止みになつたから一入殘念に思召されての意。○わが世には云々　我が治世には勅撰集はないとの意、和歌の道を「和歌の浦」に掛け、その緣で「千鳥」を出した言葉の綾。○空しき名をやあとに殘さむ　只歌がすきであつたとの空名を後世に殘すのみだらうの意。「あと」は千鳥の緣語。「何も爲す事がなかつたとの譏を後世に殘す」といふ解は當らぬ。

この爲兼の大納言は、爲氏の大納言の弟に爲教右兵衛督といひしが子なり。かぎりなき院の御おぼえの人にて、かく撰者にもさだまりにけり。そねむ人々多かりしかど、さはらむやは。この院のうへ、好みよませ給ふ御歌のすがたは、前藤大納言爲世の心地にはなつ變りてなむありける。御手もいとめでたく、昔の行成大納言にもまさり給へるなど、時の人申しけり。やさしうも强うも、書かせおはしましけるとかや。

【週解】　この爲兼大納言の弟で爲敎右兵衞督といふた者の子です。非常な院の御寵愛の人で、斯く勅撰集の撰者にも定まつたのでした。それを嫉む人々も多くありましたが、そんな事は何の障りもありません。この伏見院樣が、好んでお詠み遊ばす御歌の姿は、前藤大納言爲世の詠歌の趣とは變つて居りました。御手も大層御見事で、昔の行成大納言にも優つていらせられるなど、當時の人々は申した事でした。やさしい草書も强い眞書も、何れも見事にお書き遊ばしたとか申す事です。

【語義】　○爲兼の大納言　次の系圖の通り。

爲家―┬―爲氏―爲世
　　└―爲敎―爲兼
　　└―爲相

○御おぼえの人　御寵愛の深い人。○そねむ人々　冷泉家の一流たる爲世卿などを指すのであらう。爲家の後の三家は互に歌道で激しく軋轢してゐた。○さはらむやは　そんな事に何の支障のあらう筈もなく、無事に勅撰集の業を完成したといふ思想。○御歌のすがた　和歌の御作風。○爲世の心地には云々　爲世は冷泉流で舊套穩健であつたが、爲兼は毘沙門堂流というて奇拔の風を悅んだ。伏見院もその流だつたのであらう。○行成大納言　世尊寺流の祖で有名な能書家。○やさしうも强うも　草書も楷書もの意で、その中に假名も漢字もの意も含まれてゐよう。

正和も二とせになりぬ。今年御本意遂げなむと思さる。九月の暮つかた、賀茂に忍びて御籠の程、をかしきさまの事ども侍りけり。近く候ふ女房どもも、うちしほたれつゝ、

つどもりがたの空のけしき、いとものあはれなるに、御製、

ながつきや木の葉もいまだつれなきに、しぐれぬ袖の色や變らむ。

また、

わが身こそあらずなるとも、秋の暮をしむ心はいつもかはらじ。

人々も、さと時雨わたり、袖の上、今日をかぎりの秋の名殘よりも忍びがたし。大納言爲子、

ひとすぢに暮れゆく秋を惜まばや、あらぬ名殘を思ひそへずて。

又誰にか、

いかにしたひいかに惜まむ、年々の秋にはまさる秋のなごりを。

十月十五日、伏見殿へ御幸あり。かぎりの旅と思せば、えもいはず引きつくろはる。庇

の御車なり。上達部殿上人數しらず仕うまつり給ふ。

【通解】　正和も二年になつた。今月伏見院は出家の御本望を遂げようと思召される。九月の末の頃、賀茂へこつそりと御參籠の間、面白く風流な趣の事が色々御座いました。御側近く侍して居る女房達も、涙に沈んでゐて、三十日頃の空の樣子が、誠に物悲しく哀れであるにつけて、伏見院御製

なが月や……＝秋九月、木の葉もまだ紅葉の色が變らず、枝を離れもせずにゐるのに、時雨にも掛らぬ我が袖は、在俗の名殘を惜む涙のために色が變る事であらうか。

又、

わが身こそ……＝我が身こそ、出家の本意を遂げて、昔の身ではなくなるとも、暮れ行く秋を惜む心はいつも變らないであらう。

この御製を拜して、人々もさつと皆涙を流して、その悲しさは、今日が最後の秋の名殘よりも更に一層こらへ難く、一入袖の濡れる事だ。大納言爲子、

ひとすぢに……＝こんななさけない、君の御出家の御名殘などは思ひ添へないで、只々一筋に暮れて行く秋の名殘を惜みたいものです。

又誰でしたか、

いかにしたひ……＝年々の秋にはまさるこの秋の名殘――君の御出家の名殘まで加へて、ほんとに悲しい今年の秋の名殘を、どう慕ひどう惜しみませうか、いくら惜んでも惜んでも惜みきれぬお名殘であります。

十月十五日、伏見殿へ御幸がありました。これが最後の御幸と思召すので、何ともいへず美々しく裝ひ立ててていらせられる。網代庇の御車です。上達部や殿上人が、數しらず供奉を申上げ遊ばされる。

【語義】　○御本意　兼て出家したい御考へであつたその御本望。○賀茂に忍びて御籠　出家の本意を遂げられんとするについての御祈願のため賀茂神社に參籠せられたのであらう。○をかしきさまの事ども　次に掲ぐるが如き和歌の贈答など色々風流の事があつた。○うちしほたれつゝ　院の御出家あるべき事を歎いて、涙にくれてゐる。この「つゝ」は二つの事柄に渉る場合の用例で、「そして又」の趣を現はす。○つれなき　情こはく平氣でゐる。下の句の「色や變らむ」に呼應して、色も變らずゐるの意を現はす。○しぐれぬ袖の色や變らむ　時雨はまだ降らず、從つて時雨に濡れぬ袖が、自分の涙のために色が變る事であらうの意。○あらずなるとも　もとのまゝでなくなるとも、あらぬ姿となるとも、出家して了ふとものの意。○さと時雨わたり云々　涙の雨がさッと一體に降り掛つて袖の上の悲しみは、今日限りの秋の別れの悲しさよりも更に堪へ難いの意。○大納言爲子　爲兼の妹であらうといふ。○ひとすぢに云々　只一筋に

暮れ行く秋を惜みたいものだ。こんなとんでもない御名殘――君御出家の御名殘まで思ひ添へては、ほんとに身も世もない悲しさで堪へられませんといふ思想。諸註殆ど「今更詮ない御出家の御名殘を惜むは却て後世の御妨である、左樣の事は思はないで、唯一筋に暮れゆく秋の名殘を惜しまう」の意といふに一致してゐるが、それでは「ばや……ずて」と呼應させて、事實の然らざる事を切望した原歌の情趣が全然破られて了ふと思ふ。○誰にか　參籠の女房の一人だらう。○かぎりの旅　御在俗としての最後の行幸。○引きつくろはる　裝ひ飾られる。○庇の御車　網代庇の御車をいふ。

世の政事(まつりごと)なども、新院にゆづり奉らせ給ひにしかば、御心しづかにのみ思(おぼ)されて、伏見殿がちにのみぞおはしましし程に、そこはかとなく、御惱(おんなやみ)月日經(へ)て、文保(ぶんぽう)元年九月三日、かくれさせ給ひにき。伏見院と申しき。

【通解】　世の政事なども、後伏見院に御讓り申上げ遊ばされたので、いつも御心靜かに思召されて、伏見殿の方に引籠り勝ちでいらせられる内に、どことといふ事なく、御不例が長い間續いて、文保三年九月三日に、おかくれ遊ばされました。伏見院と申しました。

【語義】　○世の政事云々　院政を後伏見院に讓らせられたのである。○御心しづかにのみ思されて　いつも御心が落着いて、靜かな御心持での意。○そこはかとなく　どこがどうといふ事なく。

「法皇」以下やゝむづかしいが良問題

第十六　秋のみ山

文保二年二月二十六日、御門おりゐさせ給ふ。春宮は、既に三十にみたせ給へば、待遠なりつるに、めでたく思さるべし。法皇都に出でさせ給ひて、世の中しろしめさる。龜山殿はさる事にて、近頃は、大覺寺のほとりに御堂たてて、籠りおはしましつゝ、いよいよ密教の深き心ばへをのみ勤め學ばせ給へば、おのづからも京に出でさせ給ふ事なく、又參りかよふ人も稀なるやうにて、神さびたりつるを、引きかへ、事しげき世に、行もけだいし給へば、むづかしく思さる。

【通解】文保二年二月二十六日に、花園帝は御退位遊ばされる。春宮（後醍醐）は、もはや滿三十におなり遊ばすので、御即位が待遠でありましたのに、いよ〳〵御受禪で、結構な事に思召す事でせう。後字多法皇は都にお出になつて、院政をお取り遊ばされる。法皇は、龜山殿にいらせられるのは勿論の事、近頃は、大覺寺の邊に御堂を建てて、その御堂に籠つていらしつて益々眞言宗の深遠の教理をのみ勤め學んでいらせられるので、自然たまさかにも都へ御出になられる事なく、又都から通つて參る人も稀なやうな風で、神々しく靜かであつたのに、今度は打つて變つて、政務繁多な世のために、自然勤行も怠り遊ばされるので、煩はしく厭はしい事にお思ひ遊ばされる。

【語義】○既に三十に　皇胤紹運錄に、「後醍醐天皇、文保二年二月二十六日受禪、三十一」とある。「みたせ給へば」は滿ち給へばの意。○都に出でさせ給ひて　後醍醐帝の御受禪について、嵯峨から再び都へ出て院中に政をきこしめされたのである。○龜山殿はさる事にて　龜山殿は仙洞御所であるから、そこに法皇の御座あるは勿論の事での意。○大覺寺　嵯峨村に在り、もと嵯峨天皇の離宮であつたのを寺とし、その後荒廢してゐたのを後字多法皇が再興せられたのである。○心ばへ　趣、精神。○おのづからも　自然稀々にもの意。○神さびたりつるを　神々しく物寂しくあつたのにの意。○引きかへ　今迄とは打つて變つて、○事しげき世に　煩雜な政務をお取りになるためにの意。○行　佛道の修行。○けだい　懈怠、怠り勝ちになる。

三月二十九日御即位なり。行幸の當日に、左大將內經、花山院右大將家定、行列を爭ひて、隨身どもわゝしくのゝしれば、御輿をおさへて、職事奏し下しなどすめり。左大將の御父君は、內實のおとゞと聞えし、嘉元の頃、俄にかくれたまひにしかば、ぜうろくも

しあへ給はざりしにより、今はたゞ人にてこそいますべければとて、かく爭ふとぞ聞えし。

【通解】　三月二十九日御即位です。太政官廳へ行幸の當日に、左大將內經と、花山院右大將家定とが、行列の順序を爭つて、隨身達ががや〳〵と騷ぎ立てたので、新帝の召された御輿を抑へ止めて、藏人がその事を奏上して御裁可を仰ぎなどする風です。左大將內經の御父君は、內實の大臣と申しましたが、嘉元の頃に、急におかくれになつたので、攝政關白になれなかつたために、今では內經は只の公卿でいらせられる筈だといふので、斯く爭ふのだといふ事でした。

【語義】　○內經家定　この二人は共に權大納言で、家定が上首だが、近衞の大將としては內經の方が上席であるため、互に班次を爭ふ。○わゝしく　やかましく。○職事　藏人の稱。○奏し下し　奏上して裁可を仰ぐ。○ぜうろく　攝籙、攝政關白をいふ。○しあへ給はざりし　する暇がなかつたの意。○今はただ人にて云々　一條內經は家柄としては攝關家の人であるが、父がそれになりずになくなつたから、今は只の公卿である筈の意、「こそいますべけれ」の表現から見て、位次を爭つた家定の胸中を敍した文句と考へられる。

十月二十七日大嘗會、清暑堂の御神樂の拍子のために、綾小路の宰相有時といふ人、大內へ參り侍るとて、車よりおるゝ程に、いとすくよかなる田舍侍めくもの、太刀を拔きて走り寄るまゝに、あやなくうちてけり。さばかり立ちこみたる人の中にて、いと珍らかにあさまし。さて拍子俄にこと人承る。大事どもはてて後、尋ね沙汰ある程に、かい川の三位顯香といふ人の、この拍子をいどみて、我こそつとむべけれと思ひければ、かかる事をせさせけり。道にすける程はやさしけれども、いとむくつけし。さてかの三位は流されぬ。

【通解】　十月二十七日は大嘗會で、清暑堂の御神樂の拍子の役をするために、綾小路の宰相有時といふ人が、禁中へ參內するというて、車から降りる時に、ひどく無骨で逞しい田舍侍風の者が、太刀を拔いてそばへ走り寄るなり、理不盡に討つて了つた。さしもに人の立て込んだ中で、こんな事が起るとは、實に珍しく驚き入つた次第です。そこで拍子の役は急に他の者が承りました。大嘗會の儀がすんで後、色々と尋問吟味があるうちに、これは紙屋川の三位顯香といふ人が、この拍子の役を競爭して、當然自分が勸め

るべきものだと思つたので、こんな事をさせたといふ事實が判明しました。藝道に嗜深く熱心であつた心根は感心であるが、こんな事までするとは、誠に恐ろしい事です。そこでかの三位顯香は流罪にされました。

【語義】　○清暑堂の御神樂　大嘗會巳の日の節會の後に行はれる儀。清暑堂は八省院十二堂の一で、後世大極殿が荒廢し、官廳で行はれる時は渡廊をそれに當てたが、やはり清暑堂の御神樂と稱したのである。○すくよかなる　屈强な、無骨な、逞しい。○走り寄るまゝに　走り寄るや否や、走り寄るなりいきなり。○あやなく　何等の條理もなく、理不盡に。○こと人　他の人、別の人。○尋ね沙汰ある程に　犯人を尋問し、原因を色々と取調べてゐる内にの意。「かゝる事をせさせけり」に掛る副詞句で、思想的には甚だ不備な表現。○我こそつとむべけれと云々　拍子の役は必ず自分が勤めるべきものと思つたのに、意外にも有時の方へ廻つたので、田舍侍を語らつてこんな事をしたのだの意。○すける程　深くすいてゐる、熱心である事。○やさしけれども　やさしくて感ずべきだがの意。○むくつけし　恐ろしく憎むべきだの意。

かくて今年は暮れぬ。まことや、こたみの春宮には、後二條院の一の御子定まり給ひぬれば、御門坊にておはしましし時のまゝに、冷泉萬里小路殿の寢殿にうつり住ませ給へるに、二月の頃、軒の櫻さかりにをかしき夕ばえを御覽じて、內に奉らせ給ふ。かの花につけて、

なれにける花はこゝろやうつすらむ、同じ軒端の春に逢へども。

御かへしは、南殿の櫻にさしかへ給ふ。

花はげに思ひ出づらむ、春をへてあかぬ色香にそめしこゝろを。

【通解】　斯うして今年は暮れました。ほんとにさういへば、今度の春宮には、後二條院の第一皇子邦良親王がお定まり遊ばしたので、後醍醐帝が皇太子でいらせられた時の通りにして、邦良親王も冷泉萬里小路殿の正殿に移つて住んでいらしつた所が、二月頃、軒端の櫻の眞盛に咲いた所へ、夕日の面白く映じてゐるのを御覽になつて、次の歌を天子樣に奉らせられた。その歌は彼の軒端の櫻の花につけて、

なれにける……‖同じ軒端の春に逢つて、私も今斯うしてこの花を眺めて居りますが、永年お馴れ申した花は、さぞ陛下の方へ心を移してゐる事でありませう。

天皇からの御返歌は、紫宸殿の櫻におさしかへ遊ばされる。

花はげに……‖ほんとに花は、私が幾春も幾春も、見ても〳〵飽かぬ色香に深く染めた心を、さぞま

やゝむづかしいが面白い問題　東京高校

ア思ひ出してゐる事でありませう。

【語義】○こたみ　この度。○二月の頃　史實に徴すると文保二年三月九日立太子、御年十九、依つて「二月」は「三月」の誤だらうといふ。○なれにける云々　歌の表面の意は、「君が春宮としていらせられたこの冷泉萬里小路殿の軒端の櫻は、今も同じく春に逢つて美しく咲いてゐるが、長年君に馴れ奉つた事として花は心を君に移してゐる事だらう」といふのであつて、「春に逢へども」の主語は「花」であるが、裏の眞意は、「私も春宮として君と同じくこの花を眺めてゐるが、然し花はより以上君を慕つてゐるでせう」といふのである。○南殿の櫻にさしかへ給ふ　紫宸殿の櫻、即ち左近の櫻にかへて、それにつけて次の歌を返されたの意。○げに思ひ出づらむ　なるほど仰の如く如何にも思ひ出してゐませうの意。○春をへて云々　長い間春宮としてゐて、幾春もそのよき色香を深くめでた我が心をの意。

おりゐの御門は、御兄の本院と、ひとつ持明院殿にすませ給ふ。もとより御子のよしにておはしませば、まいて一つ院の内にて、いさゝかもへだてなく聞えさせ給ふ。いと思ふやうなる御ありさまなり。さるべき御中といへども、昔も今も、御腹など變りぬるは、いかにぞや、そば〳〵しき事もうちまじり、くせある習ひにこそあるを、この院の御あはひ、まめやかにおもほしかはしたる、いとありがたうめでたし。

【通解】御退位の花園帝は、御兄上の後伏見院と、同じ持明院殿に住まつていらせられる。固より花園院は後伏見院の御子樣といふ事になつていらせられるので、まして同じ院の内の御住居で、少しも隔てなく、非常に仲よく暮していらせられる。誠に結構な御有樣です。然るべき御兄弟仲であつても、昔も今も、御腹などの違つてゐるのは、どういふものか、往々にして角の立つやうな事も加つて、圓く行かぬものであるのに、この兩院の御仲が、ほんとに心から思ひ合つていらせられるのは、誠に得難くお美しい事です。

【語義】○御子のよしにて　花園院は後伏見の猶子でいらせられる。○まいて一つ院の内にて　更に一歩を進めた趣の挿入句。端的にいへば、「御猶子だし、まして同一院内の御住居であるから」の意だが、さういふ表現よりも迂曲の趣がある。○思ふやうなる　斯うありたいと思ふ風の、望ましい、理想的なの意。○さるべき御事といへども　固より腔しくあつて然るべき御兄弟の仲でもの意。「いへども」「ぬるは」は一般事相を特に强めた趣の表現。○そば〳〵しき　角々しい、親しく圓滿でない。○くせある習ひ　ずらりと圓く治つて行かぬ習はし。「非難すべき事なども起る」といふ解は語義に副はぬ。○まめやかに　眞實に心から。○ありがたう　得難く、珍しく。

本院は、廣義門院の御腹の一の御子を、この度の坊にやと思されしかど、ひき過ぎぬれば、いと遙けかるべき世にこそと、さうゞしく思さるべし。御歌合のついでなりしに

や、

いろ〳〵に都は春のときにあへど、わが住む山は花もひらけず。

大覺寺殿には、ひきかへ、馬車の立ちこみたるを御覽じて、法皇よませ給ひける、

われすめばさびしくもなし、山里もあさまつりごと怠らずして。

【通解】　後伏見院は、廣義門院寧子の御腹の第一の御子様を、今度の皇太子に立てて貰へるのだらうかと思召されたところが、邦良親王にさし越えられて了つたので、その實現は、前途いとも遙かなるべき世の中だと、物足らず淋しく思召す事でせう。御歌合のついででありましたか、

いろ〳〵に……＝色々と都は春の時に遭つて賑やかな事だが、わが住む山は花も開けず、誠に淋しい事だ。

大覺寺殿には、それとはあべこべに、馬や車の立て込んでゐるのを御覽になつて、後宇多法皇の御よみ遊ばした御歌、

われすめば……＝山里ながらも、斯うして朕が住んでゐるので、政務怠りなく群臣が參集して來て、少しも淋しい事はない。

【語義】　○一の御子　後に光厳院とならせ給ふ御方。○ひき過ぎぬれば　類例の見當らぬ語だが、恐らく「ひきたがへぬれば」と「ひきこえぬれば」とを一緒にして、豫想に反して邦良親王が先を越して了つたのでの意を現はしたものであらう。○いと遙けかるべき世　その御子の立太子は今の太子が即位の後の事で、前途頗る遼遠だの意。○いろ〳〵に云々　都の大覺寺殿方はめでたい事づくめだが、我が持明院殿は實に寂しいとの御意。○大覺寺殿には云々　後宇多法皇は都から屢々大覺寺殿へも御歸りになつてそこで政務をきこしめしたのである。

御門の御母女院、十一月うせ給ひにしかば、内のうへ御服奉る。天下ひとつに染めわたして、葦簾垂とか、いとまが〳〵しきものども懸け渡したるも、哀にいみじくぞ見ゆる。五節もとまりぬ。若き人々など、さうゞしく思へり。

【通解】　後醍醐帝の御母談天門院は、十一月におかくれ遊ばしたので、天子様は御喪服をお召しになる。

天下皆一樣にずうーッと墨染になつて、菫簾垂とかいうて、試に忌はしいものを懸け渡してあるのも、如何にも哀に物悲しく見えます。五節の舞も中止になつた。若い人々などは、物淋しい事に思つた。

【語義】　○十一月うせ給ひ　元應元年十一月十五日、御年五十二で崩御。○ひとつに染めわたして　皆一體に喪服の墨染姿になつての意。○菫簾垂云々　諒闇中の御所のさまをいふ。菫簾垂は伊豫簾の類で、菫で編んだもの。○まが〳〵しきもの　不吉らしく忌はしいもの。○いみじく　甚だ物悲しくの意。○さうざうしく思へり　物足らぬ寂しさを感じたといふ意。

當代もまた、敷島の道をもてなさせ給へば、いつしかと勅撰の事仰せらる。前藤大納言爲世承る。玉葉のねたかりしふしも、今ぞ胸あきぬらむかし。この大納言の女、權大納言の君とて、坊の御時、かぎりなく思されたりし御腹に、一の御子、女三の御子、法親王など、あまたものし給ふ。かの大納言の君は、早うかくれにしかば、この頃三位おくらせ給ふ。贈從三位爲子とて、集にもやさしき歌多く侍るべし。

【通解】　今上後醍醐帝も亦、和歌の道を御嗜み遊ばすので、いつとなく勅撰の事を仰せ出された。前藤大納言爲世が撰者を仰せ付かつた。玉葉集の時爲兼が撰者になつて口惜しかつた事も、今こそ胸がすいた事でありませうヨ。この大納言の女で、權大納言の君というて、帝がまだ皇太子の御時に、限りなく御寵愛になつた方の御腹に、第一皇子、第三皇女、法親王など、澤山御子樣がいらせられます。彼の大納言の君は早く亡くなつたので、この頃三位をお贈り遊ばされた。贈從三位爲子というて、勅撰集にも優雅な歌が澤山御座いませう。

【語義】　○もてなさせ　たしなみ給ふの意。○玉葉のねたかりしふしも　玉葉集は大納言爲兼の撰で、爲世卿は預らなかつたので、それを嫉ましく思つてゐたが、その事もの意。○今ぞ胸あきぬらむかし　今度撰者を仰せ付かつた事で、心が晴々したであらうの意。○坊の御時　後醍醐天皇がまだ春宮でいらせられた御時。○一の御子　尊良親王。○女三の御子　瓊子内親王。○法親王　妙法院尊澄法親王、後に還俗して宗良親王と改め給ふ。○集　勅撰集續千載集以下に澤山載つてゐる。

さて大納言は、人々に歌すゝめて、玉津島の社に詣でられけり。大臣上達部より始めて、歌よむと思へるかぎり、この大納言の風を傳へたるは、漏るゝもなし。子ども孫どもなど、勢ことにひゞきてくだる。まづ住吉へ詣で、逍遙しつゝのゝしりて、九月に

ぞ玉津島へまうでける。歌どもの中に、大納言爲世、

今ぞしる、昔にかへるわが道のまことを神もまもりけるとは。

かくて元應二年四月十九日、勅撰は奏せられけり。續千載といふなり。新後撰集とおなじ撰者の事なれば、多くはかの集にかはらざるべし。爲藤の中納言、父よりはすこし思ふ所加へたる主にて、今少し、この度は、心にくきさまなりなどぞ、時の人々沙汰しける。

【通解】　さて大納言爲世は、人々に歌を勸進して、その奉納のために玉津島の社へ參詣せられた。大臣上達部を始めとして、凡そ自ら歌よみと思つてゐる程の人、この爲世大納言の歌風を傳へた者は、一人としてこの勸進に漏れる者はない。そして子供たちや孫たちなど、大層な勢で賑かに下つた。まづ住吉に參詣し、諸處を悠々と大さわぎで遊び廻つて、九月に玉津島の社へ參詣したのでした。その時詠んだ歌の中に、大納言爲世、

今ぞしる……＝今まで庶流異端のために曲げられてゐた和歌の道が、今度の自分の撰集に依つて、再び正道に立歸る事が出來た、これに依つて、古正に歸る道の誠を神も守護してゐて下さつた事を、今まざまざと知りました。

かくて元應二年四月十九日に、その勅撰集は奏上せられた。續千載といふのです。新後撰集と同じ撰者の事であるから、多くは今度の續千載集も、彼の新後撰集に變りがないのでありませう。尤も爲世大納言の子、爲藤中納言は、父よりは少し深い思慮を持つた方で、その方が父を助けてやつたから、今少し、今度の續千載集は、奥ゆかしい趣であるなど、當時の人々は取沙汰したのでした。

【語義】　○歌すゝめて　玉津島神社へ奉納の歌を勸進したといふのであらう。○玉津島の社　紀伊國に在り、祭神は衣通姫で、住吉、人丸と共に和歌三神の一である。○歌よむと思へるかぎり　歌詠みを以て自ら任じてゐる人々は皆の意。○風　歌の風。當時歌道の門閥は次のやうに分れてゐた。

俊成―定家―爲家―┬爲氏―爲世―爲藤
　　　　　　　　　┼爲教―爲兼
　　　　　　　　　└爲相

爲氏系を御子左、後に二條家、爲教系を毘沙門堂又は京極、爲相系を冷泉家と稱した。○ひゞきて　賑かに騷ぎ立てて。○逍遙しつゝ　悠々と遊び廻る意。○昔にかへる　爲兼を以て庶流異端とし、從つて爲兼の撰した玉葉集を以て和歌の道を邪曲に導くものとし、そして自分の今度の撰集を以て、俊成定家の古正に戻すものと自任して、斯ういふ歌を詠じたのである。爲兼は新しい風を喜んで、舊套派からは異端視さ

れてゐたのである。○新後撰集　伏見帝の時、後宇多上皇の院宣に依つて爲世が撰集したもの。○爲藤　爲世の子。この人が連署衆の一人として續千載の撰を助けたのである。○思ふ所加へたる主　思慮識見の勝れた人の意。○沙汰しける　評判した、評し合つたの意。

院にも内にも、朝政のひま〳〵には、御歌合のみしげう聞えし中に、元亨元年八月十五夜かとよ、常よりことに月おもしろかりしに、上萩の戸に出でさせ給ひて、ことなる御遊などもあらまほしげなる夜なれど、春日の御榊、うつし殿におはします頃にて、絲竹のしらべはをり悪しければ、例の只内々御歌合あるべしとて、侍從の中納言爲藤召されて、俄に題奉る。殿上に候ふかぎり、左右同じ程の歌よみを擇らせ給ふ。

【通解】　後宇多院にも後醍醐帝にも、御政務のひま〳〵には、御歌合ばかり繁々とありましたが、その中に、元亨元年八月十五夜の事でしたか、ふだんよりも殊に月の面白かつた夜に、後醍醐帝は萩の戸に御出ましになつて、格別盛大な管絃の御遊などもありたいやうな夜であるが、當時、春日神社の御榊が、假殿にいらせられる頃で、管絃の樂は時節が宜しくないので、例の通り只内々に御歌合を催さうとの事で、侍從の中納言爲藤がお召を蒙つて、俄に歌の題を奉る。殿上に侍してゐるだけの者で、左右同じ人數の歌よみを御擇み遊ばされる。

【語義】　○朝政　御政事。○萩の戸　清涼殿夜の大殿の北にあつて、二間に一間、一に菊の戸ともいふ。庭には萩に限らず色々の秋草が栽ゑられてあつた趣に、禁祕抄に見えてゐる。○ことなる御遊　特別に盛な管絃の御遊。○春日の御榊　春日大明神の神靈の宿り給ふ御榊、これを春日神木といふ、春日社の神人や興福寺の僧徒などが訴訟の時、之を奉じて都に入り或は禁闕を犯し奉る、之を神木入洛というて、その時朝廷では、この神木の假殿に遷座の間、節會などを廢し、謹慎せられるのである。○うつし殿　假殿、神木を移して安置する假屋。○絲竹のしらべは云々　春日神木の遷座中だから、管絃の御遊は御遠慮遊ばしたのである。○召されて　下に「題奉る」とあるから「召されて」は受身の形と見た方が自然だらう。「爲藤をお召しになつて」の意の敬語と見ても通じなくはない、その位な思想上の矛盾はいくらもある。

衛士のたく火も月の名だてにやとて、安福殿へ渡らせたまふ。忠定中將、晝の御座の御佩刀をとりて參る。殿上のかみの戸を出でさせ給ひて、無名門より、右近の陣の前を過ぎさせ給へば、遣水に月の映れる、いとおもしろし。安福殿の釣殿に床子たてて、東

面におはします。上達部は簀子の高欄にせなかおしあてつゝ、殿上人は庭に候ひあへるも、いと艶なり。池の御船さしよせて、左右の講師隆資爲冬乘せらる。御みきなど參るさまも、うるはしきことよりは、艶になまめかし。

【通解】衞士のたく火も却て月の名折れだらうかといふ事で、安福殿へ渡御あらせられる。忠定中將が、晝の御座の御佩刀を取つて御供申上げる。殿上の上の戸をお出ましになつて、無名門から、右近の陣の前を御通り遊ばすと、遣水に月の映つてゐるのが、實に面白い。安福殿の釣殿に御腰掛を立てて、陛下は東向にいらせられる。上達部は簀子の高欄に春中をおしあてて母屋の方に向つて坐して居り、殿上人は皆庭に侍してゐる、その趣も誠につやゝかに美しい。池の御船をさし寄せて、左右の講師たる隆資爲冬を乘せられる。御酒など召上るさまも、きちんとした御儀式よりは、却てあてやかに優雅な趣です。

【語義】○衞士　衞門府所屬の士で、夜間火を焚いて禁中を警衞する者。○月の名だて　月の名折れ。衞士の焚く火で明るさを添へると思はれては月の名折れになるだらうと思はれる程の明月だの意。つまり衞士の火が月の邪魔になるから、それの見えぬ方の安福殿に渡御あらせられたといふのであらう。○安福殿　承明門内の西に在る。○晝の御座　清涼殿の平敷で、主上が晝間出御あらせられる所。○殿上のかみの戸　殿上の間の東口の妻戸。○無名門　殿上の間から小板敷を下り紫宸殿に至る土廊にある門。○右近の陣　校書殿と安福殿との間の月華門の内に在る。○遣水　御庭内を流れる水で、所謂御講水（みかは）といふもの。○安福殿の釣殿　由來禁中には釣殿も池もないが、これは里内裏だから普通の寢殿造のやうに構へて、釣殿を以て安福殿とせられたのであらうといふ。○床子　机のやうな形の腰掛。○おしあてつゝ「おしあてて居り又」の意。○うるはしきことよりは　四角張つた本式の御宴よりも却て。

やゝむづかしいが良問題　文檢程度として絶好

人々の歌、いたくけしきばみて、とみにも奉らず、いと心もとなし。照る月なみも曇なき池の鏡に、いはねどしるき秋のなかば、げにいとことなる空の氣色に、月も傾きぬ。明方近うなりにけり。うへの御製、

鐘の音も傾く月にかこたれて、惜しと思ふ夜はこよひなりけり。

と講じあげたるほど、景陽の鐘も響を添へたる、折柄いみじうなむ。いづれもけしうはあらぬ歌ども、多く聞えしかど、御製の鐘の音にまされるは無かりしにや。

【通解】人々の歌は、大層樣子ぶつて、仲々急にも奉らず、誠に待遠しい事です。晃々と照る月も曇り

なき池の鏡に映つて、それといはずとも明かに秋の最中と知れるほどに、ほんとに格別な空の様子の中に、月も西に傾いた。明方近くなつて了つた。天子様の御製、

鐘の音も……月が西に傾くにつけて、曉を告げる鐘の音も恨めしく思はれて、一年中ほんとに惜しいと思ふ夜は、今宵であるなア。

と講じ上げてゐる頃、曉の鐘もごーんと響をそへたその趣が、場合柄實にすてきです。何れも惡くない歌が、澤山ありましたが、御製の「鐘の音」に優つてゐるのは無かつたのでせうか。

【語義】　○照る月なみ　拾遺集秋「水の上に照る月なみを數ふれば今宵ぞ秋の最中なりける」を背景とした文。「月なみ」は月次で、月の次第の意、それに「浪」を掛けた言葉の綾。○景陽の鐘云々　單に鐘の音が響いて來てといふだけの意。南史齊武裴皇后傳に、鐘を景陽樓上に置き、時刻を告げる、宮人はその鐘聲を聞いて、早起粧飾するとあるを背景にした言葉の潤色。○けしらはあらぬ　惡くはない。○御製の云々　この御製より優れた歌は一つもなかつたやうだの意。

かくて今年もまた暮れぬ。明くる春元亨二年正月三日、朝覲の行幸あり。法皇は御弟の式部卿のみこの御家、大炊御門京極常磐井殿といふにぞおはします。内裏は二條萬里小路なれば、陣の中にて、大臣以下、かちより仕うまつらる。この院も、池のすまひ、山の木立、もとよりよしあるさまなるに、時ならぬ花の梢をさへつくり添へられたれば、春の盛に變らず咲きこぼれたるに、雪さへいみじく降りて、殘る常磐木もなし。洲崎にたてる鶴のけしきも、千代をこめたる霞の洞は、誠に仙人の宮もかくやと見えたり。

「この院も」以下良問題

【通解】　斯うして今年も亦暮れた。明くる元亨二年の春、正月三日に、父君後宇多法皇を拜する朝覲の行幸があつた。法皇は御弟の式部卿恒明親王の御家の、大炊御門京極の常磐井殿といふ所にいらせられる。内裏は二條萬里小路であるので、常磐井殿も同じ郭内で、大臣以下、徒歩で御供を申上げる。この常磐井殿も、池の樣子、山の木々、固より由緒ある趣に出來てゐるのに、更に時ならぬ花の枝をさへも造り添へられたので、春の盛と變らず一杯に花が咲きこぼれた趣であるのに、その上に更に雪までも大層に降つて、一面に眞白になつて、殘つてゐる常磐木もない。洲崎に立つてゐる鶴の樣子も千代の姿で、千代の榮を籠めたお目出度い仙洞御所の有樣は、ほんとに仙人の住む宮殿もこのやうかと見えて居ります。

【語義】　○萬里小路　續史愚抄には富小路とある、拾芥抄京極圖によると、富小路は常磐井殿の隣地だが萬里小路は少し離れてゐる、本文「萬里」の二字は「富」の字の誤かといふ。

○陣の中　常磐井殿は内裏に近く、そこに衞府の陣があつて、内裏の郭内となつてゐたのである。○かちより　徒歩にて。○池のすまひ　池の有樣。○時ならぬ花　造花を木々の枝に附けられたのである。まだ正月で花の咲くべき時ではないから「時ならぬ」といふ。○殘る常磐木もなし　雪のために白く花を咲きそへた趣で、常磐木として立つてゐるのは一本もない。○洲崎　庭の池の中にさし出た處をいふ。○霞の洞　仙洞、上法皇の御所をいふ語。

當年の世相注目すべし

法皇は、やゝもすれば、大覺寺殿にのみ籠らせおはします。人々世の中のことども奏しに參りつどふ。今は一すぢに、御行にのみ御心入れ給へるに、いとうるさく思せば、

「世をしたため」以下やゝ良問題

その夏の頃、定房の大納言あづまへ遣さる。御門に天の下のことゆづり申さむの御消息なるべし。大方はいとあさましうなりはてたる世にこそあめれ。かばかりの事は、父御門の御心に、いとやすく任せぬべきものをと、めざましけれど、昨日今日始りたるにもあらず、承久よりこなたは、斯くのみなりもて來にければなめり。内に近く候ふ上達部などの、なま腹ぎたなき、わが思ふ事の滯りなどする、なほ法皇をうれはしげに思ひ奉りて、この事いかで東よりゆるし申すわざもがなと、祈りなどをさへぞしける。かくて大納言程なく歸りのぼりぬ。御心のまゝなるべく奏したりとて、院の文殿、議定所にうつされ、評定衆など、せう〳〵かはるもあり。さて世をしたゝめさせ給ふ事、いとかしこう、明らかにおはしませば、昔に恥ぢず、いとめでたし。御才もいとはしたなうものしたまへば、萬の事くもりなかめり。三史五經の御論議などもひまなし。

【通解】後宇多法皇は、やゝともすると、大覺寺殿にばかり閉ぢ籠つていらせられる。人々が世の中の事を色々と奏上のためそこへ參集する。法皇は、今では只一途に、佛道の御修行にばかり御心を入れてい

らせられるのに、斯うして世の政務に預る事は、誠に煩はしく思召されるので、その夏の頃に、定房の大納言を鎌倉へ遣はされた。天子樣に天下の政道を御讓り申さうといふ旨の御便りでありませう。大體が誠に情ない事になつて了つた世の中であると見えます。これ位の事は、もういとたやすく、父天皇の御心任せになるべき筈だのにと、心外千萬でありますが、これも昨今始つたわけでもなく、承久からこの方は、只もう斯んな風になつて來て了つたからでありませう。禁中に近仕してゐる上達部などの、心の妙にひねくれてゐる者で、自分の望み思ふ事がすら〳〵と通らなかつたりする連中は、やはり法皇の御執政を憂はしい事のやうに思ひ申上げて、この法皇の御申出の件を、何卒鎌倉から御許し申す事もあれかしと、神佛に祈禱などをさへしたのでした。斯うして大納言定房は程なく鎌倉から歸洛しました。鎌倉では、法皇の御心のまゝに遊ばして然るべきやう奏上したといふ事で、院の文殿を、議定所に移され、評定衆など、少少更迭する向もあつた。さて後醍醐天皇の世をお治め遊ばす事、誠に御立派で公明にいらせられたので、昔の聖代に恥ぢず、よく世の中が治つて、誠に結構な事です。御學才も大層なものでいらせられたので、萬事曇りなく、明かに行はれる風です。三史五經に關する御論議なども絶えず行はれる。

【語義】　○世の中のことども云々　法皇の院政であるから、政務に關する事を奏上するため人々が參集する。○大方は云々　以下「來にければなめり」迄は批判的の言葉で、天下の實權が鎌倉に移り、事巨細となく、皆鎌倉の指圖を仰がせられる世の有樣を痛歎してゐるのである。○あさましうなりはてたる　呆れはてる程になさけなくなり果てた。○かばかりの事　これ位の事。院政を親政にするといふ位の事の意。○いとやすく任せぬべきものを　たやすく任せて然るべきものを、一々鎌倉の許可を仰ぐとは何事ぞとの意。○めざまし　事の意外に目を見張つて慨歎せずにゐられぬといふ思想の語。○承久より云々　承久の昔、後鳥羽上皇の御企てが敗れて以來は、萬事皆鎌倉の制裁を受けねばならぬやうになつて來てゐるので、今度も斯樣に遊ばされたのであらうの意。○内　禁中。○なま腹ぎたなき　心のねぢけ曲つた者での意。「なま」は物の不十分な意で賤めいふ趣の接頭語。○滯りなどする　意の如くならぬ事などある者は。○いかで　何卒。○御心のまゝなるべく奏したり　政務を天皇に御讓りになる事は、法皇の御心任せで差支ありませんと、鎌倉の執政が奏上したの意。○院の文殿　院政の時、訴訟を決斷する所。○議定所　政治を議定する所。○評定衆　院の文殿に參候して議に預る者。○いとかしこう　こゝはお心の聰明といふよりも、政道のすぐれて公明なのをいふ趣と考へられる。○はしたなう　烈しく、大層なの意の用例。○萬の事くもりなかめり　萬事明かに行はれる風だ。「萬事に通曉していらせられる」といふ解は敬語のない原文の趣に合はぬ。○三史五經　三史は史記、前漢書、後漢書、五經は詩、書、易、春秋、禮記。

みな月の頃、中殿の作文せさせたまふ。題は式部大輔藤範奉る。「久しかるべきは賢人の

徳」とかや聞えしにや。女のまねぶべき事ならねば漏しつ。上達部殿上人三十餘人まねれり。關白房實殿ばかり直衣にて、御几帳のうしろに候はせ給ふ。うへは御引直衣、御琵琶立上ひかせ給ふ。うへの御琵琶の音、いひ知らずめでたし。

【通解】六月の頃、清涼殿の賦詩を遊ばされる。題は式部大輔藤範が奉る。「久しかるべきは賢人の徳」とか申しましたらうか。そんなむづかしい事は女の口眞似にも申し眞似られる事ではありませんからぬかします。上達部殿上人が三十人餘り參りました。關白房實殿ばかりは直衣で、御几帳の後に侍していらせられる。天子樣は御引直衣で、琵琶玄上をお彈き遊ばされる。天子樣の御琵琶の音が、何ともいへず御見事です。

【語義】○みな月の頃　元亨三年六月二十日。○中殿　清涼殿。○作文　詩を賦すること。○久しかるべきは賢人の徳　易の繫辭に「可レ久則賢人德、可レ大則賢人業」とある文句。○女のまねぶべき事ならねば漏しつ　そんなむづかしい事は女風情の口眞似も出來ぬ事だから申しませぬとの尼の口吻。「女の學び習ふべき事でないから聞き漏した」といふ解は、語感にぴったり來ぬやうだ。

「かやうの」以下やゝ良問題

御遊はててのち、文臺めさる。藏人内記俊基、人々の文をとりあつめて、一度に文臺の上に置く。披講の終る程に、短夜もほの〴〵と明けはてぬ。御製を左の大臣實かへすがへす誦じて、うるはしく朗詠にせらる。聲いと美くし。折ふし郭公の一聲なのりすてて過ぎたるは、いみじくえむなり。かやうのまことしき事は、かねて人々も心づかひすれば、過なかるべし。時に臨みて、俄にかたき題をたまはせて、内々詩をつくらせ、歌をよませて、かしこくおろかなると御覽じわくに、いとからい事おほく、心ゆるびなき世なり。

【通解】管絃の御遊が終つて後、文臺を召される。藏人内記俊基が、人々の詩を取り集めて、一遍に文臺の上に置く。披講の終る頃に、短夜もほの〴〵と明けて了つた。御製を、左大臣實泰が、繰返し〳〵打誦して、見事に節を附けて朗詠にせられる。その聲が實に美しい。恰度その折郭公が只一聲啼いて通つたのは、非常にどうもあてやかな氣分です。このやうな正式の事は、兼々人々も心を遣つてその用意をするから、過もないでせう。何かの場合臨時に、急にむつかしい題を下されて、公然でなく内々に詩を作らせ、

歌を詠ませて、人の賢愚を御判別遊ばされるにつけて、誠につらい事が多くて、油斷してゐられぬ世の中です。

【語義】　○文臺　作詩を認めたものを載せる臺。○内記　中務省の被官で、詔勅の草案などを書く重い役。○朗詠　曲節を附けて朗吟するのをいふ。○なのりすてて　鳴き捨てて、只一聲だけ啼いての意。○まことしき事　正式に行はれる事、本格の作詩の儀。○内々　公然本式の事でなく、只當座にの意。○しこくおろかなると御覽じわくに　これは賢い、これは愚かだと御見わけ遊ばされるのでの意。古今集序に「あるは花を戀ふとてたよりなき所にまどひ、あるは月を思ふとてしるべもなき闇にたどれる心々を見給ひて、さかしおろかなりとしろしめしけん」とあるのを背景とした趣の文。○からい事　つらい事、臣下として骨の折れる事。○心ゆるびなき　心の弛ぶ事のない、いつも油斷のならぬ。

その七月七日乞巧奠、いつの年よりも御心とどめて、かねてより、人々に歌ども召され、物の音どもも試みさせ給ふ。その夜は、例の玄象ひかせたまふ。人々の所作、ありし作文にかはらず。笛篳篥などは、殿上人ども、なる板のほどに候ひて仕うまつる。中宮も上の御局にまう上らせたまふ。御簾の内にも、琴琵琶あまたありき。播磨の守永定の女、今は左大臣の北方にて、三位殿といふも、箏彈かれけり。宮の御方の播磨の内侍も、おなじく琴彈きけるとかや。琵琶は權大納言の三位殿師奉大納言女、いみじき上手におはすれば、めでたうおもしろし。蘇香、萬秋樂、のこる手なく、幾返となくつくされたり。明けがたは、身にしむばかり、若き人々めであへり。さらでだに、秋の初風は、げにそゞろ寒きならひを、ことわりにや。

【通解】　その年の七月七日は棚機祭で、天子樣は、例年よりも一段と御心を留めて、兼々から、人々に歌を召され、音樂も下稽古をおさせ遊ばされる。その當夜は、陛下は例の玄象の琵琶をお彈き遊ばされる。人々のする事は、あの先日の賦詩の時と變りはない。笛や篳篥などは、殿上人たちが、なる板の邊に侍して吹奏する。中宮嬉子も清涼殿の御局へ御上り遊ばされる。御簾の内でも、女房たちの琴や琵琶が澤山あります。播磨の守永定の女、今は左大臣の奥方で、三位殿といふ方も、箏を彈かれました。中宮の御方の播磨の内侍も、同じく琴を彈いたとか申します。琵琶は權大納言の三位殿が、非常な名手でいらせられるので、誠に見事で面白い。蘇合、萬秋樂、殘る手もなく、技を盡して殘遍となく御彈きになつた。夜明方には、ぞつと身にしみる程に、若い人々は歎賞し合つた。只さへ、秋の初風は、ほんとにそゞろ寒いも